
銀の竜騎士団
ウサギ王女の光の王冠
The Silvery Knights of Dragon
九月文
KUTSUKIAYA
角川ビーンズ文庫

銀の竜騎士団

ウサギ王女の光の王冠

九月　文

BEANS BUNKO
17805
角川ビーンズ文庫

銀の竜騎士団

ウサギ王女の光の王冠

九月　文

17805

角川ビーンズ文庫

CONTENTS

序章
校舎上での約束
7

第1章
御前会議（こぜんかいぎ）デビュー
31

第2章
三度目の使者
53

第3章
最強の裏切り者
87

断章
陰謀（いんぼう）の陰（かげ）
125

第4章
守るべきもの
139

第5章
王女の証（あかし）
173

終章
新たな関係
204

あとがき
234



シエラ・アーシェラータ・ローレンシア

年齢:16

ローレンシアの世継ぎの王女。
ルーの誓約者。

Laurensia Dragon Knights



ルーシェ

年齢:16

黒竜隊　従騎士

シエラが竜騎士団にいる時の仮の姿。スメラギの従者。

ルー

シエラと誓約している赤竜。
時間限定で成長できる。



Characters

Laurensia Dragon knight



スメラギ

年齢:18

黒竜隊隊長

ルーシェの上官。あだ名が「死神」の最年少隊長。

Laurensia Dragon knight



シリス

年齢:19

竜騎士団団長

シエラの従兄で、空の聖竜の主。

Laurensia Dragon knight



カイト

年齢:16

黒竜隊　副官見習い

スメラギの従者で、ローレンシアの貴族出身。

イラスト／明咲トウル

序章　校舎上での約束

三時限めの講義を終えた昼下がり。
ルーシェが大学構内のオープンカフェでケーキをつついて相好をくずしていると、ぴんと背筋を伸ばしてティーカップを口にあてていたカーラが「――あら」と視線を上げた。
「めずらしいわね。青竜だなんて」
釣られてルーシェも見上げると、まばゆい青空のなかで竜が翼をひろげている。
（――あれ？　どうして青竜？）
この学園都市リューシスに駐留しているのは黒竜隊だ。ほかの隊との混成部隊ではないのでリューシスには黒竜しかいない。定期連絡の竜だろうか。
かろうじて色が判別できる程度の高さを翔んでいた青竜は、竜騎士団の砦の上空にたどりつくと優雅に旋回しながら高度を下げてきた。
徐々にその姿があきらかになり、ルーシェははっと息を呑んだ。
（あっ、あれって……！）
「大きいわねー。ルーちゃんの大きいときより二回りくらい大きいんじゃない？　そのわりにルーちゃんよりすっきり細身っぽいけれど――」

「あのっ、ごめんなさいカーラ！　今日はもう帰らなきゃ！」
とっさに鞄を手に立ち上がったルーシェだったが、カーラは事情も訊かずに「はーい、おつかれー」と手を振って見送ってくれた。

大学とは大通りを挟んだ向かいにある竜騎士団の砦、結い上げた長い銀灰色の髪をなびかせて廊下を駆け抜けたルーシェは、最奥の一室に飛び込むなり声を上げた。
「――レオンファルド隊長！」
部屋の主からは騒々しいぞと言わんばかりの冷たい視線を向けられたが、その傍らに立つ青年から返ってきたのはおだやかな微笑だった。
「おひさしぶりです、ルーシェさん」
控えめな、けれどもほわりとこちらの心が軽くなるような笑顔を向ける青年は、竜騎士団長シリスに代わって青竜隊を率いている隊長のひとり、レオンファルドだ。
年は二十代半ば、スメラギに次いで若い隊長だが、秋を感じさせる茶色の瞳はとても落ちついていて、見ているこちらまで心が和らぐ。再会するのはルーシェが前線のエルヴァに赴任して以来なので、およそ二ヶ月ぶりだ。
「おひさしぶりです、レオンファルド隊長。あの、隊長直々にリュースにいらっしゃるなんて

なにかあったんですか……？」

ローレンシア国内の砦の間は絶えず定期連絡の竜が翔んでいるが、隊長みずから訪れるなどただ事ではない。

（まさかこの前の大学紛争が問題になったとか……？）

ルーシェの通う大学では先日、リュースの独立を求める紛争が起きた。

リュースは国内最大の大学を有する学園都市として有名だが、大学の卒業生がそのままリュースに残って産業を発達させ、いまや国内有数の産業都市にもなっている。特に研究開発に強く、リュースはもはやローレンシアの下にある必要はない、国から独立すべきだといって、いままでもたびたび学生による独立運動が起きていた。

そして先日おきた独立運動では、ローレンシアの経済界にも大きな影響力を持つ大学長――〈総長〉と呼ばれるラウール老を人質に取って独立宣言をしかねないところだった。だがそれはどうやらいままでの大学紛争とは毛色がちがったらしい。いままでは街人の代弁者として行われていたはずの独立運動が今回は街人の支持を得られず、大学内だけの問題で終結した。首謀者も捕まり、処分は総長ラウールに委ねることとなり、すでに執政官のスメラギの手は離れていると聞いている。

だがなにか問題になってしまったのかもしれないと、ルーシェがどきどきしながら返答を待っていると、

「黒竜公が王都を離れられたとお聞きしましたので、ご挨拶に寄らせていただきました」
おだやかなその返答に、ルーシェはほっと胸をなでおろした。
「急な異動と大幅な組織改編でしたからね。その上あの一件ではさぞかし大変だったでしょう」
レオンファルドは、ルーシェが王女であることも、王女の身分を隠して竜騎士見習いをしていることも知っている。ルーシェの私服姿に驚く様子がないところを見ると、大学に通っていることも知っているのだろう。
「大学のほうはもうすっかり落ち着きました。ですがエルヴァはどうですか？　……あの、やっぱりあの国書の影響はありますか……？」
ローレンシアとアズィール帝国を隔てる国境のレーヌ河、その河沿いにある対アズィールの最前線がエルヴァ砦だ。レオンファルドはそのエルヴァ砦の副司令、スメラギの出自を聞いていないはずがない。
「ええ、先方からは毎日のように贈り物が届いておりますね」
「え……贈り物、ですか？」
意外な答えに、ルーシェは目を瞬かせた。
「はい。衣類、食料、装飾品をはじめ、無聊をお慰めするようにと愛玩動物まで。とてもお持ちできませんので、今日はおひとつだけお持ちしました」

レオンファルドの視線の先を追うと、執務机にひとつの箱が置いてあった。
いいですか？　とルーシェは部屋の主に目で訊ね、うながされるままに手に取ってみる。すると両手で抱えるほどの箱は、厚みがないわりに重量感があった。
革張りの蓋を開けてみると、そこにあったのは。
（装飾品……？　首飾りかしら？　それとも肩掛け？）
自分がかければ肩がすっぽり入ってしまいそうな大きさの、アズィールらしく派手派手しい金細工だ。
（この紋様、どこかで見たような……？）
アズィールは文化的に絵を描かない民族だ。文字や言葉が力を持つという信仰もあり、装飾品の模様は文字を飾りつけたようなものが多い。
「あっ、これ、たしかアルシェイド殿下がしていたのとおなじ紋様……？」
「ええ、アズィールの古語で〈皇族〉を意味する言葉だそうです」
（そうなんだ……）
純金の精緻な細工の首飾り、それはスメラギがアズィール現皇帝の皇子だと突きつけるものだった。
首飾り自体はとてつもない価値があるものなのかもしれないが、アズィール皇帝からの嫌がらせ以外のなにものでもない。

「あの……せっかくお持ちいただいて恐縮ですが、これはお持ち帰りいただけませんか？」

こんなものはスメラギも見たくないだろう。気持ちを汲んでルーシェはそれをレオンファルドに差しだしたが、間に手を挟んで遮った者がいた。――贈られた当人のスメラギだ。

「――いや、いい」

「え、どうしてですか？」

「純金製だ。売れば国庫の足しになる」

「は!?　ダメですってば！　流出がばれたりしたら国際問題になりかねませんよ!?」

「溶かせばいい。俺個人宛に勝手に送りつけてきたものだ。煮るのも焼くのも俺の勝手だろう。いいから貸せ」

「いえっ、そういうわけには……！」

すかさずスメラギの手が伸びてきて、ルーシェはあたふたしながら逃げまわる。するとすぐ側からくすくす、と忍び笑いが聞こえてきた。

「……レオンファルド隊長？」

「いえ、失礼。仲がおよろしいようで安堵いたしました」

レオンファルドには恋人同士がじゃれあっているように見えたらしい。

「そんなことないですよ!?」

とあわてて訂正したが、「そうですか」と温かい目で流されてしまった。

（隊長とお付き合いしていることもご存じなのね……）

「グレン隊長もおなじようなことをおっしゃっておいでした。『食えねぇものは換金しちまえ』と」

ルーシェはその言葉に唖然とした。――実に、らしい言い方だ。

赤竜隊長のグレンは司令として前線エルヴァ砦をあずかっている人物だが、副司令のレオンファルドとは対照的にざっくばらんな性格だ。

（一応あの方、侯爵家の跡取りのはずなんだけど……そんな大雑把で大丈夫なのかしら）

一抹の不安を覚えつつ、ルーシェはスメラギに奪い取られないよう箱を抱きしめながらレオンファルドに向き合った。

「グレン隊長はお元気ですか？」

「ええ。隊長は近々王都にもどられるご予定です。アズィールからいらしたご使者を王都にお連れしなければなりませんので」

さらりと告げられた事実に、ルーシェはほっと息を呑んだ。

（またアズィールからの使者がきた、の……？）

そこでやっとレオンファルドがリュースに立ち寄った目的に思い至った。

見渡せば、いつもスメラギの傍にいる副官見習いのカイトの姿がない。きっと人払い中だったのだ。

緊張のあまりぎゅっと箱を抱きしめるルーシェに、レオンファルドは変わらぬ穏やかな声音で衝撃の事実を伝えた。

「このたび先方が求めてきたのは、スメラギ殿下とシエラ王女殿下との婚礼です」――と。

❦

――私はご使者のご挨拶状を王都にお届けした帰りなのですが、黒竜公のお耳にも入れておくようにとの団長のご指示でしたので。

レオンファルドはそれだけ告げると、挨拶状の返書を届けるために早々にリュースを発った。

ルーシェは青空の彼方へ消えゆく青竜を執務室から見送ったものの、先ほどの一言の衝撃で頭の中はまだ呆然としている。

（アズィールが隊長とわたしの結婚を……？）

結婚――そう聞いて思い浮かぶのは、街で暮らしていたころに見かけた結婚式だ。

街人たちが取り囲む中、神殿から出てきたのは新郎と手を携えたドレス姿の新婦。

そのけがれのない晴れやかな純白のドレスには、自然と目が吸い寄せられた。

（わたしはもちろんドレスだけど、隊長はやっぱり隊服かしら？）

お披露目舞踏会のときのような黒の外套をはおった正装が凛々しくてかっこいい。

式は〈神の山〉の山頂の大聖堂もいいが、すこし古めかしいのでやっぱり王宮の神殿がいいだろう。

国中に慶事の鐘が鳴りひびき、青空に五色の竜が飛び交って祝福する。そんな中でデュラクとルーティアを傍に置いて天空神に嘉されて永遠の愛を誓いあい、そして――

「――――おい」

「えっ!?」

呼びかけに我に返るとすぐ傍らにスメラギが立っていて、空想にひたっていたルーシェは完全に不意を衝かれた。

「なっ、なにかご用ですか!?」

「ああ。さっきの結婚式の話なんだが」

(え!?　結婚式!?)

まさか心の奥を見抜かれたのだろうかとルーシェの鼓動が速まる中、スメラギが自分に艶めいた視線を落として訊ねる。

「おまえはどうしたい？」

(ど、どっ、どうしたいって……!?)

外套こそ着けていないが、いまのスメラギも隊服姿だ。

しかも今のスメラギの立ち位置は悔しくも自分の右隣、思わず新郎の姿を想像してしまい、ルーシェはかぁっと顔に血をのぼらせてあわてて口を開いた。

「しっ、式は王宮の神殿でいいと思います……！」

「――――は？」

長い長い沈黙ののち、スメラギはぽつりとそうこぼした。

呆然と見下ろしてくる目にルーシェは困惑する。

（……あ、あれ？　どうして――――ああっ！　まちがえた……!!）

スメラギが訊いていたのは結婚式の場所ではない。アズィールの使者が持ってくるという結婚話そのものだ。

「あの！　そっ、それはですね!?　それはもし結婚式をするならというあくまで仮定の話で……っ」

息せき切って訂正しようとしたが、

「馬鹿かおまえはッ!!」

すかさず落とされた雷に、ルーシェはひゃん！　と首を縮こまらせた。

「アズィールの要求を呑むなど戦わずして降伏するようなものだぞ!?　受け入れられるはずないだろうが!!　この話はなんとしても突っぱねろ!!」

雷をまき散らしたあともまだ気が収まらないのか、スメラギは苛立たしげに鼻を鳴らしていた。

（それはそう、よね……）

これは隊長のスメラギと自分の結婚ではない。〈アズィールの皇子〉と〈ローレンシアの王女〉の婚礼だ。

（突っぱねるべきだってわかってるけど、でもそんな言い方しなくても……）

スメラギはこの件を自分たちの結婚問題とはまったく捉えていない。

（それはわたしとの結婚なんてまったく考えてもいないから……？）

幸せな未来想像図を一喝で拒絶されたルーシェはスメラギをおずおずと見上げるが、「なんだ」と冷たい目に射貫かれただけだった。

次にバカなことを口にしたら承知しないぞとその目が語っている。

（やっぱり隊長はわたしとの結婚など微塵も考えていないんだ……）

泣きたい気持ちになったが、そのようなことが知れればますます軽蔑される。

（頭を切り替えなきゃ……）

「……あの、王女への婚礼申し入れの使者がきたってことは、王女が王都を離れていられる状

況じゃないと思うんです」

「まぁたしかにそうだな」

隊長が拒んでいるのは使者の申し入れだけ、自分を拒んでいるわけではない——そんなふうに自分の心を宥めてみても、泣きたい気持ちはおさまらない。

しかしルーシェは拳をぎゅっと握りしめてこらえると、うつむき気味にその決心を口にした。

「わたし……王都に帰ります」

ルーシェは寝台の上でトランクを開け、燭台の灯りをたよりに荷物を詰めはじめた。

リュースから王都までは竜の翼で一刻とかからない。ルーでも十分翔べる距離だが、護衛は必須だと言い切られて、明朝、カイトが送ってくれることになった。

——カイトには俺から適当に理由を言っておく。

そうスメラギは言っていたが、カイトにはまだ自分が王女であることを伝えていない。どういった理由で王宮まで届けてくれることになったのだろう。

（まさかカイトは隊長との縁談を断りにいくなんて思いもしないわよね。王女ってだけでなく隊長とお付き合いしていることも明かしていないわけだし……）

自分ひとりでカイトに真実を明かしたところでとうてい信じてもらえなさそうなので、隊長がいるときに一緒に――などと時機を見計らっているうちに大学紛争が起き、今度はアズィールからの使者が来てしまった。

（またアズィールからの嫌がらせ……!?）

アズィールはローレンシアをあきらめないかぎりスメラギを利用しつづけるにちがいない。ただでさえ異国生まれであるスメラギに、ますます風当たりが強くなる。

（隊長と一緒にいるためにはどうすればいいのかな……わたしは一緒にいたいのに、な……）

思い悩みながらもせっせと持ち帰る荷物を詰めていたルーシェだったが、そのうちのひとつ、ウサギのぬいぐるみの番になって、ルーシェはそれをぎゅっと抱きしめた。

このぬいぐるみはスメラギとデートしたとき、誕生日プレゼントにもらったものだ。

そのときのスメラギはまだ自分が王女だと気づいていなくて、いつか王宮に連れていくと約束してくれた――それは婚約者だと社交界に表明するというのもおなじこと、事実上のプロポーズだ。

ルーシェもその申し出を受け入れた。いまもその気持ちに変わりはない。

（……なのに）

――たとえ大公として傍にいられなくても、一人の騎士として、お傍にいたいんですって。

（隊長はわたしとの将来はあきらめたってこと？　だからあんなにきっぱり断れって言ったの

……？）

胸の奥から不安とともに泣きたい気持ちが涌きあがってくる。

――王都に帰ると伝えたあと、スメラギは引き止めることなく「そうか」と肯いた。

王女として王都にもどるのは当然の義務、引き止められたところで帰ることに変わりはないが、王都に帰ればリュースに残るスメラギとは次いつ会えるかわからない。

もしかするともう二度とリュースにはもどってこられないかもしれない――そんな状況で別れを惜しむ言葉もなく肯かれるのはやはり寂しい。

（最後に交わした会話があれだなんてイヤ――）

そう思いながらぬいぐるみに顔を埋めていると、振動がつたわってきた。

（え、なに？）

不審に思って見下ろすと、ルーが大口をあけてぬいぐるみにぱくりとかぶりついていて、ルーシェの顔からさーっと血の気がひいた。

「こ、こらっ、かじっちゃダメじゃない！」

ルーシェはあわてて取り上げるが、ぬいぐるみの足が大きかったためかルーはふにふにと噛んでいただけでぬいぐるみに傷はなかった。

ルーシェはほっと息をついたが、おもちゃを取り上げられたルーは恨みがましそうな目で見あげている。ルーシェが「めっ」と叱るとそのまま寝台の上で身体を丸めて寝てしまった。

「ルーの寝場所はあっちでしょ。こんなところにいたら一緒に鞄に詰めちゃうわよ」
そう言っても退く気配はない。完全に不貞寝だ。どうやらルーには不満があったらしい。
（あ……もしかしてルーはわたしの気を引こうとしていたの？）
言葉はわからなくても心は伝わる。ルーシェが泣いていると、ルーはいつも近づいてきて甘えて慰めてくれた。
（いまも落ち込んでいるわたしをなぐさめようとしてくれていた、とか……？）
そう思いいたり、「ルー？」とやさしく呼びかけるとルーはぱっと顔を上げた。――が。
「――ルーシェ」
不意に扉の向こうから聞こえた声音に、ルーシェの鼓動が跳ねた。
（隊長！）
「準備はすすんでいるか？」
「あ、はっ、はい！　もうすぐ終わります！」
まだ寝台の上には詰め終えていない荷物が散乱していたが、ルーシェはあわてて掛け布をかぶせてあわてて扉へ向かった。荷物と一緒に掛け布の下敷きになってしまったルーが「うきゃっ!?」と声を上げたがそれも無視だ。
「あのっ、なにかご用でしょうか!?」
すこしどきどきしながら扉を押しあけると、隊服姿のスメラギがいた。スメラギがルーシェ

の部屋を訪ねてくるのは二度めだが、こうして応じるのは初めてだ。
（でも、おっ、お付き合いしているとはいえ部屋に入っていただくのは……！）
しかももう夜も遅い時間だ。さすがにそれはよくないんじゃないかな……などと逡巡していたルーシェだが、話の風向きはちがった。
「ちょっと出られるか？」
「――え？」

どこに行くとも告げられないままルーシェがついてゆくと、廊下の先の露台にデュラクが待っていた。
そしてスメラギとともにデュラクにまたがったが、翔んだのはほんのひとはばたき――ついた先は、大通りを挟んだ大学校舎の屋上だ。
夜の大学にいるのは実験や観察などで泊まり込みの理系学生のみ、文系の学部棟は無人だ。しかし建物の位置を示すためにかがり火が焚かれていてほんのりと明るく、人目を避けて会うには恰好の場所だった。
だがルーシェを降ろしてからもスメラギはデュラクを空に返そうとはしなかった。どれだけ人気がなくとも、ふたりとも外では護衛をはずせない立場だ。

（明日からわたしは王女、隊長だって王都に来たら皇子、だから……）

黒竜隊長と竜騎士見習い、その関係でいられるのは今晩だけ――そう思うと胸の奥がきゅっと締めつけられた。

「……あの、なにかお話でしょうか」

「いや、話というほどでもないが……またひとりで泣いているんじゃないかと思って、な」

「えっ!?」

以前部屋に引きこもってしまったことを思い出したルーシェは、顔が熱るのを感じた。

「なっ、泣いてなんかいません！」

「だが耳がしょげているぞ」

「これは耳じゃなく……！」

反論しようとルーシェが顔を上げるとそこにあったのはスメラギの真剣な眼差しで、ルーシェが思わず見入っていると、スメラギは重々しく口をひらいた。

「――おまえが王都に帰っても、俺は王都には入れない」

その一言にルーシェははっと息を呑んだ。

「アズィールの使者の前に俺が姿をさらせば、ローレンシアは俺を皇子として扱わざるを得ない。公式の場で一度でもそう扱えば、使者が帰ったからといって元の待遇にもどるわけじゃない。俺は王都にいてはいけない人間だ。必然王都のおまえと会えなくなる」

「そんな！　わたしちゃんともどってきます！　リュースに、いえ隊長のいる場所に……！」
するとスメラギは穏やかに目を細め、「ああ、わかっている」とルーシェの頭をなでた。
「俺はここで待っている。だから不安の種は全部ここに置いていけ。
――ひとりで抱えこむな」
「――！」
――ひとりで泣くな。
そう言われたときの声音と重なって聞こえた。
それは大学の紛争から一夜明けて、学長室の前で告げられた言葉だ。
スメラギの縁談をカーラに知らされてもスメラギに本当のことを訊けずにいた――これはそのあやまちをくり返したくないというスメラギの意思表示だ。
（ちゃんと、訊いておかなきゃ）
心は移り変わるもの。そうわかっているけれど、いまこの時点の想いを知りたい。――もう、すれちがうことのないように。
ルーシェはきゅっと拳をにぎりしめて口をひらいた。
「……隊長、わたしのこと、どう……思ってますか？」
「なに？」
「もし、すべてのしがらみが片づいたら……大公になって、くださいますか」

うつむくルーシェの前で、スメラギが息を呑んだのがわかった。
いつもこちらから想いを告げるばかりで、スメラギの胸中を訊ねたことはなかった。ときどきこぼれ落ちる言葉の欠片を拾うだけで幸せだった。
けれどこれからしばらく自分たちは会えない。会えない間も信じつづけるためのなにかがほしかった。
（……怖い）
自分が想いを告げるより、訊くほうがずっと怖い。
ルーシェが強く目を閉じると、耳の奥で痛いほどの鼓動が聞こえる。時が止まってしまったかのように感じられる中で、その鼓動の音だけがたしかに時が流れつづけていることを告げている。
鼓動の音を数えながら待っていると、やがてスメラギがぽつりと漏らした。
「……これからもずっと、おまえに傍にいてほしいと思っている」
その一言に息が止まるかと思った。
「俺は大公殿下に救われて、デュラクを授かって、おまえを守るために今ここにいるんだと思う。……だがいまの俺は、おまえの傍にいさせてもらうのがやっとの状況だ。どうして俺なんだ？　もっとふさわしい奴がいるだろう」
「いません、そんな人……！」

ルーシェは弾かれたように顔を上げて言葉を接いだ。
「ふさわしいとかふさわしくないとか関係ないです！　わたしの心がそう告げているんです！　わたしは隊長にずっと傍にいてほしいです。ずっとずっと一番ちかくにいてください……！」
終盤、涙声になったがルーシェは一息に言い切った。
涙で視界がにじみはじめたが目を逸らさずにじっと見上げる。するとスメラギがかすかに視線をそらした。
（断られ、る……？）
そんな直感がよぎり、身体中に震えが駆け抜ける――そのとき、なんの前触れもなく無言で抱き寄せられた。
「隊、長……？」
「すまない――おまえが不安なのは俺が揺らいでいるせいなんだろうな」
「え、そんな……っ」
「わかっているんだ。だが今の俺はおまえの願いに対して誓いを立てられない。責任の持てない未来の約束をおまえにやるわけにはいかない」
「……！」
スメラギは十八だがもう騎士叙任を受けた立派な大人だ。すでに社会的責任を負った者として、ちゃんと先を考えていればこその言葉だった。

大公になりたいと口にはできない。けれどもなりたくないわけではないのだと、抱き寄せる腕の強さが伝えていた。

「本当なら期待させてもいけないのかもしれない。けれどこれだけは言わせてくれ。

――この先ずっと、俺の一番ちかくにいるのはおまえだ」

はっと顔を上げると、いつになく穏やかなスメラギの目があった。

「俺はおまえの一番ちかくにいられないかもしれない。けれど、俺はいつでも一番に考えているから」

――たとえ大公になれなくても。

（そういう、意味……？）

心をもらった。この上なく大切な言葉を。――けれど。

「わたしは、隊長が誰かと幸せになる未来を奪いたいんじゃないんです！　わたしは――」

「――一緒に幸せになりたいんです、だろう？」

息せき切って接ごうとした言葉の先を奪われ、目を見開くルーシェの前でスメラギは「おまえはわがままだからな」と目を細めた。

「おまえは欲しいものに純粋で、あきらめることも妥協することもない。そして結果を引き寄せようと現実に立ち向かうその強さがとてもまぶしくて――俺はいつもおまえに力をもらっている気がする」

「そんな……隊長こそなんでもできて、いつも守ってくださって……」
「俺ができるのはそれくらいだからな。――だが今回、俺はおまえの傍で守ってやることはできない」
　すると不安な想いが面に出てしまったのだろう。スメラギはしかたないなというような笑みを浮かべた。
「けれど今回、おまえが王都にもどるのは別れるためじゃない」
「……え？」
「未来を摑みとるためだ。そうだろう？」
（――あ！）
　漆黒の瞳を通じて強い想いが流れ込んできて、ルーシェはこくんとうなずいた。
「よし。じゃあ望む未来を摑んでこい」
――おまえはなにも心配せずに行ってこい。
――俺はここでちゃんと待っているから。
　なによりも強い無言の声援をもらい、胸の中が温かなもので満たされる。
「――はい」
　優しい視線が交わってふたりの唇が惹かれあう。そして、これから離れる時を埋めるようにゆっくりと重なりあった。



翌朝、まだ夜も明けぬ頃にルーシェはカイトとともに王都へと翔び立った。朝日が昇りはじめたのはふたりが王都上空にさしかかった頃のことだ。

そしてルーシェはふたたび王宮に降り立った。――黒竜隊の異動からわずか半月後のことだった。

第1章

御前会議デビュー

身を清め、王女姿に衣装を整えたルーシェ――シエラは、高いヒールで厚みのある絨毯をぐいぐいと踏みしめながらその人物に与えられた一室へとむかった。

部屋の扉の前には衛士がいたが、苛立ちを隠さない王女をそれ以上刺激しないようにそそくさと道を譲る。

そうして開け放たれた扉の向こう、朝のさわやかな陽光が満たす室内にいたのは、とてもよく知る白隊服姿の青年――シリスだった。

「やぁ、おかえり」

白大理石の卓子、その上の白磁の花瓶にはあふれんばかりの色あざやかな薔薇が活けられている。その傍らでティーカップを傾けるシリスの姿は優雅そのもの、ここが王宮であることをいやでも認めざるをえない。

「思いのほか短くなっちゃったけど、ラギ君との赴任生活は楽しかった？」

イヤミ!?　とシエラは睨みつけたが、シリスには笑顔で流された。

「ほらほら、かりかりしないの。アズィールから使者が来ちゃったのは俺のせいじゃないし」

「わかってるわよ！」

「じゃあなにを怒ってるの」
「今日の御前会議よ！　どうしてすでに私が出席することになってるわけ!?」
シエラはリュースからこっそり帰ってきたにもかかわらず、湯あみからドレスからなにからなにまで準備がしてあった。
さすがに王宮の女官たちは優秀ね――などと思っていたのだが、訊いてみれば、
『王女殿下が今日の御前会議にご出席なさるとシリス様がおっしゃっておいででしたので……』とのこと。
さも当然のように出席を手配していたシリスの前で、シエラはばん、と卓子に両手をついた。
「出ろとも出るとも一言も言ってないわよね!?」
「だって出るでしょ？」
なんの疑問の余地もないようなシリスの返答に、シエラは言葉をなくした。
「なんのためにレオンファルドをリュースに寄らせたと思ってるの。アズィールから使者がやってきて、しかもその内容を聞きつけたら君は当然帰ってくるでしょ。まさか無視する気だったわけじゃないよね？」
「レオンファルド隊長に会えたのは偶然よ!?」
「直に会ってなくても、使者の要望を聞いたらラギ君は君に話をするよね。そうしたらどのみち君は帰ってくるよ」

シリスの頭の中では、今日王宮にシエラが帰っていることは既定事実だったということだ。

だがいけしゃあしゃあと言ってのけて優雅にカップを口にはこぶシリスに、シエラの神経は逆撫でされた。

（シ～～リ～～ス～～～～！）

昔から、この従兄は頭がいいのでは？　とうっすら思っていたのだが、必要以上によく回る頭の持ち主だ。そしてシリスの思惑どおりシエラは御前会議に出るしかない――というか、根回しのおかげでシエラも御前会議の様子を見ることができるのはありがたい。

しかし素直に礼を言うのも癪なので、シエラは苛立たしげにシリスの正面の席に腰を下ろした。

「使者の要望はもう貴族たちの耳に入っているんでしょ？　貴族たちはどんな様子？」

「彼らにとっては王宮の政治がすべてだからね。とりあえずいまラギ君は王都にいないし、王宮にいない相手にそんなに神経を尖らせることもない。過激な排斥の動きは見られないよ」

「でもそれって隊長が王宮にいないことが大前提よね？」

「そうだね」

黒竜公であるスメラギは本来ならば御前会議にいてしかるべき立場だ。しかし隊長以上竜公未満、それがいまのスメラギの立ち位置になっている。

（本来なら四侯の上にいる人なのに……！）

怒りに拳に力が入りかけて、あせっちゃダメ、とシエラは自分に言い聞かせた。
「貴族たちを抑える方法は考えてあるの？」
「考えてなくもないけど、その前に聞かせてもらえるかな。――君はこのアズィールの申し入れをどうしたい？」
シリスの口調はやわらかなまま、今日の夕食の要望を尋ねるような気安さだ。
だが訊いている内容はまったく優しくない。シエラはすこし身を硬くして、
「――断固拒否するわ」
そう答えるとシリスは驚いた表情を見せた。
「へぇ？　相手はラギ君なのに？　申し出に乗っちゃえば君の悩みは一気に解決するよ？」
「ちがうわ。先方が言っているのは、アズィール帝国皇子のスメラギ殿下でしょ」
たしかにアズィールの要望を呑む形で婚約をとりつければ、スメラギが異民族であることを問題にせずに大公位に据えることができる。
しかし黒竜公としてのスメラギとアズィール皇子としてのスメラギは、おなじ一個人だとしても政治的意味合いがまったくちがう。
「受け入れられるわけないじゃない。アズィールにはきっちりお断り申し上げるわ」
するとシリスはいつもの余裕の笑みを浮かべながら「ふぅん、そうなんだ」と流した。
「じゃあ次、どういった理由で断ろうか？　ただ貴国とつながりを持ちたくないからだなんて

言ったら宣戦布告もおなじだよ」
「……それを迷っているの」
アズィールが求めているのは隷属ではなく、あくまで皇子との結婚にすぎない。結婚を受け入れればその後の内政干渉は火を見るよりあきらか、しかしそれを表向きの理由にしてしまっては『貴国を信頼できないので受け入れられない』と明言しているのもおなじだ。
「なにか角を立てない言い訳はないかしら……てっとり早いのは私の縁談がもう決まっているとかなんだけど」
「じゃあ俺と婚約していることにする？」
そう告げるとシリスはにこにこと満面の笑みを浮かべた。
シリスのやわらかな銀の髪は陽光をはらんで、後光が射しているような気さえする――が、さわやかすぎて逆にあやしい。
眩暈のような、頭痛にも似た疲れがどっと押し寄せてきて、シエラは額を押さえた。
「……やめておくわ」
すると「えっ、どうして？」とシリスは驚きに目を丸くした。
「俺と仮に婚約したことにするのもイヤ？」
血統、容姿、肩書、理性、知性、それらを総合して勘案すればこれ以上ない相手だ。内外ともにもっとも丸く収まる相手にちがいない。

（……けれど）

だからこそ一度利用すればこの婚約話はずっとついてまわる。話は婚約に止まらず、四侯が結託して結婚まで押し切るかもしれない。

しかしそれは面に出さないまま、

「あなたとの婚約が嫌ってわけじゃないわ。だけどその隙に隊長に他の縁談がいったりしたら嫌だから」

そう澄まして告げると、シリスは苦笑を浮かべた。

「リュースの経験が活きたかな」

「経験……？　ってあれもシリスの陰謀だったの!?」

先日、リュースでスメラギに婚約者をあてがわれそうになった。その婚約者というのが、レオンファルドがリュースを訪ねてきたときに大学で一緒にお茶を飲んでいた侯爵令嬢のカーラだ。

その話はスメラギが突っぱねてくれたからよかったようなものの、もし流されていたら本決まりになっていたかもしれない。

しかしシリスは、「あれもっていう言葉は気になるけど、ちがうよ」と否定した。

「君の娘を抱くまで死ねないって駄々をこねるご老人が多くてね」

（ああ、四侯の差し金というわけね……）

四侯と呼ばれる四人の侯爵はみな祖父の世代、中でも東侯ことフェルディナンド侯爵はシエラの祖父の弟にあたる。祖父自身はシエラが物心つく前に亡くなっているので、実質上の祖父のようなものだ。

「もうあんなことさせないわ。それとアズィールが無理に押してくるようなら内政干渉だって断固拒絶するから」

「うん、まぁそれなら合格点かな。えらいえらい。ちゃんと大学で学んできたみたいだね」

やっぱり試されていたのかとシエラがひとつ息をつくと、シリスは「これからが本番だよ」とすかさず気の緩みを指摘して、にっこり微笑んだ。

「じゃあいきなりだけど、まずは初戦、いってみようか」

御前会議は、あらかじめ提出されていた議案から順に粛々と処理されてゆく。

それを王族用の控えの間で聞きながら待っていたシエラだったが、

「本日最後の議題は臨時案件となります。アズィール帝国よりいらっしゃるご使者の要望について、審議をはじめます」

と議事進行役の声が漏れ聞こえて、背筋に緊張が走った。

「その件について、当事者である娘から一言あるそうよ」

母である女王セレネの軽やかな声がして、シエラの眼前の扉が侍従たちによって押し開かれた。

シエラはぴんと背筋を伸ばし、両手で扇をにぎって粛々と歩み出る。女王を除いた出席者がみな頭を垂れる中、長いドレスの裾をすすと引いて歩を進め、女王の前で深々と腰を落として一礼し、シエラが女王の傍らの席の前に立つと同時に貴族たちは面を上げた。

シエラは口端をやわらかく上げて微笑を浮かべると、貴族たちをゆっくりと見渡してから口をひらいた。

「私は修学中の身にございますが、このたびのアズィールの申し出が私の夫に関わることと聞きおよび、特別に御前会議への出席を許可していただきました。まずはこの場に参席させていただいたことを御礼申し上げます」

いつもより落ち着いた幅のある発声でシエラがゆったりと述べると、ほぅと貴族たちの感歎の息が聞こえた。王女としての立居に合格点が出たといったところだろうか。

自分はこの場における最年少だが、貴族の上に立つ王族だ。感情的になってはいけないし感情を悟られるようなしぐさを出してもいけない。

ルーシェとしての自分を封印して、シエラは言葉を継いだ。

「結論から申し上げますと、私はアズィールの申し入れを受け入れる意思はございません」

その明言に、一瞬議場内がざわめいた。
「それはけっして黒竜公の人格を否定するものではありません。ただ、アズィールの皇子としてアズィールに申し入れられる形でのお話は受け入れることはできかねる、そう申し上げているのです」
「ふむ、ではアズィールにはどうご返答なされるおつもりですかな」
齢六十ばかり、白の長髪をたくわえた居丈の高い男が問うた。
西侯ことセルヴァンテス侯爵――カーラの父だ。
（ということはカーラと隊長の縁談に当然絡んでいたってことよね！）
おかげで恋人を奪われかねないところだったが、セルヴァンテス侯爵も自分がスメラギと付き合っていることを知らないのだから恨むのも筋ちがいだ。
シエラは恨みなど微塵も感じさせないおだやかな目をセルヴァンテス侯爵に向けた。
「我が国の王女の結婚は本人の意思によるもの、政略で定めるものではないことをアズィールのご使者にご理解いただくのがよろしいかと存じますわ」
「我が国は聖女の遺言を守ってまいりましたが他国の王族の婚姻は政略が基本、アズィールにそう易々とご理解いただけますかな」
「たとえ難くとも、我が国と友好を求めるならば我が国の伝統を是非ともご理解いただかねばなりません。そして、その意を伝えるのは黒竜公がふさわしいと考えております」

「黒竜公……にございますか？」
渦中の黒竜公当人の指名に、議場内がどよめいた。
「ええ。アズィール皇帝みずからが皇子と認めた以上、ご使者にとって黒竜公は主筋、その意思は無視できないはずです。
先方から与えられた地位ではありますが、こちらが利用させていただいてもよろしいのではないでしょうか？」
したたかさを見せつけるために微笑んで見せると、周囲から感嘆の息が漏れた。
セルヴァンテス侯も大きくうなずいている。
（乗ってきた……！）
「では――」
そうシエラが話をまとめかけたところで、「お待ちください」とさえぎる声があった。
（……誰？）
二十代後半の若い男だ。がっしりとした体つきで、その首筋はあきらかに鍛えられたものだ。太い喉から紡がれた低い声音は落ちついていて、どこか生真面目そうな印象も受けた。
（この顔、どこかで見たような……）
そう思ったが、お披露目舞踏会のときに名だたる貴族みなの挨拶を受けている。一度見ただけなら名までは憶えていなくても無理もない。



席を見ると、その者がいたのはセルヴァンテス侯爵の隣――四侯の席だった。
四侯ならば第三皇子アシュアが訪れたときの晩餐会で顔を見ているが、このような青年はいなかった。
（不在なのは――北侯？　年齢からしてご子息かしら）
北侯ことルクセンドア侯爵の関係者らしき青年がゆったりと立ち上がる。
かなりの上背がある。シリスより高いかもしれない。
輝く金の髪に深い藍の瞳はまぎれもなく貴族の血統を示していたが、鍛えているためか貴族らしからぬ立派な肩幅で、重々しい威圧感があった。
「黒竜公は〈闇〉の聖竜の主、黒竜すべてを統べられる方です。殿下も竜の主ならばそれがどれほどの力か想像できましょう。そして王都に入れるなどどれほど危険なことか――せっかく王都から追い出したものを呼びもどすなど許しがたいことです」
よどみなく紡がれる声音は低く艶めいていて耳触りがよい。――だが、言葉の中身は最悪だった。
（誰が追い出されたですって!?）
すぐさまシエラはシリスに視線を向け、
「竜騎士団長、追い出したというのは本当ですか」
そう下問したが、シリスは穏やかな表情をくずすことなく、

「結果をどう受け取るかは人それぞれですよ、殿下」
　といともあっさりはぐらかされた。さすがに場数を踏んでいるだけある。
（そして手助けしてくれる様子はなし、と……自力で乗り切れってことね）
　シエラは人前で睨みつけるわけにはいかないため目に力を入れてシリスを凝視したあと、青年に向きなおった。
「貴公は黒竜公が危険だとおっしゃいますが、なにをもってそうおっしゃるのかしら」
「黒竜公はアズィール皇帝の血を引く方、いままさに殿下に婚礼を押しつけてくるような国の縁者に王都の命運をにぎられるなどあってはならないことです。このたびの異動で王都防衛の任からはずれたことでどれだけの民が安堵したことでしょう」
　青年は感情的になることなく表情で誇張することもなく、ただ現実のみを訥々と返した。
　シエラも負けじと、
「黒竜公の新たな配属先であるリュースは、我が国における重要な産業都市であるとともに、貴重な人材育成の場、まぎれもなく我が国の中核をなす街です。そのリュースを流刑地のようにおとしめるような発言はいかがなものかと思われますが？」
　そう言い返すが、まるで厳を相手に話している気分だ。
「リュースはたしかに我が国の要、しかし王都とくらべるわけにはまいりません。王都はほかならぬ女王陛下と王女殿下のおわす聖域なのですから」

王族という立場を逆手にとって反論され、シエラは内心で苦虫を噛みつぶした。

青年の顔つきは才走った印象はない。だが鈍い巌かと思いきや、正論という鉄壁の盾を持ちながら、逆の手で槍を突き出してくるだけの機転もきくらしい。

（しかもこの落ちつきっぷりはなに!?）

青年の年は二十代後半、重々しい印象から年嵩に感じるが三十には届いていないだろう。けれども彼の芯にはまったくぶれがない。シエラに切りかえしたあとも、青年の面にはしてやったりという感はなかった。

その後も反論の余地のない鉄壁の正論を展開してきて、シエラは有効な反論が見当たらず防戦一方となった。王宮では軽薄な笑みと円舞曲のようにくるくるとよくまわる口で立ちまわる者が多いというのに、まったく真逆のめずらしい人種だ。

「ここでまた、アズィールの使者が訪れるというこのときに黒竜公を王都に招き入れては、いたずらに王都の民の不安を煽りかねません。

王女殿下におかれましてはつつしんでご再考いただきますよう願いたてまつります」

そう告げて礼にのっとってゆっくりと頭を下げる青年に、シエラは反論の言葉が見つからなかった。

「――誰よあれ!?」

私室にもどるなり怒りをぶちまけたシエラに、おかえりーと近づきかけていたルーがびくっと身を引いた。

「なんなのあの人!?　よくも隊長をお払い箱のように言えたものね!?　いったい何様!?」

「北侯ルクセンドア侯爵家の長男、カディナ伯ヴィクトールだよ」

あとからついて入ってきたシリスの言に、シエラは目を瞬かせた。

「……ヴィクトール？」

あの厳にふさわしい堅い名だと思ったが、まったく聞きおぼえがない。

「前の舞踏会のときにいた？」

「そういえばいなかったかな。最近あまり社交界に顔を出していないみたいだし」

たしかにあの男が舞踏会であの立派な眉を下げて、にこやかに貴婦人に声をかけて談笑している姿は想像できない。ひとりで露台に出て、じっと無言で山と見つめあっているのがお似合いだ。

「でも君とまったく縁がないわけじゃないよ。彼はナッシュ・ハーヴェイの兄といったほうが

わかりやすいかな」

「ナッシュ・ハーヴェイ!?」

それは竜騎士団の警務隊に所属していた青年で、かつて自分を――いや、スメラギの従者であるルーシェを殺そうとした男だ。

たしかに兄弟と言われれば納得できる顔つきだ。ナッシュ・ハーヴェイの面影とかぶって、彼と会ったことがあるような錯覚を起こしていたらしい。

「あら、でも姓がちがう……？」

カディナ伯はルクセンドア侯爵の後継者にあたえられる爵位で、彼の姓はルクセンドアのままのはずだ。しかしナッシュは別の家であるハーヴェイ子爵家を名乗っている。

「ハーヴェイ子爵家はルクセンドア侯爵家の分家筋なんだけど、当主の子が誰も竜を授からなくてね。しかたがないから主家筋のナッシュが婿に入ったんだよ。ナッシュは次男だったからね」

貴族が自身の血統に天空神の加護を残すために、竜の主である竜騎士を婿に迎える――ままあることだ。

「じゃあヴィクトールも竜を授かっているわけね」

（けれど、竜騎士とはあまりに雰囲気がちがうような……？）

侯爵家の跡取りとして学舎には入っていないせいだろうか。それにしてもなにかちがうと思

っていると、シリスがさっくり告げた。
「いや、授かってないよ」
「え!?」
「たしかヴィクトールは授からなかったから、陸軍士官学校を出てるんじゃないかな」
「え、じゃあ授かった弟じゃなくて授かってない兄が跡継ぎになったってこと？」
竜の加護を得て聖女の末裔が王位につき、元聖竜の主の末裔が四侯としてその治世を支える――それがローレンシアのあり方だ。聖女の御世から数百年、竜のいない当主もめずらしくはないが、授かった兄弟がいるならそちらを跡継ぎに据えるのが通例だ。
しかしルクセンドア侯は、竜を授かった次男ではなく長男のヴィクトールを跡継ぎに選んだ。
「まぁ実の弟が授かってるわけだし、彼にも素質はあると踏んで次世代に期待ってところだったんじゃないかな。彼の奥方が竜を授かっていたしね」
「……結婚していらっしゃるの？」
あの巌に妻がいる――しかも子供もいてもおかしくない年だが、どうしても子どもをあやしている姿が想像できなかった。
（それにどうして、授かっていたなの？）
聖獣である竜が主より先に死ぬこともあるが、きわめて稀だ。
（まさか……）

脳裏をある可能性がよぎり、遠慮気味に尋ねてみると危惧していた答えが返ってきた。

「早々に亡くなられたけどね」

（そっか……奥さまに先立たれちゃったのね……）

四侯に数えられる侯爵家が二代つづけて竜を授からない——天空神の加護がないのはゆゆしき事態だ。ヴィクトールは次代のために、竜の加護が厚い血統から後妻を迎えなければならない。

「ねぇシリス、ナッシュ・ハーヴェイは純粋な〈貴族派〉だったのよね？」

「まぁ、そうだね」

〈貴族派〉というのは、長年政治を預かることで貴族が蓄積してきた知識や方法を活かすべき、と考える者たちのことだ。

その考えの根底には、貴族は何百年にもわたって天空神の加護を得つづけてきた——つまり、貴族は天空神の意に沿う存在だという自負があり、彼らは血統を重んじる傾向がある。

「じゃあヴィクトールはどうなの？」

するとシリスは「へぇ、そういうことも考えるようになったんだ」と感心したようにうなずいていた。

「ヴィクトールもまぁ、純粋な貴族派といえばそうかな。でも俺と君の結婚は望んでいないみたいだけど」

「え？　兄弟で目的がちがうの？」

ルーシェがナッシュに狙われた理由は、シリスの婚約者候補と勘違いされたためだ。

彼は王女シエラと王族シリスが結婚することで、聖女の正しい血統を後世に伝えるべきと考えており、シリスの婚約者候補であるルーシェが邪魔だった。

――それはルーシェとシエラが同一人物だと知っていたなら起きなかったはずの事件だ。だが当時のルーはまだ成体化できず、半人前どころかまったく竜が育っていない自分を王女だと知られるわけにはいかなかった。

「兄弟っていっても七歳から完全に道がちがうわけだし」

竜を授かった弟ナッシュは神学校に、授からなかった兄ヴィクトールは士官学校に進んだ。しかし神学校卒業生の竜騎士と士官学校卒業生の陸軍士官は、現場での指揮権の関係上あまり折り合いがよくない。

「じゃあ貴族として異国民の隊長を嫌がっているうえに、士官学校卒として竜騎士である隊長を毛嫌いしているわけね」

彼の生まれ育った土壌自体が、スメラギ排斥に傾いてもしかたないものだったのだ。

（けれど北侯ご自身はそんな感じじゃなかったのに……）

北侯で思い浮かぶのは、温和な――そしてどこか気弱な笑みだ。もともと覇気がある人ではなく、彼の竜もやっと成体と認められる程度の大きさしかなかったが、その笑みには人の良さ

がにじみでていた。
対してヴィクトールは目や髪の色は父譲りのようだが、まとう空気はまったく似ていない。あの他人を拒絶する空気はスメラギのようにぴんと張りつめたものではなく、ずん、と重い威圧感がある。
（あの人は隊長を拒絶して、いったいなにをしようとしているの……？）
「まぁ、ラギ君を呼びもどすかどうかの検討はあとまわしだね。夕刻前には使者がつくから君も準備が必要だろうし」
「え!?　ご使者は今日いらっしゃるの!?」
「うん。これでもグレンにゆっくり翔んでくるように言って時間稼ぎしたんだよ」
赤竜隊長グレンが使者を連れて王都にくる――そうレオンファルドも言っていた。
「アズィールの使者ってどのような方なの？」
「その話もあとでね。一度顔を見てからの方が話しやすいと思うし」
それもそうねと肯いてシエラは別室に移って昼食を取り、衣装を着替えて化粧を整えてもらった。
そうして待つこと半時。報せを受けてシエラが中庭へと出ると、迎えの竜騎士が白竜を従えて左右に列をなしていた。
竜騎士みなの敬礼を受けるなか、シエラは成竜姿のルーティアを召喚して背後に従え、青い

空の彼方からやってくる竜を待つ。ほどなく十頭ばかりの竜を視認すると、それらはまたたく間に近づいてきて、やがて中庭に降り立った。

まず先頭に降り立ったグレンがシエラの前に進み出ると、瞳の奥にいたずらっぽい光を湛えながら膝をつき、

「赤竜隊長グレン・ジーンクライ・ウィルハーグ、勅命によりアズィール帝国勅使をお連れいたしました」

ご苦労さまでした、とシエラが労いの言葉をかけるとグレンは再度頭を下げて立ち上がり、隊列にくわわった。

その後ろから竜騎士に付き添われて、長衣の裾を引きずった使者が姿を見せた。

その衣装は厚手の布にアズィール特有の派手派手しい紋様が入っており、ローレンシアの司祭もかくやという立派なものだが、それをまとう者はまだ若い。

薄めの茶褐色の頬を流れる銀糸の髪、まっすぐ艶やかなそれはひとつに結わえて肩先へ垂らしている。

年は二十歳に届くかどうか、その使者の面は優美といってよいものだったが、その者を見るなりシエラの身が強張った。

（この人……！）

しかしシエラの驚きなど気にした様子もなく使者はシエラから十歩ばかりの距離を置いて膝

を折ると、恭しく挨拶を述べた。
「殿下におかれましてはご機嫌麗しいご様子、お慶び申し上げます。
――おひさしゅうございます王女殿下」
そう告げてアズィールの使者は端整な唇にうっすらと笑みを浮かべる。
――それはシエラもよく見覚えのある人物、星読みのナシルだった。

第2章　三度目の使者

『――使者についてなにか話す必要ある？』

湧きあがる苛立ちにシエラが手元にあった扇をぎゅっと握りしめると、

「申しわけございません！　痛みがございましたか？」

と女官があわててシエラの顔を覗きこんだ。

シエラがはっと我に返ると、真正面の銀装飾に縁どられた鏡の中には王女姿の自分がいた。

（あっ、そうだった……！）

いまは晩餐会のために髪を整えてもらっている最中、そう思い出したシエラはあわてて髪結いの女官に言葉を返した。

「ううん、そんなことないわ。ごめんなさい、ちょっと考えごとをしていたの。綺麗に仕上げてくれてありがとう。これでいいわ」

顔に不安の色が残る女官にシエラは優雅に微笑みかけて部屋から下がらせる。

衣装役、化粧役、装飾役、髪結い役――とすべての女官が下がったのを確認して、シエラは燭台の灯りが揺れるほどの盛大なため息を落とした。

（あああもう……！）

先ほど思い出してしまったのは、アズィールの使者を出迎えたあと、王宮の廊下でシリスを呼び止めたときの言葉だ。そしてそのときのシリスの勝ち誇ったような顔――それを思い出すだけでまた苛立ちがむくむくと湧き上がってきた。

（シリスは使者があの人だって知ってたのね……！）

レオンファルドが使者の挨拶状を持って王都を訪れ、その返状をシリスが持たせたのだ。知らないはずがない。

（それなら先に教えてくれたっていいじゃない!!）

アズィールの国使ナシル――シエラが彼と顔を合わせるのはこれで三度目だ。

一度めは第三皇子アシュアの養育係としてシエラの姿で会い、二度めは謎の商人に扮した第二皇子ラサルスを連れもどしにきたときにルーシェの姿で会っている。

年は十七、その正体はアズィール帝都の一大学生にすぎないが、頭が切れるのでなにかと厄介な相手だ。

（でも来ちゃったものはしかたないわよね。――ナシルはともかくいまの問題はヴィクトールだわ）

女官にそれとなく訊いてみると、北侯は病で寝込んでいるらしい。もともと線の細い人だったが、ハーヴェイ家に婿入りした次男ナッシュの起こした一件でさらに内臓を病み、最近はもっぱら継嗣のヴィクトールが当主の職務を代行しているとのことだった。

晩餐会には四侯が同席する――つまり北侯の代役としてまたヴィクトールが出席してくるということだ。

（晩餐会までにすこしでも情報を仕入れておかないと）

スメラギを排斥しようとしているのはあきらかだ。しかし〈貴族派〉と言われるとどこか違和感を覚える。とはいえ大学で見た〈知識派〉ともちがう。

（このもやもやした感じ、いったいなんなのかしら……）

もうすこしヴィクトールの人となりがわかれば違和感の原因にたどり着けるような気がするのだが、悔しいことに自分の情報源はシリスしかない。

（素直に教えてくれるといいんだけれど……）

そんなことを思いながらシエラが部屋を出ると、中庭に面した廊下で声をかけられた。

「おー、お嬢か」

すっかり陽も落ちて暗くなった中庭を見やると、かがり火に照らされていたのは金の短髪に快活な面、見覚えのある隊服姿の男だった。

「グレン隊長！」

「これまた綺麗に着つけてもらったじゃないか。こうやって見るとやっぱりそういう恰好も似合うなー。やっぱり血は争えないか」

そう言ってグレンは「可愛い可愛い」と髪がくずれないようにシエラの頭を撫でた。

赤竜隊長グレンは、黒竜隊長であった父と学舎の同期で、父の幼なじみでもある。
（父様が生きていらしたらこんな感じだったのかしら……）
そう思うと胸の奥がほんのり温かくなった。
「さすがにちびは留守番か？　というかもう、でかくなっちまったのか？」
「あ、いえ、ルーはまだ不安定でほとんど小さい姿で暮らしてます。大きくなってもまだまだやっと成竜と呼べるかどうかという大きさですし」
「そっか。でもまぁおまえさんもまだ十六だ。まだまだこれからだろ。
それにしてもあいつまた来たな。若いくせに全権大使だと。何者なんだあいつ？」
レーヌ河の遭難者を迎えにきたことしか知らないグレンに、今までのナシルの経緯を説明すると「なるほどな」と頷いた。
「皇子ふたりの付き人に今回は皇帝の使者か。相当信頼されているみたいだな」
「はい……隊長は晩餐会にご出席されるんですか？」
「親父が出るから当家からさすがにふたりはいらないだろ。俺は竜公ってわけでもないし。
――ってそういやスメラギはもどってないのか？　リュースなんて呼べばすぐだろ？」
「ええ、呼ぶつもりだったんですけれど御前会議でちょっと反対されちゃって……」
「反対？　婚礼話の当事者が不在でどうするよ」
「わたしもそう思うんですけど……」

おなじ四侯の跡継ぎ同士、もしかするとグレンから情報を聞けるかもしれないと「あの」と顔を上げかけたところで、割り込む声があった。

「おや、こんなところで逢引きかい？」

廊下の向こうからやってきたのはひとりの青年だった。

年は三十に届くかどうか、瞳は宝玉のような深い青、柔和な面に伝う髪は銀に近い金糸で、さらりとしているがどこか猫っ毛ぽくもある。貴族の衣装をまとう身幅は細身で、シリスとどこか似ていながらもちがった優美さがあった。

シリスが陽光の白なら、彼は月光の白。どこか控えめでありながらも存在を無視できない。

（晩餐会の出席者かしら？）

こんな綺麗な人、一度見かけたら忘れないと思うんだけど――と青年を凝視していると、

「ご無沙汰しております！」

と傍らにいたグレンがびしっと敬礼した。

（……え、グレン隊長？）

グレンは立場こそ赤竜隊長だが隊長職の要で、実質的に団長シリスの次席だ。

貴族の席次としても南侯ウィルハーグ侯爵家の継嗣、グレンより上にいるものなど数えるほどしかないのにグレンの面にあるのは緊張そのものだ。

「グレン、ひさびさに会ったと思えば逢引きの最中とはね。若い娘がいいというならアーシャ

は返してもらうよ？」

「いえ、あの、この方はですね……」

弁明しようとしたグレンだったが、青年はさっくりと無視してシエラに向き直ると、貴族式に胸に手を当て、外見同様に優雅に一礼した。

「お初にお目にかかります王女殿下。白竜隊を預かっております リュシエルと申します」

（リュシエル？　それってたしか前任のリュース司令のお名前じゃ……）

「……えええええ!?」

思わず王女姿であることを忘れてシエラは大声を上げてしまった。

この優美な青年が竜騎士であるのはなんら問題ない――が、問題があるとすればその年齢だ。

（最年長の隊長って聞いているんだけど!?）

動揺を隠せないシエラに事情を察したらしいグレンが口許に手を当て、こそっと耳打ちした。

「――こう見えて余裕で四十超えてる」

（うそ!?）

耳打ちするグレンに「なにを言っているのかな？」と釘をさす笑顔はとても四十代のものではなかった。母も若いがその比ではない。

（これで四十過ぎって……まさか白竜の主って老いないとか……？）

驚きのあまりありえない方向に思考を走らせながら、シエラは呆然と見つめる。

（そういえば、グレン隊長の奥さまはつい最近まで白竜隊で働いていたって……）

つまりリュシエルの部下だったということだ。先ほど名が出たアーシャというのがおそらくグレンの妻の名、ルーシェとおなじ〈暁の女神〉の愛称のひとつなのでおなじ女神の加護を受けているのかもしれない。

前任者はラウール老の茶飲み友達――そう聞いていたのだが、老齢ふたりが陽だまりでほのぼのお茶をすする想像図ががらがらと音をたててくずれ落ちた。この人なら実に優雅なお茶会にちがいない。

「この前は大変でしたね。ラウール氏はご健勝ですか」

当然シエラがルーシェとしてスメラギの傍にいることも知っているのだろう。

「はい、お怪我もなくお元気にされています……あの、リュシエル隊長は晩餐会に出席されるんですか？」

「ええ、王都の警備責任者ですので」

「そうなんですね……」

それはほんの数日前までスメラギの職務だったはずのもの――それを思うと声が沈んだ。

「なんだ、不安か？　王女のふりなんてお手のものだろ？」

（ふりじゃなくて王女なんですけど……!?）

けれどそれも言い返せずに沈んでいると、グレンは「どうした？」と覗きこんできた。

「すみません……出席者の中にスメラギ隊長に手厳しい人がいて」
「出席者っていったら四侯か？　うちの親父は言いたいことざくざく言う人だけどそう厳しくもないぞ。一応学舎出身の元竜騎士だしな。西侯は学者肌で中立って感じだけど、ラウール老と仲がよさそうだからそこをこじらしてなければ大丈夫だろ。
東侯……はスメラギと付き合ってるのがばれたら鬼神と化すだろうけどまだ知らないだろうし、北侯は竜騎士になにも言わないだろ」
「その北侯です。代理出席しているのは跡継ぎらしいですけど」
「跡継ぎっつーとヴィクトールか」
あっさりその名を出したグレンに、「ご存じなんですか？」とシエラは顔を上げた。
「いや、奴が陸軍にいたころに顔をあわせたことがある程度だ。まぁとっつきにくいというか無骨というかなんというか、堅い奴だったな」
（やっぱり!?）
あの厳っぷりは昔からのようだ。
竜騎士団も規律は厳しいが、正確には軍隊ではないので陸軍ほど四面四角ではない。その竜騎士の中でも柔軟な部類のグレンとがちがちな堅物のヴィクトールでは、たしかにそりが合わなそうだ。
「でもま、団長もいることだし最悪の事態は回避できるだろ」

「私もいることだしね」
「――リュシエル隊長も助けてくださるんですか？」
「スメラギの隊長職続投を支持したのは私たちだよ」
（あっ！）
そうだった。竜騎士団の各隊長が支持を表明して署名してくれたからこそ、スメラギは隊長でいることが許されたのだ。
「つまりあいつの敵は俺たちの敵ってわけだ」
「じゃあまずは様子を見させてもらおうかな」
それはとてもおだやかな、そして心強い笑みだった。

アズィールの使者を歓待する晩餐会は、主たる用件が王女への婚礼申込みということでシエラがもてなすことになった。
図らずして第三皇子が訪問したときとおなじ形だ。
以前とちがうのは第三皇子が不在となってナシルがその席にいることと、北侯の席にヴィクトールがいること、そして。

（隊長がいない――）

スメラギがいた晩餐会はほんの数ヶ月前なのに、とても遠い日のことのように感じられる。

あのときここにいたスメラギは、いまはこの王都にすら入れないのだ。

（それも全部この人のせいよ！）

シエラがグラスを傾けながらナシルを見据えると、その視線に気がついたのかナシルは眦を下げ、グラスを掲げてシエラに会釈した。

「王女殿下にふたたびお会いできて嬉しく思います」

（よくもぬけぬけと言えるものね！）

公的にはたしかに二度だが、ルーシェとしてエルヴァで一度会っている。

そのときは、ナシルが見習い竜騎士ルーシェは王女シエラだと気づいてラサルスに知らせたのだろう。シエラはあやうくアズィールに攫われるところだった。――が、シエラは微笑を浮かべて「そうおっしゃっていただけて光栄ですわ」とにこりと返した。

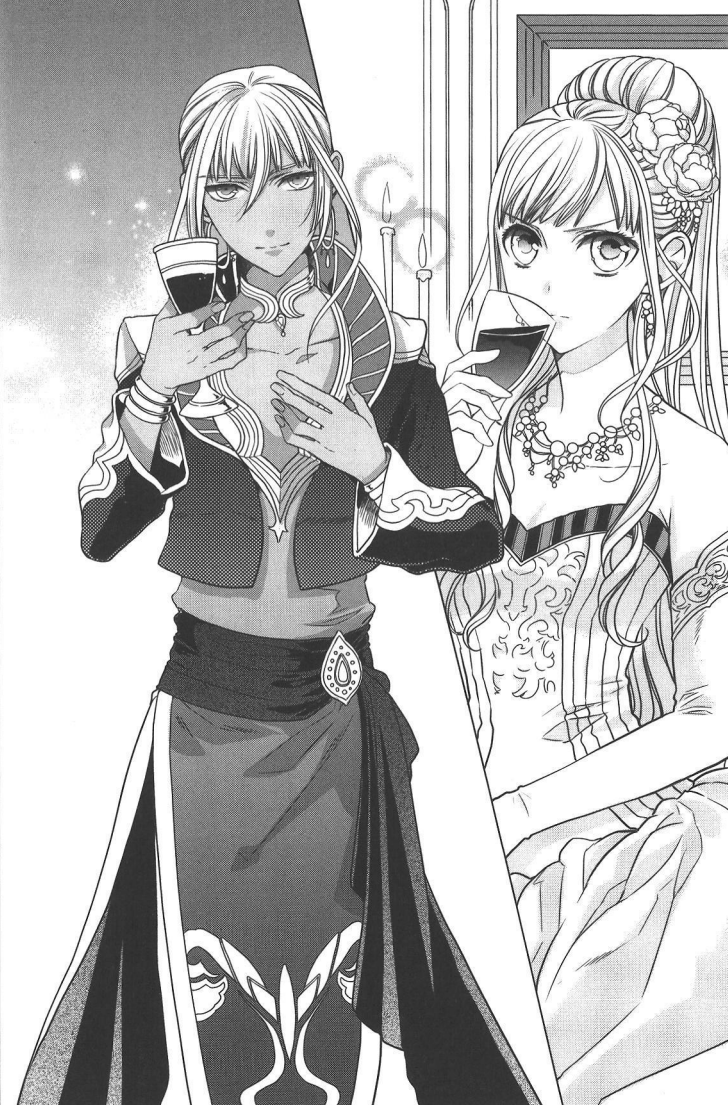
こうなればタヌキとキツネの化かしあいだ。

「皇子はお変わりなく？」

「ええ。わが主も王女殿下にもう一度お会いしたいとおっしゃっておいでした」

どっちの皇子よ!?　と思ったがもちろんおくびにも出さず、

「おなつかしいですわ。私もぜひまたお会いしたいですわ」



とにっこりと微笑んでみせると、ナシルも「主も喜びましょう」と返してきた。
「ところで黒竜公閣下がお見えにならないようですね」
（……きた）
シエラはつとめて不自然さが出ないように笑顔をたもったまま言葉を待った。
「以前、アシュア皇子ご訪問の際はいらっしゃったと記憶しておりますが？」
「黒竜公は異動となり、いまは王都から離れておりますの。こちらが後任の白竜隊長ですわ」
紹介を受けたリュシエルが遠い席で立ちあがり優雅に一礼して見せ、ナシルもまた会釈した。
「ずいぶんにわかな辞令だったようですね。それはわが国にも関係があることでしょうか」
（大ありに決まってるでしょ!?）
元はといえばアズィールがスメラギを皇子指名してきたのが原因だが、ここは我慢だ。
「それは竜騎士団の判断の範疇のことですので、私もくわしくは」
シエラはただ一言でその話題を切り上げるつもりだった。
――だがそうはさせてくれない者がいた。
「――異国の皇子に王都防衛をお任せするわけにはゆきますまい」
低い声音にその場が凍りついた。

シエラがはっと声の方向に視線を走らせると、その先にいたのはヴィクトールだ。
「――おそれいりますが、いかなる意味にございましょうか？」
返すナシルの声音はいつになく硬い。しかしヴィクトールは意に介した様子もなく、ワイングラスを揺らしながら答えた。
「申し上げたとおりの意味ですよ。異国とつながりのある者が玉座をお守りできましょうか」
その言にナシルは「失敬な！」と声を荒げた。
「たしかに黒竜公閣下は我が国の皇子、なれど長らく貴国で忠節を果たしてこられた御方にございましょう。その忠誠を疑う言動は皇子への、ひいては我が国への侮辱です」
はからずもスメラギの立場をアズィールにかばわれた形になったが、しかしそのナシルの様子を見たヴィクトールがかすかに口端を上げた。
（――！　まさかこれを狙っていたの!?）
止めさせなければ。そう思ったが、しかし激昂するナシルのほうが早かった。
ナシルは即座に立ち上がると、シエラに向きなおった。
「かような発言は我が国との信頼関係をそこねかねないもの、いますぐ撤回していただきたい。そして我が国は貴国に対し、皇子であらせられるスメラギ殿下に相応の礼をもって接していただくことを申し入れます」
（やられた……!!）

晩餐会が終わり、あたえられた宮殿にもどるまで表情を硬くしていたナシルだったが、室内の扉を閉ざして息をつくと、口端に薄い笑みが浮かんだ。

（――思わぬ成果だ）

先ほど晩餐会の場で激昂して見せたのはもちろん演技だ。

この好機を利用してナシルが申し入れたのは三点、礼を失した前言の撤回、スメラギのアズィールの皇子としての相応の扱い、そしてスメラギと直接話し合いの席を設けた上での婚礼の返答だった。

今回の訪問の第一の目的は、スメラギをアズィール皇子としてローレンシアの公式の場に出席させることだ。皇子として一度でも公式の場に出れば、以後ローレンシアはスメラギを皇子として扱わざるを得なくなる。

（そしてあの方の存在自体がローレンシアを内から割る楔となる――）

離宮に勤める実母を介してその勅命が伝えられたとき、皇帝はスメラギを使い捨てるおつもりかとナシルは怒りにふるえた。

国が逆なら――もしアズィールの軍上層部にローレンシアの王族が紛れ込んでいたなら、ま

ちがいなく即刻処刑される。

（しかしローレンシアはちがう）

過去何百年にもわたり王朝交代も領土拡大もなかったローレンシアは荒事や変革を好まず、過激な処分もよしとしない。スメラギが皇子とわかってなお除名でも降格でもなく異動処分でとどめていたのがよい証拠だ。

今回の訪問でスメラギの立場が悪化するかもしれない。しかしあの方に害が及ぶようなら自分がお守りすればいいまでのこと――そう心に決めて、ナシルは使者の任を受け入れた。

しかし、スメラギを内から割るための楔とするアズィールの意図はローレンシアに読まれていた。スメラギが王都防衛の任を外されていることは本国を発つ前から知っていたが、ローレンシアはアズィールの申し入れた婚礼、その当事者であるスメラギを晩餐会にすら出席させないという強硬手段に出てきた。

先ほどの王女の様子から察するに、王都にすら呼びもどされていないようだ。

（竜騎士団長シリス――やはりあの者か）

ナシルはぎりと歯をかみしめた。

確実に裏で糸をあやつっているのはシリスだ。だがあの者は晩餐会の会話にくわわることなく涼しい顔で食事をしていた。とんだ食わせものだ。

さて完全防御態勢のローレンシアにどうやって切り込んだものか――そう思案していたナシ

ルに思わぬ援護があった。硬直した戦況を揺さぶる発言があったのだ。

（あの者、席次からして四侯……か？）

四侯とは先のアシュア訪問のおりに顔を合わせているが、あの青年の顔は初めて見る。年齢的に子息だろうか。自分より十歳は上に見えたがそれでも四侯に連なるにはあきらかに若い。だがその目には若輩者ゆえの未熟さはなかった。

（あれは失言などではない）

あれはこちらの思惑を知った上で自分の口からローレンシアに対する要望を引き出す、そのための援護射撃だ。

（いったい何者だ……？）

そのとき、ゆるやかに吹き込んできた風に異種のなにかを感じた。

ナシルは中庭へと歩み出ると、

「――なにかご用ですか」

と問いかけたが、闇の中から返答はない。

「出てこなければここから生きては出られませんよ」

ナシルとてアズィールの国使だ。見えない場所に護衛の間者は潜んでいる。

――一呼吸が限度。それ以上は待たないと緊迫感で伝えたとき、かさ、と茂みを割って男が現れた。

年は二十代半ば、ナシルは相貌認知で変装などを見破れるし、一度見た顔は忘れない記憶力も併せ持つ。だがそれでもまったく見知らぬ男だった。

男は間を詰めることなく、茂みの前で片膝をついてナシルに礼を取った。

「主の命によりお話にまいりました、私はデュークハルトと申します」

男の名など興味はない。あるのはその裏の人物だ。

「あなたの主とは？」

静かに問いかけると、男から予想していた名が返ってきた。

「わが主はルクセンドア侯爵家継嗣、カディナ伯ヴィクトールさまにございます」

「またあの人……!!　なんなのいったい!?」

シリスの部屋に入るなりそう叫んだシエラに、

「まぁ君もなんとか丸く収めたんじゃない？」

とシリスはにこやかにそう言ったが、怒りのおさまらないシエラは吠え返した。

「ああでも言ってまとめるしかなかったの……!!」

先ほど、立ち上がって抗議したナシルに対しシエラはすぐさまその者を呼んで叱責した。

『――カディナ伯！』

その場の無礼な発言についてはヴィクトールの口から撤回させたものの、ナシルからは宿題を与えられてしまった。

スメラギをアズィールの皇子として相応に扱うこと、そしてスメラギと直接話し合いの席を設けること。

それはこの場で返答しかねるので御前会議であらためて諮ると約束し、なんとかその場は引いてもらったものの、課された宿題はあまりに重い。

スメラギを王都に呼び入れようとするだけでも難癖をつけられる状況だというのに、皇子として扱うとなればどれほどの反発を招くことか。この機にスメラギの隊長職だけではなく、デュラクまでも没収しろと言い出す輩がでてくるかもしれない。

「こういう事態を避けたくて隊長を王都から引き離したんでしょう!?　これで全部台無しじゃない！」

「まぁそうだけど。避けたい人がいれば引っ張りだしたい人もいるよね当然」

思惑は人それぞれだからね、とのほほんと返すシリスに苛立ちが増した。

「明日の御前会議は荒れるだろうねぇ」

シリスの言はまるっきり他人事、助ける気はさらさらなさそうだ。

（……ううん、はじめから助けてもらうつもりで頼ってちゃダメよね）

「隊長はこの状況じゃ王都に呼ぶのは難しいわよね？」

「無理を押しても〈貴族派〉の反対にあうだけだろうね」

「なんとか呼べたらいいんだけど……でも呼べないときにはどうやってアズィールの要求を突っぱねればいいのかしら……」

シエラが顎に指の甲を当てて思案していると、シリスがぽつりと口を挟んだ。

「ひとつ忠告」

「え？」

「闇雲にラギ君をかばおうとしないほうがいい。明日も君はルーシェじゃなくてシエラだからね？」

いたずらっぽく微笑むシリスにシエラは呑まれかけたが、あわてて我をとりもどして言葉を継いだ。

「それはわかってるけど！　そんなことを言ってたら隊長の立場は悪くなる一方じゃない！」

「――じゃあ君がいうところの立場ってなに？」

「え……？」

そう問うシリスの表情は穏やかなままだ。しかし内容はけっしてそうではなく、シエラはその真剣な眼差しに気圧された。

「なにって……」
「ラギ君を守りたいのは隊長として？　竜公(りゅうこう)として？　恋人(こいびと)として？　君が一番に守りたいのはラギ君のなに？」
「それは……」
その質問にまったく答えられないシエラに、シリスは告げた。
「あれもこれも一度に手に入るわけじゃないよ。物には順序というものがあるからね。そして欲しいものによって方策も変わってくる。
――一度、ゆっくり考えたほうがいいかもしれないね」

シリスの部屋を退出したあとも、シエラの頭の中では先ほどのシリスの言葉がぐるぐると回りつづけていた。
（隊長をかばわないほうがいい？　物には順序？　……どういう意味かしら）
いまのスメラギは隊長であり、竜公であり、恋人だ。スメラギの今の状況を守りたいと思っているのに、それではダメということだろうか？
（そして竜騎士見習(ルーシエ)いではなく王女(シエラ)って……）
それは指摘(してき)されるまでもなくわかっている。御前会議でもちゃんとシエラとしてふるまって

いるつもりだったが、シリスがいまさらの話をするはずがない。
あえて言ったということはなにか意味があるはずだ。ちゃんと心に留めておかなきゃと、シエラは胸に拳を当てた。
（それにしても考えることが多いわよね……）
スメラギの処遇、ヴィクトールへの対応策、ナシルへの返答、そしてシリスの宿題。見えているだけでもこれだけある。見えていないものはもっとたくさんあるはずだ。
街の学校にいたころは、解くべき問題があって明確な答えがあった。大学に行くと、明確な答えのない解くべき問題があった。しかし政治の舞台では、なにを解くべきかすら明確ではなく、その答えも明確なものはない。
見渡してもなにも見えない霧深い世界に、ひとり放り込まれたような気分だ。
（せめて見えている問題はがんばって解いていかなきゃ）
「お嬢」
不意に呼び止める声があり、ふりかえるとグレンがいた。
「いまリュシエル隊長から話を聞いたんだが、けっこう悪質な奴みたいだな」
「あ、やっぱりわざとだと思います？」
王都に入れるべきではないと主張していたヴィクトール、ほかならぬ彼の発言からその思惑どおりに事が進んでしまったのだ。それは失言などではなく仕掛けられたとみるほうが正しい

ようだ。

（まさかあんなふうに仕掛けてくるなんて……！）

戦いの場所は御前会議だけだと思っていた自分の迂闊さが悔やまれる。

「明日の御前会議はスメラギ排斥に向かうのは必至だな。で、団長はなんだって？」

「シリスは闇雲にスメラギ隊長をかばうなって……あと、いまの私は従者じゃなくて王女だからって言ってましたけど……」

「まーそれはたしかにあるかもなー」

（え、グレン隊長もわかってるの？）

「どういう意味なんですか？」

するとグレンは、「うわーあいつうざってぇなぁ……」とつぶやいて頭をがしがしとかいた。

（あいつっていうのはヴィクトールのことよね）

どうやら面倒くさいをことを考えているらしいと、シエラは心の中で身がまえた。

「おまえさんはまだ王女としてお披露目されたばかりで、四侯の前にも数えるほどしか姿を現したことがない。つまり四侯はまだ王女のひととなりを探っているときだ。もしここでスメラギばかりに肩入れをするようなら、お嬢が貴族派を敵にまわすことになる」

「え、隊長ではなく私が、ですか……？」

「そうだ。スメラギの件はただの釣り餌、狙いは王女を孤立させることにあるかもしれない」

（え……狙いは、私……？）

スメラギが陥れられることばかりを考えていたシエラは、予想外の言葉に目を瞬かせた。

しかし、どうして？　とは思わない。国を守る竜騎士を排斥しようとしていた人たちもいたくらいだ。王女が邪魔だと考える人間がいてもおかしくない。

（でもいくら私を孤立させたって、次期女王は私にきまって……）

そのとき脳裏をよぎったのはカーラの姿だ。

（――いるとはかぎらないということ？）

もしヴィクトールがほかの女王候補を擁立しているなら、スメラギを陥れようというふりをして自分を陥れる可能性も十分にあるということだ。

ヴィクトールの狙いは誰なのか。狙いはやはりスメラギなのだとしても、黒竜公、黒竜隊長、アズィールの皇子――スメラギのどの立場を奪いたいのか。

（ううう、可能性が多すぎて混乱してきたわ……）

「でも、ま、竜騎士がこけにされちゃあ放っておけないよな」

そう告げるグレンの眼は自信に満ちていて、混沌とした状況の中ですこんと先を見通すかのようだった。

「ヴィクトールにやられてばかりじゃ癪だろ。そんで、嬢ちゃんも人を使うことをおぼえないとな？」

「人……ですか？」

事情がわからず問い返したシエラに、グレンがにやりと笑みを浮かべた。

一方、シエラが去った扉が閉ざされると、シリスはふっと顔をほころばせた。

シエラ――ルーシェが大学に入ってまだ半月、しかし彼女は実にさまざまなものを吸収してきている。頼もしいかぎりだ。

（でも悪癖がつくまえに手を打っておいたほうがいいかな）

シリスは自分の手持ちの情報を思い返し、彼女に渡しそびれたものがないことを再確認する。

いろいろ投げかけたがあとは彼女が自分で答えを出す問題、このあたりでひとつ覚悟を決めてもらうのも教育のうちだ。スメラギがいない局面だからこそ学んでもらわないといけないこともある。

そのとき別室へとつづく扉から軽いノック音がして、返答を待たずに続き部屋から入ってくる少年がいた。

シエラと血縁関係を想像させる容貌の、従者のユリウスだ。

しかしこちらは、見るからにわかりやすい彼女とは対照的に、白い肌の下に感情を覆い隠したまま敬礼した。

「あれの手の者が使者に接触した模様です」
「ああ、やっぱりそうなんだ？」
そのとき一瞬胸の奥によぎった感情――それにシリスは気づいていたがあえて流すことにした。自分までひきずられていいものではない。
「じゃあこっちも動かないといけないね。――ってユース？　どうかしたの？」
いつも無表情で辛辣な彼の眼に、いつもとちがう光があった。
毎日顔を合わせていなければ見落としてしまう程度のささいな違和感――それは気遣い、もしくは非難だ。
「……本気で行動に移されるおつもりですか」
「本気もなにも、俺なりにいつも本気なつもりだけど？」
「いまならまだ、事を収める手段ならほかにあるでしょう。その策はあまりにも――」
「影響力が大きすぎるって？　大きくしているんだよ、わざとね」
「しかしあなたも無傷ではいられないかもしれません」
「おやユース、心配してくれるんだ？」
その一言に、ユリウスがはっと息を呑んだ。
「心配するならいまは俺より別のことだよね」
――なまじ近くにいすぎるのも厄介なものだ、とシリスは思った。これから人を欺こうとし

ているときに、本心を悟ったあげくにまさか自分の心配をされてしまうとは。

できれば自分の心を読める者などいないほうがいい。傍に置かなければいいとも思う。

だがもはや手放せない。自分の手の内を知る者を遠くに置いておけるほど、いまの自分に余裕はない。

「まぁ俺もいつも高みの見物としゃれ込んでいられるわけじゃないよ」

「しゃれ込んでいてください。今回はそれが可能な局面です」

「いや、そういうわけにもいかないんだ」

シリスはそれ以上聞き入れるつもりはないとばかりににこりと微笑んで見せ、そして告げた。

「――新入りさんには王宮の流儀を教えてあげないとね？」

翌日、シエラは最初から御前会議の議場に入っていた。

開始時刻がちかくなり、次々に入室してきた貴族たちがすでに上座についていたシエラに会釈しながら席に着く。その中にはヴィクトールの姿もあった。

見つめるシエラの目が自然と鋭さを帯びたが、彼もまた諸侯とおなじように会釈だけして席に着くと、シエラの視線に頓着することなく席に置かれた資料に目を落としていた。

そのようななかに入室してきたのが、グレンとリュシエルだ。
隊服姿で現れたそのふたりの姿にシエラの心がぱっと華やいだ。
（――来てくれた！）
グレンは四侯の席に、リュシエルは奥の末席につき、出席者がそろったところで女王の臨席を起立して迎え、会議開始にあたって議事進行役から説明があった。
「本日の御前会議はウィルハーグ侯が急病により後継者グレン殿が、また国賓をお迎えしている最中のため王都防衛の任にあたる白竜隊長リュシエル殿がご同席されます」
（ねじ込んでくださったんだわ！）
シエラは昨日、グレンに呼び止められたときの出来事を思い出した。
『嬢ちゃんも人を使うことをおぼえないとな？』
その言葉に最初は『人……ですか？』と首を傾げたシエラだったが、俺俺と自身の顔を指さすグレンにシエラははっと気がついた。
（もしかしてグレン隊長、御前会議に出られるんじゃ……!?）
おなじ四侯の跡継ぎであるヴィクトールが出ているのだ。グレンが出られない理由はない。
それに王都防衛に関わる案件のときには、その任にあたっている竜騎士隊長も出席が認められるはずだ。
『あ、あのっ、明日の御前会議にリュシエル隊長と一緒に出席していただくことはできません

か!?』

明日はスメラギの王都入りに関わる案件、絶対に王都防衛にあたる竜騎士団の見解が必要になる。

もし赤竜隊を率いるグレンと白竜隊長のリュシエルが同席していれば、〈空〉の聖竜の主として青竜隊を動かせるシリスは竜騎士団長ということでもともと出席しているので、竜騎士団の五隊のうち三隊を動かせる者がそろうことになる——つまり過半数だ。この三人で竜騎士団の総意を代弁できる。

竜騎士団が背後についている、これはスメラギの立場を守るおおきな盾となるはずだ。

朝食もしっかり食べてきたし、心強い味方を得て気合いも十分、シエラは強い意思でヴィクトールを見つめた。

（さあ、反撃開始よ！）

「通常議案に先だちまして、王女殿下よりご報告がございます」

シエラは議事進行役に発言を許してもらい、立ちあがった。

「昨日の晩餐会にてアズィールのご使者より申し入れをいただきました。その申し入れのうちこの場で検討すべきことは二点、ローレンシア国内における黒竜公スメラギのアズィール皇子

としての待遇、そして黒竜公同席の上での婚礼の返答です」

この場の大半の者が晩餐会に同席しているし、同席していなかった女王と宰相の耳にもすでに届いている。

「ご使者の意向としては、皇子である黒竜公の意思を確認したいとの存念と思慮いたします。このまま黒竜公本人不在でご返答してもご納得いただけないでしょう。黒竜公が皇子として貴族列席の公式の場に出ることについては検討する必要があると存じますが、まずは黒竜公をこの御前会議に召喚し、当人の意思を確認することを提案いたします」

本来スメラギは黒竜公として御前会議に出席していてもいい立場だ。しかし黒竜公として参席するのではなく参考人として召喚するというのが貴族派への妥協点だ。

しかしすかさず「反対です」とヴィクトールが立ちあがった。

（――来たわね）

「検討するまでもなく、一騎士を他国の皇子として扱うなどもってのほかです」

ヴィクトールの声はあいかわらず落ちついた低音で、感情的なものは見られない。大学紛争を起こした者たちのような、自分の信念が絶対に正しいと意気込む様子もない。

（だからこそ厄介なんだけどね、この石男は！）

そう思いながらシエラも淡々と反論をはじめた。

「アズィール皇子に指名されたのは黒竜公の意思とは無関係のこと、まずは本人をこの場に呼

び、意思確認をすることが必要と考えます。黒竜公当人が皇子としての扱いを望まないならば、黒竜公の口からアズィールにその旨を明言していただくことも可能です」

「しかし黒竜公は〈闇〉の聖竜の主、全黒竜を従えうる存在です。そのような者を王都に入れるのは危険です」

「現在王都には白竜隊が詰めております。白竜隊は黒竜隊に数で勝り、もとより王都には〈月〉と〈空〉の聖竜がそろっております。いかに〈闇〉の聖竜といえども敵うものではございません」

「仮に黒竜隊の力は押さえうるとしましょう。しかし王都の民に危機感をいだかせること、それ自体が竜騎士の信頼にかかわる問題かと存じます。

そもそも異国民の手に聖竜を握られていること自体が問題なのであり、その王都入りをアズィールの要望で叶えたとなればさらにおおきな問題となりましょう」

（隊長の出自に絡めてきた……やっぱりこの人も〈貴族派〉なのかしら？）

聖女の血を尊ぶ貴族派ならば、異国民のスメラギは排斥すべき対象だ。

「カディナ伯は黒竜公の出自に不満がおありのようですが、当人の黒竜公としての資質については、女王陛下ならびに四侯臨席のこの御前会議ですでに採決されたことです」

「それは事実ですが採決した当時といまとでは事情が異なります。

黒竜公がみずからアズィールの縁戚だと申告してきたときは当人の資質だけを問題ととらえ

ました。しかしこうしてアズィールが皇子としての待遇を求め、ローレンシアの内政に関与してくるとなれば、ふたたび検討する必要があるかと存じます」

（たしか前回は、竜騎士隊長連署の書類を提出して不意打ちに近いかたちで逃げ切ったはず……）

しかし二度めの今回はその方法が使えない。そしてヴィクトールもすかさずその弱点を突いてきた。

「前回さしはさまれた竜騎士団長ならびに竜騎士隊長連署の書状、それについてもあらためてご提出いただきたい」

（竜騎士団で再検討になれば不利になる――）

そんな予感が脳裏をよぎったとき、「それには及びません」と立ちあがる者がいた。

ウィルハーグ侯の席についていたグレンだ。

「本日はウィルハーグ侯爵代理としてまいりましたが、竜騎士団赤竜隊長として申し上げます。この場には隊長職にある者のうちの二名、そして聖竜の主である竜騎士団長も臨席しております。つまりこの場には竜騎士団の五隊のうち実質三隊を率いる者がいるということ、ここで決を採ってもおなじことと存じますが？」

（多数決に持ち込んだ！）

頭数をそろえたものの、このような形で活かせるとは予想外だった。

シエラがふり返って女王を見やると、女王はよいでしょうとうなずいた。
聖竜の主は三名――うちスメラギを除く二名がここにいる。
そして竜騎士隊は五つ――黒竜隊と青竜隊は複数隊に分かれているので隊長格にある者は五名以上いるが、実質的に白竜隊、赤竜隊、青竜隊の三隊を率いる者がここにいる。
これでもし意見が一致すれば、竜騎士団としての見解は決まる。そしてその見解は貴族たちの判断にも影響を与える――つまりスメラギ召喚についておおきく傾く。
（ここが勝負どころ……！）
シエラは鼓動が高鳴るのを感じたが、緊張を面に出さないようにしながら正面に向きなおり、口を開いた。
「女王陛下のご裁可により、この場にて竜騎士団の意志を確認いたします」
その一言を聞き、ヴィクトールは無言で席に着いた。
ヴィクトールには白竜隊長リュシエルだけでなく、この場に赤竜隊長グレンまでも同席してきたことは予想外だったはず、完全に裏をかかれた形だ。反論もしたかったのだろうが、女王の裁可に否やは唱えられない。
他に異論がないのを確認して、グレンが口を開いた。
「たしかに黒竜公の生まれは異国かもしれません。しかし竜を授かった七歳から神学校で学び、立派に竜を育て上げた後輩を私は竜騎士として信じます」

「私もおなじく」とリュシエルも立ち上がり、女王は「私はみなの判断を待ちます」と述べた。
これで赤竜隊と白竜隊が賛成した。残るは〈空〉の聖竜の主であるシリスだけだ。
これで隊長の召喚は決まったも同然とシエラは見やったが、シリスは着席したまま卓子に両肘をついて指を組んでいた。
（え、シリス……？）
シリスはまっすぐに議場を見据えて、ゆっくりと口を開いた。
「たしかに黒竜公ひとり王都に呼んだところで竜騎士団の脅威ではありません。ですが、問題なのは人心です」
なにやらおかしな雲行きに、シエラの鼓動が別の意味でとくとくと速まりはじめる。
「アズィールと敵対するやもしれないいま、王宮の動向が民の最大の関心事でしょう。黒竜隊の異動は王都の民みなの知るところ、そこにスメラギを召喚したならばアズィールの使者の言い分を呑んだと、そう民に伝わりかねない危険性をはらんでいます。
私はスメラギが隊長職にあることを支持します。ですが御前会議への召喚に関してはカディナ伯の意見を支持し、この場への召喚は賛同いたしかねます」
着席したままそう告げたシリスに、議場内がざわめきはじめた。
（シリス、なにを言って……）
竜騎士団は五隊、二隊の同意しか得られなければ竜騎士団の幹部すべてが集まって再度検討

することになる。

（しかも竜騎士団長みずからが反対派に立ったとしたら――）

シエラは血の気が引いて目の前が暗くなるのを感じたが、決を採りはじめたのは自分自身だ。みなの目線にうながされるままシリスに訊ねた。

「――それは竜騎士団長としての判断でしょうか？」

するとシリスは穏やかな表情をくずさないまま、「そのとおりです」とはっきりと言ってのけた。

「私は竜騎士団をあずかる団長として、現時点における黒竜公スメラギの王都召喚に反対いたします」

（……シリス、どうして!?）

第3章　最強の裏切り者

――そのあとも御前会議はつづいたが、それらの議論は頭の中で疑問がぐるぐるめぐるシエラの耳にはろくに入ってこなかった。

なんとか会議が終わり、議場から出て王宮をふらふらと力のない足どりで歩いていると、

「おいお嬢、大丈夫か？」

と声をかけられたが、シエラは顔をあげることができなかった。

「グレン隊長……すみません……せっかくリュシエル隊長と一緒に出席してくださったのに……」

先ほどの局面でシリスさえ肯いてくれれば、ヴィクトールの不意を突くかたちで思惑をつぶせた。そしてスメラギを召喚しさえすれば、みなの前で二心のないことを明らかにさせることもできたはずだ。

（なのに――）

シリスがヴィクトールの言い分に乗ってスメラギの王都入りを拒絶するなど、竜騎士団を束ねる団長みずからがスメラギは危険分子だと明言しているようなものだ。スメラギの立場は逆に悪化してしまった。

（シリスはいったいなに考えてるの……？）
「まー、一筋縄ではいかねぇわなー」
「そんな悠長なことを言ってる場合ですか!?」
「あの人のことだ。なんか思惑があんだろ」
グレンにそうさっくり返されて、シエラは一瞬呆気にとられた。
（あ、そっか……シリスも学舎出身だものね）
グレンにしてみればシリスもスメラギもおなじ後輩だ。グレンはスメラギを信じている。だが同時にまたシリスも信じているのだ。
（――けれど、シリスの心は学舎で培われたものじゃない）
いつだって彼の心の軸足は〈国〉にある。そしてスメラギを切り捨てる方向に天秤が傾いたなら、きっと容赦なく切り捨てる――
（まずはシリスの本心を聞きださないと……！）
「わたし、団長に話を聞いてきます！」
ぺこりと頭を下げて踵を返すと、「おう、ケンカするんじゃねぇーぞー」と声が追ってきた。
（そう言われても!!）
どうして反対したりしたの!?　と怒りで自然と足が速くなる。シリスの部屋の前にたどりつくとシエラは衛士を上目づかいに見据えた。

「シリスに会いにきたの。取り次いでちょうだい」
しかし返ってきたのは思いもよらない言葉だった。
「閣下はご不在です」
（――――え？）
そんなはずはない。御前会議は先ほど終わったばかり、シリスが竜騎士団にもどるのはいつも昼からだ。
スメラギがいたころはよく御前会議のあとに執務室に遊びにきていたが、現在王都防衛をあずかるリュシエルもまた先ほどの会議に出席していた。
女王と宰相は別の打ち合わせに入っているし、シリスがほかに出歩いているとは考えられない。
（まさか――王女相手に居留守!?）
扉を開けなさい、そう命じることはできたけれども、シエラは衝撃で言えなかった。
「ご用件ならば承りますが？」
そう告げる衛士の申し出に「結構よ」と告げて、シエラは背を向けた。
（どう、して……？）
このようなことははじめてだ。胸の奥がざわざわして黒い靄が涌き起こり、シリスに反対された先ほどの衝撃とともにぐるぐるめぐりはじめる。

（シリスはどうして反対したの？　どうして私と会ってくれないの？　私に隊長をかばわないように言ったのはどうして？　本当にシリスは隊長を守ってくれようとしているの――？）

自分がスメラギを守りたいことは伝えてあるし、シリスも君に幸せになってもらいたい――そう言っていたのに。

（でも、女王としてとは一言も言ってない……？）

そう気がついたシエラは、はっと面を上げた。

シリスは、『女王として幸せになってもらいたい』とは言っていない。彼は徹底した効率主義者だ。向いていない女王の務めから解放してあげたほうが君の幸せだと思ってね――シリスならそう言いかねない。

（まさか、シリスに見切られた……の……？）

その想像に愕然として、目の前が真っ暗になった。

そんなことはないと自分に言い聞かせる。けれどもいつもあたり前にいてくれたシリスが傍にいてくれない――そんな不安に押しつぶされそうになって、シエラは泣きたい思いをこらえて早足で私室に向かった。

――が、廊下の向こうから歩いてくる人影があった。

（ナシル……！）

侍官から王宮の案内を受けていたらしい。

侍官たちはシエラの姿を見留めると廊下の脇に寄って深々と一礼し、ナシルはシエラに向かって歩み寄ってきて、数歩手前で立ち止まると胸元に手を当てて挨拶をした。
「ご機嫌麗しく王女殿下」
全然麗しい状態ではないとわかっているだろうに、ナシルはやわらかな笑みを浮かべている。
それどころか、シエラの面を見るなりその笑みが深みを増した。
「御前会議が終わったようですね。要望の件はどうなりましたか？」
「申し訳ございませんがそれは、まだ……」
「然様にございますか。ご検討中とあらば致しかたありませんね。しかし私もすべての答えを一度に求めているわけではありません。まずは黒竜公閣下――いえ、スメラギ殿下にご挨拶申し上げたいのですが？」
まさか会わせていただけないなどということはないでしょう？
そうナシルの碧の目は穏やかに語りかけてくるが、いまスメラギは王都にも入れないのだから挨拶などできるはずがない。
（けれどそんなことは言えない……）
アズィール皇子に対する礼を欠いていることだけではない。スメラギのことでローレンシアの王宮が割れているなどと悟られるわけにはいかない。
「申し上げましたとおり黒竜公は王都を離れ、リュースという街に赴任中ですので」

「それほど重要な街なのですか？　殿下が王都を離れなければならないほどに」
「リュースは我が国有数の産業都市、その重要性は王都に劣るものではありません」
「しかしその街に王家の離宮があるわけではないのでしょう？」
「……離宮？」
「ええ。スメラギ殿下は王宮に一室を賜ってもよいはずの御方、その御方が大都市とはいえ王宮に劣るお屋敷にお住まいとは嘆かわしいことです」
スメラギがリュースで住んでいるのは、王宮や屋敷どころか官舎の一室だ。たしかに他国の皇子の住まいにしては質素にもほどがある。
「ですが重要な街とあればしかたありません。殿下のお手を煩わせるわけにはまいりませんので、こちらからご挨拶に伺いたいのですが」
「それは……」
では行ってください、と答えるわけにはいかない。
戦時下でもないのにリュース防衛の任のために王都に来られないというのはいかにも苦しい言い訳で、ナシルもそれをわかった上で早く会わせろと遠まわしに催促しているのだ。
（どうすれば……）
シエラが返答に窮していると、
「王女殿下、いかがなされました？　お顔の色が優れぬようですが……」

そう優しく問いかけてきたナシルだったが、はっと思いいたったように碧玉の瞳が鋭さを帯びた。

「まさか、殿下が病や怪我で動けないなどということは――」

「――！　それはありません！　絶対に！」

すぐさま否定すると「左様にございますか」とナシルはほっと息をついた。

「我が国は貴国を信用して殿下をおあずけ申し上げているのです。

スメラギ殿下は我がアズィール国の第一皇妃様がお産みあそばされた我が国の皇子、そのことをゆめゆめお忘れなきようお願い申し上げます」

では、とナシルが腰を折って一礼する。

王女であるシエラが先に立ち去るのが礼式に則ったかたちだ。シエラは見えない手で背中を突き飛ばされたようにおぼつかない足を踏み出した。

（そう……隊長が姿を現さないということは、その身を害したとも受け取られかねないことなんだわ）

もしローレンシアがアズィールとの戦争を覚悟しているなら、スメラギを人質に取ったり謀殺する可能性もある。

もちろんそのようなことをシエラは絶対に許可しないし、ローレンシアの風土としてもありえない。

だが、アズィールならば当然のようにおこなうだろう。
――そしてシリスなら。
（まさかそのようなことはしないだろうけれど……）
――本当にそう？
心の奥底から問いかける声をふり払えない自分もいる。
（信じて、いいの……？）
シエラは不安のあまりに震えの湧き上がる身体を抱きしめた。

ヴィクトールは、先ほど入ってきたばかりの扉につと視線を向けた。
樫材の厚い扉で封じられた部屋に声は届かないが、廊下の人の気配くらいは読める。
（――王女か？）
しかしその扉はノックされることなく、来訪者の気配は遠ざかっていった。
「来客があったようですが？」
外の気配には部屋の主も気づいているだろう。自分が気づいていない振りもいまさらかとヴィクトールは話を振ってみたが、

「いいんだよ、私が君を呼んだわけだから」
そう言って部屋の主――シリスはやわらかな微笑を浮かべた。
――御前会議ののち、控室でデュークに会議の内容を伝えていたヴィクトールは竜騎士ユリウスの来訪を受けた。
それがたかが一竜騎士なら無視するところだが、相手がおなじ四侯の跡継ぎとなれば無下にもできない。四侯の筆頭格であるフェルディナンド侯爵、その跡継ぎである彼が竜騎士団でどのような職務についているか、ヴィクトールは知っていた。
ユリウスに連れられて訪れた先がこの部屋で、中で「やぁ」と待っていたのは王族にして竜騎士団のシリスだった。
シリスとは舞踏会などで挨拶をしたことはあるが、それ以上の会話を交わしたことはない。
しかし呼び出される理由は説明されるまでもなくわかった。
「なにゆえご助力くださったのか、お伺いしてよろしいでしょうか？」
先ほどの御前会議への竜騎士団二隊長――グレンとリュシエルの同席はヴィクトールにとって予想外のことだった。
竜騎士団長シリスが出席していることは知っていたが、王都防衛責任者として白竜隊長が、そして使者を連れてきた赤竜隊長が四侯の後継者の立場で乗り込んでくるとは思わなかった。
採決に持ち込まれたとき、スメラギ召喚は確定したとヴィクトールは覚悟した。――竜騎士

団長シリスの加担はまったく予想外のことだった。

そしてそれは王女にとっても予期せぬ出来事だったのだろう。予想外の裏切りにその後の会議の間、王女はずっと色をなくしていた。

「理由？　もちろん君の意見に賛同したからだよ」

シリスは活けられた花瓶の薔薇を愛でつつ、にこやかな笑顔をくずすことなく告げる。

「スメラギはローレンシアの抱える火種だ。なるべく王都に持ち込まないほうがいい」

「竜騎士にとって聖竜の主は特別な存在だと聞き及んでおりましたが？」

「らしいね。だからこそ、だよ」

花瓶から面を上げるとシリスは艶然と微笑んだ。

「私はね、スメラギを政治の表舞台から消したいんだ」

あまりに率直に告げられた真意に、ヴィクトールは驚きのあまりに息を呑んだ。

竜騎士団長シリスはスメラギの社会的抹殺を企んでいる――それは絶えることなく彼につきまとう噂だった。

王族として生を受け、聖竜をも授かったシリスに、誰しもが次代の大公だと確信した。だがその聖竜の主の誉れはたった一年で汚されることになった。

どこの馬の骨とも知れぬ異民族の子が聖竜を賜ったらしい――しかも大公に従っていた〈闇〉の聖竜を。

竜が育つまでは神学校の与るところ、だが、いくら口外を禁じても情報は漏れ出るものだ。しかし若くして夫を亡くした女王の気持ちを推しはかり、それは貴族の間での公然の秘密となった。

そして十年ちかい年月がたち、その者が騎士叙任されたときも隊長職のみ与えられ、黒竜公の位は下賜されなかった。彼は政界に姿を見せることなく、公然の秘密のまま一隊長としてその責務をまっとうするはずだった。

――それが覆ったのが約半年前のことだ。

「かの方を竜公に推挙されたのは貴方様とうかがっておりますが？」

「したよ。団長の義務としてね。くだらない嫉妬で叙勲をさえぎっているなんて不名誉な噂をたてられるわけにはいかないからね。

私はなにも、手段を選ばずなにがなんでも消したいってわけじゃない。そこに落とし穴があるならはまってくれればいいなと思うささやかなものだよ。私の名を傷つけないかたちで、ね」

そう声を落としながらシリスは歩み寄ると、指二本分くらい高い自分の顔を見上げた。

「スメラギを確実に消せる機会とそれを実行に移せる人物――君を、待っていた」

（これ……が……）

――天空神に嘉されし蒼の瞳。

色香すら感じさせる艶やかな目線。顔を寄せ至近距離から見つめられたヴィクトールは、衝撃的な告白にもかかわらずただ呆然と見下ろすしかなかった。

「私が彼に直接手をくだすのは外聞が悪すぎるし、私がこれから手に入れるものにはとうてい見合わない。だからいままではナッシュが代わりに動いてくれていた」

「弟が、にございますか？」

「うん。彼は学舎時代から私の指導担当でね、任官してからは警務隊で私の片腕としてよく働いてくれた。けれどそれが目障りだったんだろうね。逆にスメラギに陥れられた」

そう告げるとシリスは目線を外してうつむいた。

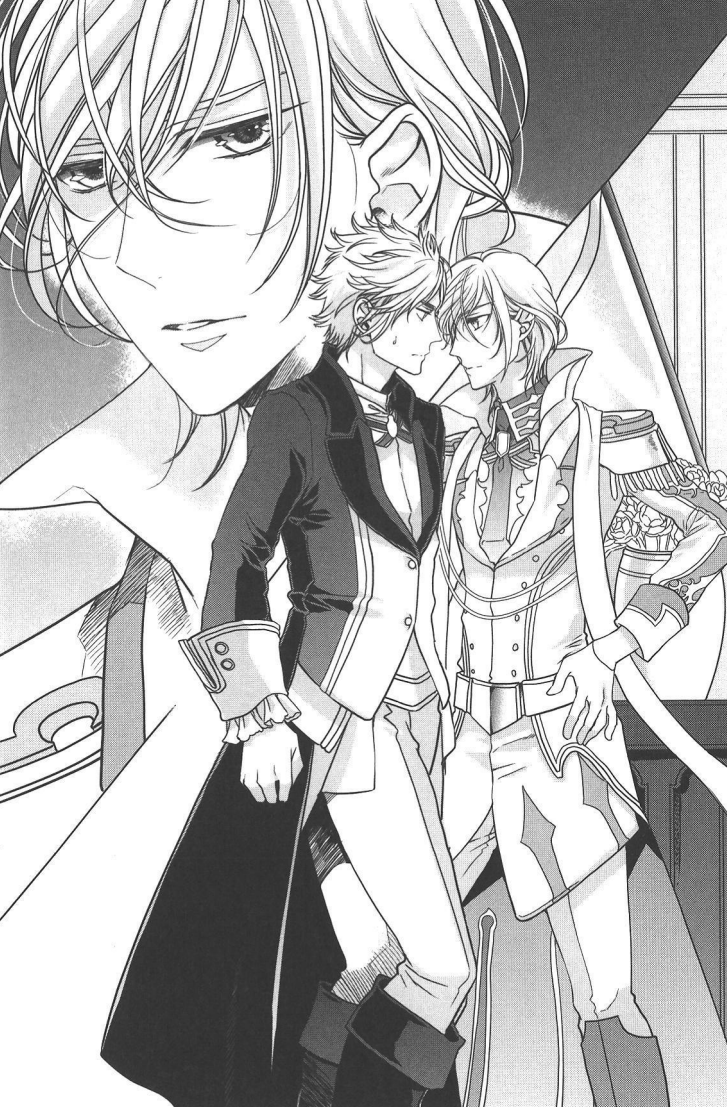
――そういえば弟は、シリスの親衛隊的な組織を預かっていた。

弟のナッシュは竜を授かったにもかかわらず、侯爵家の跡取りは竜を授からなかった兄の自分に決まり、それに対する反発心もあったのだろう。聖女の代からつづくルクセンドア侯爵家の血統と授かった竜を誇りとして、その双方の意味において頂点に立つシリスに心酔していた。

「弟はいまどこに？」

正直、弟の現状に興味があったわけではない。だがシリスの立ち位置を測るには良い材料だ。

「砦の房で謹慎中だよ。さすがにスメラギが王都にいるのに早々に解放するわけにはいかなく



てね」

でも彼もいなくなったことだしそろそろ出してもいい頃合いかな、とシリスは薄く笑んだ。

「スメラギが従えているのはまぎれもなく聖竜、それは受け入れなければならない事実だ。私も出自の知れぬ者と肩をならべなければならないのかなと一度はあきらめたんだ。けれどスメラギの出自が思わぬ形であきらかになった」

するとシリスはノックでもするかのようにヴィクトールの胸をこん、と手の甲で打ち、告げた。

――いまが好機だ、と。

「私はこの身体に流れる血を誇りに思っている。君に流れる血がまことに聖騎士の末裔のものであるならば、異国民にローレンシアを蹂躙されることに憤懣があるはずだ」

ヴィクトールはつとめて冷静な呼吸をたもちながらシリスを見下ろした。

聖騎士――聖女の代の四聖竜の主、それらの末裔が現在の四侯だ。

シリスは唯一の竜公として国政を預かるために、自分はスメラギを排斥するために連衡する。

（自分の目指す世界は――）

シリスの目指す先とはずれがある。だがその先のことは共通の敵であるスメラギを追い落としてから考えればいい。

いまがスメラギを追い落とす好機、得がたい味方だ。

そのとき記憶の底から甲高い叫び声が響いた。
『――私はこんなところにいるはずじゃなかったのに……ッ！』
耳の奥で暴れる狂気に満ちたその声を封じるように、ヴィクトールは瞑目する。
そしてシリスに対して正対すると胸に右手を水平に当て、陸軍の礼式に則って深々と一礼した。
「――閣下のご助力、感謝いたします」

王宮の案内を受けたのち宮殿にもどったナシルは、先に室内に入り込んでいたデュークから御前会議の経緯について報告を受けた。
「……なるほど、そういうことですか」
デュークはナシルが先ほどシエラと鉢合わせて言葉を交わしたことを知らないはずだが、彼の報告と色をなくした王女の様子は矛盾するものではなかった。デュークは偽りを述べていないようだ。
（カディナ伯はこちらに告げたとおりに動いているらしい……）
ナシルは先日、デュークと名乗る青年が訪ねてきたときのことを思い出した。

――闇の中にあらわれた青年、カディナ伯ヴィクトールの使者を名乗るデュークはこう切り出した。

「わが主は貴国の望みについてご助力できるかもしれません」

ナシルは晩餐会を終えたあと、ここまでまっすぐ帰ってきた。他者が先ほどのヴィクトールの言葉に便乗しようとしているにしては間がなさすぎる。ということは、デュークは発言者であるヴィクトールの意をあらかじめ受けていたと考えていいだろう。

やはりあれは計画的な発言だった。しかし油断は禁物とばかりに、

「我が国の望みはお伝えしたとおりスメラギ皇子とシエラ王女の婚礼、それ以上のものではございませんが？」

ナシルはそう白を切ってみると、デュークは本心を覆い隠した笑みを浮かべた。

「たしかに一番のお望みはそうでしょう。しかしその要望が受け入れられる可能性はきわめて低いことはあなた方もご理解の上。貴国の真の狙いはもう一手先、縁談によってローレンシアを揺さぶり、ローレンシアが彼の方を扱いあぐねて手放したところで貴国に呼びもどすことではございませんか？」

「――ほう、なぜそのように？」

「貴国から次々に届く贈り物は、彼の方がアズィールの皇子であることを我が国の民に印象づ

けるため。必然、彼の方は我が国で危険視される存在になる。そこで彼の方との縁談を持ち込んでくるなど、盾を構えて待ち伏せる軍に突撃するようなものです。

あなた方が真に望んでおられるのは、彼の方の排斥気運を高め、彼の方にみずから祖国におもどりいただくことかと」

デュークとその背後にいるカディナ伯は、こちらの意図を正しく理解している。

しかしナシルもデュークに負けず人の良い笑みを浮かべて「かようなことは」と謙遜し、

「我々はただ、幼くして祖国を離れてしまわれた殿下に、ご両親であらせられる皇帝陛下ならびに第一皇妃様の御心づくしと、今もなお祖国の後ろ盾があることをご理解いただきたかったまでのこと」

とのらりくらりとかわしてみせると、デュークもこちらの無言の返答を正しく受け取ったらしく、ほそめた目がさらにやわらかさを帯びた。――それは魔性の微笑みだった。

「わが主の助力によって彼の方をお返しすることが適うやもしれません、と申し上げたなら？」

「ほう。殿下をお返しいただけると？　貴国にはご立派にお育ていただいた御恩もございますが……」

スメラギを返すその対価はなんなのか。それを遠まわしに訊いてみると、

「我々が望むのは、そのときがまいりましたら異論を挟まず彼の方を受け入れていただきたい、

ただそれだけです」

ただし聖竜はお渡しできかねますが、とつけたしたデュークに、「それは無論」とナシルもうなずいた。

普通の竜一頭くらいなら友好の証とでも理由をつけて渡してくれるかもしれないが、さすがのローレンシアも黒竜隊まるごと譲り渡すほどお人よしではない。竜の加護を放棄するならば命ばかりは助けて、亡命も見逃してやるといったところだろう。

「しかし解せませんね。竜はローレンシアの誇り、それと等しく竜騎士、とりわけ竜公も重要な存在だと認識しておりましたが？」

「たしかに〈竜公〉は我が国においてきわめて重要な地位です。だからこそ、彼の方は異分子なのです」

そう告げて、デュークはローレンシアの国民性について語った。

――ローレンシアは長きにわたって現在の国土を保ち、異国民との接点は河岸のみ、異国民が国政に関わることなどまったくありませんでした。そのため我が国の民は異国民に免疫がなく、彼の方の存在にとまどっております。

――それが貴国の縁者となれば、いやがうえにも先代大公が亡くなられた十三年前の戦を思い起こさずにはいられません。女王陛下への畏敬の念をいだくわが国の民であればなおのことです。

――穏やかな日々を望む民の感情を刺激することは、我が国の望むところではございません。また貴国との良好な関係を保つためにも、我が国に理解のある彼の方にアズィールにいていただいたほうがよいのではないかと考えております。

ナシルはデュークの言に適当に相槌を打っていたが、最終的に手を結ぶことを決めた。

もちろん先日のデュークの言葉が本心だなどとは思っていない。彼らは、スメラギを追いだそうとしているその裏でなにかを企んでいる。

だがデュークの出した条件でアズィール側がすることは、ただスメラギを迎え入れることだけだ。

申し入れられるまでもなく最初からそのつもりだったのだ。成功すればスメラギが手に入るし、失敗してもアズィールに害はない。けっして悪い話ではない。

ただ状況を静観すればいい。カディナ伯とやらの手腕がどれほどのものかお手並み拝見――と思っていたのだが、ヴィクトールには思わぬおおきな支援者がいた。

王族にして竜騎士団長であるシリスだ。

（まさかあの者が……？）

竜騎士団長の彼がスメラギ排斥派だったとは思わなかった。

またなにか企んでいるのか？　とも思ったが、今日の御前会議では予定外にスメラギ寄りの

出席者二人を用意されてしまい、シリスさえスメラギ召喚に賛成していればヴィクトールは策を改めなければいけない局面だった。しかしシリスは反対した。彼がスメラギを召喚することを望まなかったとしか考えられない。

（そういえば自分を捕えたときも）

『――そんなに似ているわけ？』

そう言ってただひとつ、自分の不意を突く形でシリスが訊いてきたのはスメラギのことだった。

シリスがスメラギの出自を気にしていたのは事実、そしてアズィール皇帝の縁戚であることは早いうちから彼の意識にあった。

そのときはスメラギ自身も気づいていなかったことだが、あの者はおくびにも出さずにずっとスメラギと付き合っていたことになる。

（そして出自が確定したために排斥に踏み切ったということか……）

ローレンシア人の意識では竜の主でもあるスメラギに危害をくわえることはない。

（しかしあの者は別だ）

あの者のまぶしいばかりの微笑、しかしその目の奥の光は暗すぎる。澄んだ青空の瞳、その目が見つめる先は闇だ。

竜騎士団長シリス――あの者なら笑顔でスメラギを抹殺しかねない。

その焦りが面ににじんでいたのだろう。
「使者殿？」
デュークに問いかけられはっと我に返ったナシルは、「報告ご苦労さまでした」と退室の意を伝えると、デュークは一礼して窓から出ていった。
無人になった部屋で、ナシルは眉を寄せて思案をはじめた。
（早急に手を打たねば……）
先ほど王女シェラに対し、『まさか、殿下が怪我で動けないなどということは』と告げたのははったりをかけただけだが、下手をすればそれが現実になりかねない。
スメラギの新たな赴任先の学園都市リュース、それは王都から馬で一日ほどの街だという。
（だれか護衛をつけておくべきだろうか――）
そう思い、手の者を呼ぼうとしたとき、ナシルははじめて隣室に人がいたことに気がついた。
カーテンが閉ざされたままの仄暗い室内――そこにいたのは黒髪の、そして黒の竜騎士隊服姿の青年だった。
ナシルも気配を読むことに長けている。しかしあまりに空気に溶け込むその姿に、亡霊かとすら思った。
「我が、君……」
「来客中だったのでな。こちらから入らせてもらった」

——亡霊が、話した。

はっと我に返ったナシルはすぐさまその場に膝をついた。

「ご無事でいらっしゃいましたか。お姿がお見えにならないので案じておりました」

「ああ、いらぬ国書のおかげで王都防衛の任からはずされてな」

「申しわけございません。それは皇帝陛下の一存にてなされたことにて如何ともしがたく」

「だろうな。まぁ幸い拘束されることもなく、体よく厄介ばらいされていまは近郊都市の領主をやっている。おかげでこうして王宮に入りこむのも一苦労だ」

これならアズィールの皇宮のほうが忍び込みやすかったな、と亡霊——もといスメラギは薄く笑った。

「まさかお忍びで王宮に……？」

「ああ。皇子任命の一件から俺のこの国での立場が思わしくなくてな。命を狙われることもたびたびだ」

その言葉にナシルは愕然と目を瞠った。

「そんな……まさか竜公ともあろう御方が……」

ローレンシア国民の竜への畏敬の念は深い。ローレンシアの大学には、古い宗教思想から脱却することが自分たちの使命などと考える〈知識派〉と称する輩もいるという。だがそれこそがローレンシアが周辺諸国に先駆けて自由な学問を認めている証拠だ。アズィールの大学でそ

のような議論をしようものなら、即刻処刑される。
「竜公だからこそだ。表向きはデュラクもいることだし平穏だが、裏ではよほど俺の存在が煙たい奴がいるらしい。――単刀直入に言う。ここに匿ってくれ」
「な……!?」
「皮肉な話だが、いま一番安全なのはここだ」
スメラギはそう言うが、もしここが大使館ならば亡命に近い行為だ。
「まさかおまえの手の者の中に俺を害そうとする者などいないだろう？」
「それは無論ですが――」
アズィールにおける皇子の地位やその威光はローレンシアの比ではない。側仕えをしている者でも皇子に直接声をかけることができるのは許された者のみ。身に触れる、進路をふさぐなどささいなことでも処罰の対象となる。
「竜騎士団にいてはどこにいても騎士の目があるからな」
「それはどなたに狙われているのか、殿下はご存知ということですか……？」
するとスメラギは皮肉げに口端を上げ、笑みを浮かべた。
「もともと利害関係で結託していただけの関係だ。いらない肩書が増えて手におえないと判断されれば排斥されるのも道理だろう」
スメラギは知っているのだ。自身の命を狙っているのは誰なのかということを。

「そして俺にはおめおめと殺されるわけにはいかない事情がある」
そう言ってスメラギが懐から取り出したものにナシルは息を呑んだ。
それは一本の懐刀。そして白木の鞘に収まったその刀身には、〈皇〉を継ぐ者である証が刻まれているはずだった。
「このことは奴にはまだ明かしていない」
「――！」
「万が一悟られては取り引きの道具にされかねないからな」
味方であるはずのシリスに売り飛ばされかねない、スメラギはそう言っているのだ。
「アズィール皇帝の戯言はしかたがない。付きあってやるしかないが俺に流れる血が変わるわけじゃない。――いま一度問う。これは俺に託されたものなんだな？」
その下問にナシルは膝をついた。
「……御意にございます、殿下」
「ならばこれは絶対に守り抜かねばならない」
もはやそれは勅命もおなじだ。ナシルは深々と頭を垂れた。
「――了解いたしました。我が君の御身は我が命に代えましてもお守り申し上げます」

シリスの不在を伝えられたシエラは、私室にたどりつくなり、とさっと寝台の上に倒れこんだ。

ドレスが皺になっちゃう……などと頭の片隅で思ったが、全身から力が抜けてしまって身を起こすこともできない。

（――どうしてなの、シリス）

王都にもどってからのシリスのことを思い返してみるが、いつものように自分をからかうばかりで特に変わった様子は見られなかった。

言われたのはスメラギをかばうな、そして物には順序があるということだけだ。

（それでどうして隊長の召喚をシリスが反対するの？　私と会ってくれないの？）

自分はどうすればいいのだろう。頼っちゃダメ――そうわかっているが、ひとりで考えてもまったく進むべき方向が見えない。

（だっていつもシリスが示してくれたから……）

シリスに訊けばなんでも知っていたし、対応策も示してくれた。シリスに拒絶されてはじめていままでいかに頼りきりだったかを思い知らされた。

（落ちついて。自分でちゃんと考えないと）

そう思うが、見えていたはずの道はほかならないシリス自身に閉ざされてしまった。そしてこれから自分がどんな手を考えたとしても、あの蒼の瞳はすべてを見通して道を遮ってしまう気がする。

味方にいるときはこの上なく頼もしく、敵にまわると厄介なことこの上ない相手だ。

（シリスが、敵……？）

その想像に、全身の熱がさぁっと引いた。

心の中を不安の風が吹き抜けて、握りしめていた心の砂が手の内からさらさらと風に舞って失われてゆく。あたり前のようにそこにあったもの――まるで家族が家族でなくなってしまうような、そんな気がした。

――そう、シリスはもう自分の〈家族〉だった。

父のいない自分にとって、母がいて伯父がいてシリスがいるのはあたり前で、それはこれからもずっと続くと思っていた。なのに。

（そう思っていたのは私だけだったの？）

自分は王女で、シリスは国が大切で、向いている方向はおなじだと――絶対に敵にならない人だと思っていた。

けれどもシリスが味方でいてくれたのは、シリスが求める未来がたまたま自分とおなじ方向

を向いていたからにすぎなくて、本当のシリスは己自身のためにしか動いていなかったのだろうか。

そのときシエラの脳裏を、先ほどナシルと出くわす前に直感したことがよぎった。

シリスは自分を王女として認めていないのではないか。王女である自分を支えることが彼の望む未来に沿っていただけで、もし私が王女にふさわしくなくなったら、あのおだやかな微笑みはほかの娘に向けられてしまうのでは――

不安がぐるぐると渦を巻き、胸がきゅっと痛みを訴えて泣きたい気分だった。シエラは枕に顔をうずめて涙を懸命にこらえた。

「きゅー？」と頭上でルーが鳴いて、顔を押さえた自分の二の腕をかりかりと掻いている。

（ルーだってちゃんと大きくなれるようになったのに）

自分にはいったいなにが足りなかったのだろう。元王女候補のカーラと比べれば覚悟も能力もなにもかも足りていない。けれど自分なりに努力してきた。

（けれどもう、自分なりでは補えないほどなにかが足りなかったってこと……？）

そのとき軽やかなノック音がして、その扉はシエラが顔を上げる前に開けられた。

「入るわよ」

「母様!?」

シエラはあわてて跳ね起きたが、女王衣装の母の姿を見るなりびくりと身体がこわばった。

（母様……なにをしに来たの……？）

まさか王女失格を告げにきたのでは……とシエラは恐怖に身をすくませたが、ルーはまったく気にすることなくセレネにむかってぱたぱたと翔んでいった。

胸元で優しく受け止めてもらったルーは目を細め、セレネにすりすりと首筋を押し当てて甘えている。母も顔をほころばせて「いい子ね」とルーの背をなでていた。

ひとしきりルーを甘えさせたあと、セレネは寝台の上に座り込んで呆然としているシエラに近づいてきて、ルーをシエラの膝の上に置いてからシエラの頭をぎゅっと抱き寄せた。

「母様……？」

やわらかな胸の感触、ぬくもり、そしてほのかな薔薇の香水に交じる母の匂い――なつかしさに胸がいっぱいになる。

「リュースでは元気にしていた？」

母と私的に言葉を交わすのはリュース赴任以来だ。女王として多忙な母とは会えないのが普通で、一ヶ月会わないこともめずらしくない。

顔を上げると、自分とおなじ蒼の瞳が真正面から見つめていた。

その瞳は晴れわたる空のようにとてもおだやかで、純粋に再会を喜んでいてくれるのを感じて、邪推してしまったシエラはすこし恥ずかしくなってうつむいた。

「うん、元気。でも大学でごたごたしちゃってごめんなさい」

「大変だったみたいね。でもあなたががんばったのはシリスから聞いているわ」
シリス。その一言にどくん、と鼓動が跳ねた。
（……そういう話はしているのね）
シリスは竜騎士団におけるルーシェの保護者、ルーシェである間に起きたことは当然、実母のセレネに報告している。
『ちゃんと大学で学んできたみたいだね』
シリスだってそうちゃんと評価していてくれたのに、どうしてシリスは自分の邪魔をしたりするのだろう。
「黒竜公とは仲良くしているの？」
「え!?」
「あなたが黒竜公とお付き合いしていることもシリスから聞いているわよ」
（もっとほかに報告すべきことがあるんじゃないのシリス……!?）
しかしセレネは満面の笑みを浮かべていて、シエラは気まずさを覚えて目をそらし気味に「うん、まぁ……」と答えた。
「でも母様はそれでいいの？」
いまのスメラギは絶対に大公に据えられない相手、それが王女の恋人だなんて困るのではないだろうか。

けれどもセレネは指先で優しくシエラの髪を撫でた。
「たしかに大変なお相手かもしれないわね。でも私は、あなたがちゃんと人を好きになれる娘でよかったなと思うの。こればかりは母親といえども……ううん、だれにも教えられないことだから」
そう言ってセレネはまぶしいものを見るように目を細めた。
――母はありのままの自分を受け止めてくれる。もし自分が王女でなくなったとしても、母は自分の母でいてくれる。
(――だから、怖くない)
勇気をもらったシエラはしゃんと顔を上げ、セレネの眼を見つめた。
「あのね母様、教えて」
「めずらしいわね。どうしたの?」
「私のほかにも王女候補がいるの?」
その一言に、セレネがはっと息を呑んだ。――それだけで答えはわかったけれども、シエラは言葉を接いだ。
「リュースにね、元王女候補だったって娘がいたの。……だから私を外で育てたの?」
もし自分が王女としてふさわしくなくても代わりがいる。だからシリスは私がいらなくなったのだろうか。



泣きたい気持ちがじわりと涌いたが、これは自分が向き合わなければいけない問題だ。

セレネは目を見開いて驚きを隠せずにいたが、やがてふっとやわらかな笑みをこぼし、シエラの右頬に手のひらを添えた。

「あなたを王都の外に出したのはね、私がそう望んだからよ」

「……え？」

「私の母様――シエラのお祖母様は私がまだ子どもの頃に早世なさってね。ひとり娘だった私は次期女王として、この山から一歩も外に出してもらえずに育ったの」

「え……？　じゃあ母様は外を知らないの……？」

するとセレネは「いいえ」と首を横に振った。

「婚約が決まってからは父様が連れ出してくださったわ。でもそれは父様が聖竜の主だったから許されたんでしょうね。

父様と出会うまで、私の世界はこの〈神の山〉にしかなかった。父様と出会っていなければいまもまだそのような暮らしをつづけていたかもしれないわ」

聖竜二頭が傍にいてやっと許される――それほどに母が束縛されて生きてきたなど、今の母の姿からはまったく想像できなかった。

「私は自分の娘が外の世界を知らない子でいてほしくない、そう思ったから無理を通してあなたを王都の外で育てることにしたの。王女の顔が知れわたればもう自由はなくなる、だから貴

族たちにも知られないうちにね。
　シリスにもその想いは伝えてあるから、竜騎士団に預けてからもいろんなところに行かせてくれたのね」
「そう、だったの……」
　行ってみる？　といつもいたずらめいた目で面白そうに告げていたシリス。それが母の意を受けたものだなんて知らなかった。
（それだけじゃない）
　――自分は、いったいシリスのなにを知っていたというのだろう。
「王女候補の娘がいるのは事実よ」
「――！」
　その一言にシエラは弾かれたように面を上げた。
（やっぱり……）
　自分と比べうる存在がカーラのほかにもいるということだ。
「でも一度たりともその娘たちに王統が移ったことはないの」
「え!?」
「なにを驚くの。王統譜を見たことあるでしょう？」
「う、うん。でも……」

たしかに女王の系譜は聖母の代からずっと母から娘への一本きり。しかしあまりにすっきりしすぎたそれに、養女の記載を省いているだけかと思っていた。

「それが偶然なのか聖女の恩恵なのかはわからないわ。でも女王の系譜は一本だけ、それは事実よ。――あの子はいろんな可能性を考えているけれど、統計や確率が大好きな子だもの。前例のない可能性はあまり考えていないんじゃないかしら」

(じゃあシリスは私を次期女王に考えているってこと?)

「私だってすべてを見ているわけでも知っているわけでもないわ。それでも女王として、得ることのできた限られた情報の中から判断して、決断しなければいけないの。あなたにとってそれが今なのかもしれないわね」

そしてセレネはおなじ色の娘の髪を撫でて告げた。

「――あなたは自分の心をお信じなさいな」

母が部屋を去ってひとり残されたシエラだったが、今度は顔を上げていることができた。

よく知った私室をゆっくり眺めると、頭の中はすっきり落ちついている。

シエラは膝の上から見上げていたルーに気づくと微笑みかけて、その頭をそっと撫でた。

――シリスは油断ならない人と思うばかりで、彼の本心などほとんど聞いたことがなかった。

けれども、一度だけ、彼の心の声を聞いたことがある。
『俺はね、その鳥籠の中の限られた選択肢から、君が幸せになれるように道を切り出すのが自分の務めだと思ってる』
それがどういう意図にせよ、あの言葉だけは嘘ではなかった――そう思える。
（だからシリスは自分を裏切ってなんかいない）
だからといってスメラギを救おうとはしていないし、いざというときには切り捨てるかもしれないけれど、いまはそのときではない。――シリスはなにかを企んでいる。
（でもそれが私のためなんだったら話してくれたって……）
そう思いかけたが、シエラは頭を振った。
（ううん、それじゃダメってことなのよね）
おそらくシリスはあの場で自分を裏切ることが必要だった。そしてシリスはこの筋書きを見越していたからこそ、スメラギに肩入れしすぎないように忠告してきたにちがいない。
（シリスのことだもの。きっとなにかあるのよ）
シリスが傍にいないなど初めての局面、なので動揺してしまっただけだ――そうわかったが、同時によぎったのは、寂しさだった。
いないことが寂しいのではない。――知らないことが寂しい。
（知ろうともしなかったものね）

シリスがそこにいるのはあたり前で、いつでもその場所は自分のためのもので、つなぎとめるまでもなくそれが失われるなど考えたこともなかった。

自分にとっての一番はスメラギだ。その想いが揺らぐことはない。けれどもシリスにも今までどおりいてほしいと思ってしまうのはわがままなのだろうか。

『おまえはわがままだからな』

スメラギの声音がその思いとかさなるように耳の奥に聞こえて、そのときの優しい微笑を思い出したら胸の奥がきゅっと苦しくなった。

(隊長に、会いたい、な……)

今日も、昨日も会っていない。大学校舎の上で会い、砦の私室に送り届けてもらったのがスメラギと会った最後だ。朝も早いですし見送られると泣いちゃうのでと、翌朝の見送りは断った。

スメラギの声は耳の奥で何度もよみがえらせることができるけれど、直接声が聞きたかった。吐息を感じたかった。

前はなにも話してくれなくても書類に目を落とす姿を見ているだけで幸せだったのに、いまはぎゅっと抱きしめてほしい。触れてほしい。ぬくもりがほしい。

代わりとばかりにルーが前足をあげてせがんでいたので、シエラはルーを抱き上げて強く抱きしめた。

（たしかにわがままになっているのかな）

執務室に隊長がいて、カイトがいて、シリスがときどき遊びにきてスメラギに煙たがられて。

そんなあたり前だった執務室の光景がなつかしい。

いまはもう王都にスメラギの執務室はない。もうあの時間は帰ってこない。

（けれどまた、新しく一緒に過ごす時間を作り出すことはできるはずよ）

『君が一番に守りたいのはラギ君のなに？』

なにが一番なんて決められない。竜公で隊長で大公になってほしい。けれどもシリスが残したその宿題はもう、自分を惑わせるためとか意地悪のためとは思わない。

きっとそれがこの事態から抜け出すための道なのだ。

「……ちゃんと、自分で考えないとね」

「くぁ？」

自分は隊長の傍にいたい。隊長にすこしでも優しい顔でいてほしい——けれどもそれは自分の勝手な願いだ。

（隊長の一番の望みは大公になることじゃない）

スメラギの望みはひとりの騎士として、聖竜デュラクの主として、先代大公に委ねられたこの国を守ることだ。

（そして私はその誇りを捨てさせるような主であってはいけない——）

「――あっ」

シエラの声にルーがびくりと顔を上げた。

（いまなんとなく……）

なにかが見えた気がする。

（合っているの……かな。でも……）

確信はない。不安も尽きないけれど。

――これがいまの自分の答えだ。

シエラはルーを抱きしめたまま、すっと面を上げた。

断章　陰謀の陰

学園都市リュースの黒竜隊長執務室、そこに設けられた自分の机に向かってペンを走らせていたカイトは、ふと手を止めると斜向かいの机に目をやった。
主不在の隊長執務机の上に積みあがりつつあるのは決裁待ちの書類だ。権限委譲されたカイトが可能なかぎり捌いていたものの、やはり隊長不在では限界がある。
（一度王都に届けに行くか……）
ため息をついたカイトは、ルーシェを送り届けた日のことを思い出した。
――あの日、ルーシェを送り届けたカイトは昼前にはリュースにもどっていた。
そしてこの部屋の主に帰還報告をするなり逆に手短に業務説明をされたかと思うと、部屋の主はそのままデュラクで王都へ翔んでしまった。
ルーシェが旅立って、わずか半日後のことだ。
（――心配するにもほどがあるだろ!?）
たしかに事が自分の結婚話となれば心配せずにはいられないだろう。だがスメラギにとってそれは二の次三の次、単に恋人が心配でしかたなかったようにしか見えない。
『王都に向かうのは団長命令だ』

そう言い置いていったが、本当かどうかあやしいものだ。

（恋するふたりの間に割り込んで馬に蹴られるのはごめんだが……）

何度隊長執務机を見やっても書類の山が低くなるはずもない。山は着々と育つ一方だ。いくら団長命令による不在とはいえ、業務に支障をきたすわけにもいかない。

（いまから翔んで届けて、また明日の夕方に取りにいけばいいか）

王都とリュースは竜の翼で一刻ほど、飛行訓練にちょうどいいとカイトが立ち上がったときノック音が響いた。

「なんですか」と返すと、竜騎士が扉を開けて敬礼した。

「大学の学生と名乗る娘が、隊長に面談を申し入れております」

「隊長に……学生の娘？」

ルーシェは王都にいるのだから彼女のはずがない。だが他に隊長に知り合いの娘などいただろうか。

（追っかけか？）

学舎時代から意中の相手を追いかける女子生徒の存在はめずらしくなかった。追い返せというのは簡単だが、今後もこのようなことがつづけば面倒だ。

それにスメラギが不在にしていることは他の隊員には伏せてある。自分が対応するしかないかとカイトは立ち上がると、応接室に向かった。

「お待たせしました」
と入ると、室内にいたのは長い金髪を後ろで無造作に結わえた娘だった。
年は自分やルーシェより上、まだ十七、八だろうが、少女というよりもはや女性だ。
顔立ちは整っているものの目線は鋭く、女性的なやわらかさやしとやかさとは無縁だ。知的な印象もあり、とても追っかけをするような娘には見えない。
隊長とはどのような関係なのだろうとまじまじと見ていると、娘はカイトの顔を見るなり口を開いた。
「あら、副官君じゃない」
「――は？」
「大講堂で名乗っていたでしょ。黒竜隊長副官のラーカイト・ウィンセル君」
たしかに大学で紛争が起きたとき、リュース独立を目論む輩が結集した大講堂の壇上でカイトはそう名乗った。
だが名乗ったのはたった一度だけ、しかもあの混乱の状況下でだ。名を呼ばれて不躾と思うより先に、よくおぼえているなと妙なところで感心した。
「そうですが、貴女は？」
「わたしはルーシェとおなじ政治学部に通っているカーラよ。本名はタリア・カリエンテラ・セルヴァンテス」

「……は？」

（いま、なんと言った？　……セルヴァンテス？　西侯の？）

聞きまちがいかとカイトが目を瞬かせていると、

「黒竜公閣下の副官をやってるくらいなら父と面識あるんじゃないの？」

と、タリア嬢は首にかけていたものを引っ張り出して見せた。

近づいて凝視してみると、鎖にとおされた銀の指輪、その紋章はまちがいなく西侯セルヴァンテス侯爵家のものだ。

（たしかタリアという名は……）

貴族名鑑によればセルヴァンテス家の末娘の名のはずだ。年は今年十八、たしかに彼女の外見とも合う。

「わたしはもう大学三年めなんだけど政治学部って女の子がすくないし、ルーシェと仲良くしているの。まぁこんな家柄だし、あの娘の正体も知っちゃってるんだけどね」

カイトは沈黙を貫いた。もし釣られて口を滑らせたりすれば社会上だけでなくこの世の中から抹殺されかねない。

タリアもそれは心得ているらしく、「まぁいいわ」と流した。

「あの娘、ちょっとお仕事で王宮にもどっちゃってるみたいだから黒竜公閣下のお耳に届けられる人に会いたかったんだけど、閣下もあの娘とご一緒なの？」

――タリアは確実にルーシェの正体を知っている。

だがこちらから情報を出してはならないとカイトが沈黙をつづけていると、タリアはため息をついて、「しかたないわね。とりあえず君が事件について知っているものとして話すわね」と語りだした。

――総長の意向でわたしがあの紛争について調べているんだけれど、実行犯と首謀者の自白内容に不審な点がいくつもあるのね。

まず、実行犯たちは王宮内にスメラギ閣下を陥れられるだけの味方勢力がいると信じ込んでいるの。でも首謀者サイラスの実家――ハーヴェイ子爵家って貴族議会には出られるけど陛下臨席の御前会議に出られる家じゃないでしょう。王宮内でそれほど発言権が大きいとも思えないのよね。まぁ実行犯が王宮の内情を知らなかっただけかもしれないけれど、サイラス・ハーヴェイの自白にも不審な点が多くて。

なんというか、今回の大学紛争は穴がありすぎるのね。これは失敗を見越したうえで仕掛けられたもの、もしくはリュース独立以外の他の目的があって仕組まれたものなんじゃないかしら――そして、この一件で目くらまし、もしくは他のなんらかの成果を得て、次になにか大きなことを起こす勢力が本当に王宮にいるんじゃないかって思ったの。

確信があるわけじゃないわ。今までの紛争の経緯と照らし合わせてそう感じただけなんだけ

どね。

カイトはタリア嬢の話を聞き、「十分に考えうる話です」とうなずいた。

「それとね、実行犯と接触しているというサイラス・ハーヴェイの助手が姿を消しているの」

「え？」

「大講堂にいた学生たちは、大講堂から出る際にみな竜騎士から学生証の提示を求められたわ。けれども講堂にその助手の姿はなかった。サイラスの下宿先にもね。

自分が仕込んだ蜂起の場に居合わせないなんて考えられる？　本当なら一番見届けたいところでしょう？　放火や傷害事件の犯人とおなじ、自分の起こしたことの結果を見たいはずよ。だから彼の目的は別にあったんじゃないかって思ったのもあるのだけれど」

（助手……あいつか）

カイトは眼鏡をかけた人のよさそうな青年を思い出した。

偶然とはいえ、蜂起の前日にサイラスの研究室の査察に入ったのは自分だ。

年は二十代半ば、サイラス当人よりよほど研究生に向いていそうな、才長けた印象の青年だった。

（名はたしか――デューク）

自分はその者と顔を合わせ、声も聞いている。

（あいつが姿を消した……？）

「かなり証拠隠滅をはかった跡があるし、彼が裏で動いていたのは確実ね」

にわかにサイラス以上の首謀者がいる――その話が信憑性を帯びはじめた。

（あいつはどこに行ったんだ？）

紛争の背後にサイラス・ハーヴェイがいたことは表沙汰にしていない。なので助手のデュークも怪しまれることなく大学に残っている可能性もある。

だがまず可能性が高いのは王都のハーヴェイ家だろうか。調べてみる価値はありそうだ。

「もちろんわたしも父に手紙を書くつもりよ。だけどなんといっても竜の翼は速いから。王都まで関所なしでひとっ翔びでしょ？」

スメラギとルーシェが王都にいるという前提での話だったので、カイトはそこは肯定するわけにはいかず、

「――情報提供に感謝する」

その一言でとどめておくと、「ガードが堅いわねぇ」とため息を漏らした。

「ま、またなにかわかったら知らせにくるわ。聞いてくれてありがとう、ラーカイト君。良血ウサギちゃんによろしくね」

警備にあたる竜騎士たちの厳しい視線、カーラはそれをふんだんに浴びながら砦を出ると、両手の指をからめて「うーん」とおおきく伸びをした。

視線を浴びるのは慣れているがそれは社交界での話、不審者のように不躾に見られることには慣れていない。視線が刺さって肩がこる。

（あ、そっか、竜騎士団ってみんな神学校卒だから部外者が入りこんでもすぐにわかっちゃうのね。それにしてもお固いというかさすが統率がとれているというか、あの副官君も生真面目な優等生っぽかったしねー）

年はどう見ても自分より下、ルーシェとおない年かひとつ上か。

基本的にカーラは年上ばかりに囲まれての大学生活なので年下を見かけるのはひさびさだ。だが騎士叙任を受けているということは彼は成竜の主、もう立派に社会的地位のある大人だ。

（ラーカイト君……ね。あの娘の正体は知っていたみたいだけど）

ルーシェが王宮にいることを前提に話をしても、彼は表情ひとつ変えることはなかった。あの場で否定しなかったことが肯定の証だ。

だがかたくなに否定するつもりもなかったらしい。ルーシェは王女と明かせない、自分も気づいていても言えない、そういう事情も読んでいたのだろう。

たしかに固いといっても陸軍みたいながちがち頭ではなく、勘はよさそうな少年だ。

（スメラギ閣下の副官をしているくらいだものね。あの娘とも仲がいいのかしら？）

スメラギとルーシェとラーカイト――そしてシリスもくわえて四人でいるところを想像してしまい、カーラは思わずぶっとふきだした。

カーラはすれちがう学生に不審に思われないよう口元を手でおおいながら早足で研究室に向かい、扉を閉ざすとこらえていた笑いを一気に吐き出した。

（あんな長男気質なのに一番下なのねー）

団長が王族のシリス、隊長で敵国皇子のスメラギ、その恋人が王女のルーシェとなれば、彼もけっして家柄は悪くないのに結果的に一番下っ端だ。

シリスは彼の立場を理解したうえで、スメラギとルーシェはまったく理解せずに天然の無意識でいいように彼を使ってそうだ。周りがクセモノぞろいでかわいそうすぎる。

（しかもその面子にわたしがくわわったりしてもやっぱり一番下だから、こき使われちゃうわけねー）

あーあんな真面目なのにかわいそー、と笑いすぎて目じりにたまった涙を拭いていると、すぐ背後の扉からノックの音がした。

まさか笑い声が大きすぎて隣の研究室から苦情がきたわけでもないだろうが、カーラはふり返ってノブを回した。

「はい？」

廊下にいたのは二十代半ばの青年だった。

さらさらの金茶の髪に丸眼鏡、眼鏡の奥の瞳は人のよさそうな笑みを浮かべている。
この青年はたしか院生の助手だ。法学部の学部棟で何度か見かけたことがある。
「なにか？」
他の学部と研究上の接点がないわけでもないが、この人の専攻ってなんだったかしら――と思いめぐらせていると、かすかに青年の口端が上がった。
「――っ！」
身の危険を感じたカーラはとっさに扉を閉めようとしたが、すばやく隙間に足を挟まれた。
そして青年は身をすべりこませて後ろ手に扉を閉める。
カーラはきっと睨みつけると、叫び声をあげようと息を吸ったが口元を布で押さえられ、その息が声に変わる前に意識を奪われた。

（ここ、どこ……）
カーラが意識を取りもどすと、見知らぬ一室の寝台の上に横たわっていた。
枕は頭が沈むほどにやわらかく、寝台は天蓋付きだ。寝台のカーテンは開け広げられたままだがその布は重厚感のある濃い紅色、卓子などの調度を見てもここが貴族の邸宅なのはまちが

いない。
布団の中に寝かせられていたものの、衣装は意識を失う前のままだ。
カーラが頭をもたげようとすると、意識がぼうとする中、つきんと痛みがはしった。
「いった……」
殴られた痛みではない。薬を嗅がされたようだ。
（わたしなんて誘拐してなんの得があるっていうの）
たしかに生まれこそ侯爵家息女だが、跡継ぎは年の離れた長兄に定まっているし、政略結婚の道具としても期待されているかどうかもあやしい一大学生だ。
（身代金がほしいような暮らしぶりでもなさそうだし、わたしなんて質に取ったところで政治的要求がとおるとも思えないし……ということはやっぱり目的はわたし自身ってこと？）
ふらつく頭で立ち上がって窓辺に寄ると、鉄格子などはなく、外には手入れの行きとどいた庭園が広がっていた。
どう見ても貴族――しかも生家と変わらないような大貴族だ。
「お目覚めですか、タリアさま」
はっとふりかえると、気配もなく扉の前に立っていたのは眼鏡の男――自分をさらった青年だった。
（しかもタリアって……わたしの正体を知っている……？）

ルーシェとラーカイトにはセルヴァンテス家の名をあっさり明かしたが、その名の影響力はあまりに大きい。大学内で自分の出自を知っているのは総長ラウールくらいのもので、普段はルーシェとおなじく分家の姓を使っている。

カーラは窓に背を押し付けるようにして、なるたけ青年から距離を取った。

「――ここはどこ」

「北侯の居城です」

（北侯？　ルクセンドア侯ってこと!?）

北侯と呼ばれるだけあってルクセンドア侯爵領はローレンシアの北方、おなじく北に位置するリュースからも近く、馬で一昼夜ほどの距離だ。

（そして、そうたやすく名を明かすということは、わたしを逃がす気も帰す気もさらさらないってわけね）

「わたしを誰だか知っていながらずいぶんなお呼び立てね？　名のあるお方のなされることとは思われないのですけれど？」

「火急の用にて大変失礼いたしました」

そう言って胸元に手を当てて礼をする姿は様になっており、名家の家令と言っても恥ずかしくないものだった。実際、青年の衣服は大学で助手をしていた先ほどまでとはちがっていて、ルクセンドア家に仕える者の中でもかなり地位が高いことが想像できた。

だがこちらは西侯セルヴァンテス侯爵の息女だ。なんら臆することはない。

「まさか、あなたがわたしに用事があるとは言わないわよね？」

あなたごときが呼び出していい相手だと思っているの。そう言外に告げたが、青年が気分を害した様子はなく、無論にございますと首肯した。

「ご用がおありになるのはわが主カディナ伯ヴィクトールさま、私はお仕えしているデュークハルトと申します」

（！〈デューク〉……!?）

報告書でしか見たことのなかった者が目の前に実在している――この者が、リュースの紛争を操っていた黒幕だ。

（しかもルクセンドア侯爵が絡んでいたなんて！）

やっぱり事はハーヴェイ子爵家で収まる話ではなかった。リュースの一件の実行犯たちも、背後におおきな存在がいると思っていたようだが、まさか御前会議に出席する四侯が関わっているとは思っていなかっただろう。

そう思うと同時にカーラは己も渦中に巻き込まれたことを知った。

（まぁ、部外者や傍観者でいさせてくれるほど甘くはないわよね）

誘拐されて泣き叫んだり恐怖にうちふるえたりするのはあいにく自分の性分ではない。

（王都も大変なことになるかもしれないわね。――踏ん張りなさいよ、ウサギちゃん）

カーラはほぅとひとつ息を吐き出すと凛と顔を上げ、真正面からデュークと名乗った青年を見据えて口を開いた。

「――で、ルクセンドア侯爵の跡取り殿がわたしにいったいなんの用だというのかしら？」

第4章　守るべきもの

シリスの裏切りから一夜明けて、シエラはふたたび御前会議の席についていた。

昨日はもうここにいたくない、この場の空気を吸うのもつらいと思った議場だが、今日は心落ちついた気持ちで眺めることができた。

まず議場に入ってきたのは北侯ルクセンドア侯爵代理のヴィクトール、つづいて入ってきたのは南侯ウィルハーグ侯爵。赤竜隊長グレンは白竜隊長リュシエルの隣の席についたが、今日は南侯代理ではないので発言権はないに等しい。

（でも私はやるべきことをやるだけよ。ちゃんとご飯も食べてきたし）

竜騎士団長のシリスと宰相のセルティス、そして最後に女王を迎えて今日の御前会議がはじまった。

まずはシエラがすっと立ちあがり、

「本日、私がお話ししたいのは黒竜公スメラギのことです」

そう述べるとすかさずヴィクトールが立ちあがった。

「その件でしたら、先日決を採ったはずですが」

「決を採りたいわけではありません。今日は黒竜公の一竜騎士として歩んできた道についてお

話ししたいのです」

シエラが心穏やかに口調を乱すことなくそう告げると、話したいなら勝手に話せと思ったものか、ヴィクトールは異論を挟まずに席に着いた。

シエラは議場をゆっくりと見渡して、口を開いた。

「黒竜公がアズィール皇帝の子であったことは、先日あきらかになったとおりです。しかしそれは生まれてより十八年、黒竜公自身も知らぬことでした。

黒竜公は十余年前に孤児としてわが父に保護され、教会に預けられました。五、六歳のときのことです。それから教会の教えを受け、七歳で我が国を守る竜騎士となるために神託を受け、そこで父の次代となる〈闇〉の聖竜を授かりました。そして王都神学校に入って〈神の山〉にて修練を積み、十六歳にて騎士叙任を受けました。

その際、黒竜隊長の職を拝命しましたが黒竜公とは認められておりません。通例ならば騎士叙任と同時に行われるべきところ、どのような経緯があったのかは存じませんが、竜公として認められたのはほんの数ヶ月前のことです。私がこの手で竜公の聖杖を授けました」

このあたりの経緯は、自分などよりこの場にいる者たちのほうがよほどくわしい。そしてだれもなんの異論も挟まなかった。

「そしてアズィール皇帝との縁が判明したときには黒竜公は竜騎士団長に申し出て、その地位についてはすぐさま御前会議にて諮られました。そののち黒竜公は皇子に指名され、学園都市

リュースの司令として異動となり、異論なくその命令に従いました。
リュースでの黒竜公の様子をお伺いするために、本日はリュースの大学長であるイリアム・ラウール師においでいただきました」
思いがけない名に議場がざわめく中、シエラの言葉に従って上座脇の扉が開かれ、初老の男が現れた。
顔見知りのセルヴァンテス侯と白竜隊長リュシエルがその姿を見るなり立ち上がる。ほかの者も次々に起立し、長年教育に携わって国に益する人材を輩出しつづけるリュースの大学長に対して畏敬の念をもって迎え入れた。
ラウールは女王に対して一礼して議場に向き直り、みなの着席を待ってゆっくりと口を開いた。
「私は長きにわたって神学校のあり方について苦言を申し述べてまいりました。まだ七つになったばかりの子らを全寮制の檻に閉じ込め、家族とのつながりを断ち、かぎられた世界の中で限られた情報のみを与える、そのように育てることはたして教育と呼べるのか、と。それら狭窄的、画一的な視野はいずれ竜騎士団にも悪影響を及ぼしかねないと。
――しかし彼らもまた、志をもってみずから望んでその枠に収まったのだと、そう思える一件がございました。そう思わせてくださったのが、このたびリュースに赴任してこられた黒竜公です」

その一言に、ざわ、と議場の空気が揺れた。

「私の知る歴代竜公はみな名だたる家の出、国に尽くすことはひいては家門を守ること、その名と血に誇りをもって竜公の任を果たしておられたものと思っておりました。

しかしあの方はちがう。この国につながれるべき家も血もなく、それどころか異国の地にその両方があるとわかってなお、この国のために生きることを選ばれた——大学内である騒動が起きたとき、その御心を私はしかと見せていただきました。

彼の方こそ、まことこの国を守護する聖竜の主にふさわしい御仁とお見受けいたします」

竜の加護に頼らず、人知に基づく国作りを目指す〈知識派〉、その総本山にいるはずのラウールの口からスメラギを肯定する言葉が出てくると思っていなかった面々は、一様に言葉をなくした。

王女の要請でこの御前会議に現れたとはいえ、心にもないことを口にする人ではない。そのようなことをすれば、自由な言論の保証された場所で行う学問——〈大学〉という理念を汚す行為になる。

だとすれば、ラウール師の言葉は彼の本心——つまり、〈総長〉であるラウールがスメラギを黒竜公として認めていることになる。

思わぬ発言に議場が静けさにつつまれる中、シエラはラウールに「ありがとうございました」と一礼してみなに向き直った。

「黒竜公のリュースでの務めようについては、ラウール師のおっしゃったとおりです。黒竜公が政治的に難しい立場にあるのはたしかでしょう。しかし黒竜公が一竜騎士として忠義を尽くし、ローレンシアを守ろうとする人物であることを否定できないはずです。黒竜公が一度として竜騎士として恥じ入るようなことがあったでしょうか？　出自を追及し、否定するのはたやすいことでしょう。しかしそれは竜を賜ってより十年以上にわたる彼の意志とその努力を否定することです。

空に国境はなく、天空神の加護はあまねく降り注いでおります。異国の地で生を受けた黒竜公スメラギが聖竜を授かったことは天空神のご意志です。なにより我が国は、ローレンシアの民として生きようとする黒竜公の意志を――いえ、黒竜公だけではなく、我が国で生きようとする者の希望を、国が拒絶してはならないと私は考えます」

シエラはそう言い切ると議場を見渡し、そして最後にシリスと目が合った。

――君が一番に守りたいのはラギ君のなに？

そう訊ねたときとおなじ、人を試すような眼が自分を見つめている。

（これが私の答えよ）

自分が守りたいもの。それは隊長としてでも、竜公としてでも、大公としてのスメラギでもない。

出自もなにも関係なく、スメラギがいままで積み上げてきた人生――ひとりの竜騎士として

の誇りだ。

べつにシリスの正解がほしかったわけではない。これを伝えたからといってスメラギの状況のなにが変わると思ったわけでもない。

しかしこの場にいられないスメラギの代わりに自分が――彼に剣を捧げられた主として伝えなければいけない、そう思ったことを伝えただけだ。

「――私からの話は以上です」

シエラはそう告げてシリスの眼を振りきるように視線をはずし、用は済んだとばかりに席に着こうと踵を返しかけたところ、低い声が追ってきた。

「――いたしかたございませんな」

(……え?)

ふり返ると、その声は西侯セルヴァンテス侯が発したものだった。

「たしかにそう言われてしまっては反対もできないでしょう。私も一応、学舎出身なんでね」

そんな言葉を継いだのは南侯ウィルハーグ侯だ。

(え、どういうこと……?)

シエラが目を丸くしているうちにヴィクトールを除く四侯が話をまとめてしまい、

「まぁ、皆さまがそうおっしゃるならば否やはありませんよ」

とシリスがいつもの穏やかな笑みをくずすことなく告げて、宰相と女王が肯き、いつの間に

かスメラギの御前会議召喚が決定していた。

（あれ？　あれ？　あれれ……？）

御前会議が終わり議場を退出したシエラだったが、歩きながら首を傾げていた。

（……勝った、のよね……？）

結論的にはそうなったはずなのだが、思い返してみてもいつスメラギ召喚に空気が傾きはじめたのかわからない。

「よっ。お嬢、よくやったな」

先ほどおなじ議場にいたが出口は別のグレンが、王宮を回り込んで会いに来てくれた。

「ようやく許可も下りたことだし奴を迎えに行かないとな。いまから翔べば余裕で今日中に王都に――ってお嬢？」

目の前でひらひらと手を振られて、シエラは我を取りもどした。

「あ、すみません」

「どうかしたのか？　なんか考えごとか？」

「あの、いえ……隊長召喚が認められたのは嬉しいですけれど、どうして認められたのかまだよくわかっていなくて……グレン隊長、わかりました？」

「そういや……なんでだろうな？」

（こういう人だった……！）

こまけぇことはいいんだよ、の一言ですべてを薙ぎ払う人だったと思い出しかけたシエラだったが、「冗談だよ」とグレンは笑った。

「なんていうか、今日のお嬢はちゃんと王女らしく見えたぞ」

めずらしく褒められて、ぽーっとグレンを見上げていたシエラだったがはっと我に返った。

「――それ、褒めてます!?」

（今日のって、今日のって……ううう……）

するとグレンは苦笑を浮かべながら、「まぁまぁ」と宥めるようにシエラの頭をぽんぽんとたたいた。

「昨日までもちゃんとがんばってたけど、今日はやっぱどこかちがったよ。なんか気持ちの変化でもあったのか？」

「変化、というか……なんとなくですけど、問題を乗り越えるんじゃなくて、本当のことをあきらかにするのが自分の務めなんじゃないかって思って……」

（それが隊長の一番の望みだと思ったから）

するとグレンは感心したように「へぇ」と肯いた。

「勝ちに拘らなくなったのがかえってよかったのかもな」

「え？　どういうことですか？　だって勝たないとダメでしょう……？」
御前会議は大学の討議演習とおなじく、相手を説き伏せるべき場であるはずだ。
「ちがうよ。いや、ある意味合ってるのか。――おまえさんが勝たないといけないのはなにに対してだ？」
「なにって、議論に……」
「ちがう。おまえさんが向き合うべきはこの場かぎりの議論じゃない。これから自分が王女としてどうあるべきか、だろ」
（あ……）
「おまえさんがすべきは採決という小賢しい手で敵を負かすことじゃなかったってことだ。国家としての指針を示し、王女として、未来の女王としての片鱗を見せたからオヤジたちも納得したってことなんじゃねぇの」
「……」
それまで議論で勝つことばかりを考えていた。スメラギを守るためにはなんとしても勝って、釈明の場を作らないといけないと。
（けれども私は）
――スメラギを守るよりも先に、自身がスメラギの主として、そしてこの国の主としてふさわしい王女だと示さなければいけなかったのだ。

（……だから学生じゃなくて王女だからねって言ってたの？）

先ほどのシリスは、なんの異論も挟まずにスメラギの召喚を受け入れてくれた。シリスに対して出した答えではなかったけれど、シリスが納得できるものだったということだ。

「じゃあリュースには俺のほうから急使を出しといてやるから」

お疲れさん、とシエラの肩をたたいてグレンは立ち去った。

（いまなら、ヴィクトールとも話ができるかしら……）

あの場の空気に呑まれる形で、ヴィクトールもスメラギ召喚を肯定しないわけにはいかなかった。だが当然胸の中には納得できない想いが渦巻いているはずだ。

（こんな状況のままは嫌だから……）

スメラギの到着は早くても夕刻だ。それまでにヴィクトールと話し合いの席を作ろうと、シエラは女官にヴィクトールを呼びにやらせた。

しかし私室で待っていたシエラの許にヴィクトールが現れることはなかった。

昼食を終えた頃にやっともどってきた女官が伝えたのは、ひとつの報せだ。

「えっ、カディナ伯が領地に帰ったですって……!?」

女官いわくヴィクトールは、黒竜公スメラギが王都入りしてもかまわない、しかしその際の王都の混乱の責任は持ちかねると領地に帰ってしまったとのことだ。

「北侯は私兵を引き連れて王都を後にし、その軍勢の動きに民は王宮でなにがあったのかと不

安をかきたてられております」
（そんな……）
ヴィクトールの狙いは明白だ。
スメラギの王都入り、それを民の恐怖の感情を盾に阻止しようとしているのだ。
悪化した事態に、シエラはその場に立ちすくむしかなかった。

「お加減はいかがですか」
「ああ、そこでいい」
ソファーに深くもたれかかったスメラギの肩に、心地よい刺激が走る。
薄手の貫頭衣を介してぐりぐりとツボを押される感触はクセになりそうだ。
「よく御身体を鍛えておいでですね。こちらにいらしてからも毎日鍛錬をつづけていらっしゃいますし」
「それはまぁ、これが商売道具だからな」
「やはり右のほうが凝っていらっしゃるようですね」
スメラギは左利きだが竜騎士団ではみな右利きに矯正される。スメラギもそれに合わせてす

べてを右手で済ますが、元の利き腕ではない分、負担がかかっているのかもしれない。
肉付きで利き腕を悟られるかと思ったが、ナシルはそれ以上言及することもなく最後に軽くもみほぐし、「お疲れさまでございました」と肩から手を離した。
「これで血行がよくなるはずです。お飲み物などお持ちいたしましょうか」
「いや、ずいぶん楽になった。俺のことは気にするな。ただの居候だしな」
「滅相もございません。アズィールにいらっしゃればこのようなご不自由をおかけせずにすみますものを」
（……不自由？）
心底悔いた様子でナシルは飲み物を取りに部屋を下がり、残されたスメラギはいまの自身の姿に目を落とした。
貫頭衣の肌着の上から厚手のローブを羽織り、ソファーはローレンシアのものだが伸ばした足元にはアズィールの豪奢な織物の足置きがある。
足裏マッサージは先ほどしてもらったところで、その間も今も無言でソファーの傍らに立つ男が目を閉じたまま、大きな団扇を左右に振ってゆるやかな風を送りつづけていた。
これで不自由など、どこの王侯貴族だというのか。
（……というかアズィールの皇族なのか）
生まれてこのかた、こき使われることしかなかった人生だ。いきなり皇子扱いされても困る。

それにスメラギはローレンシアに四人しかいない王族を期せずしてふたり知っているが、ふたりがこんなに優雅な生活をしているとはとても思えなかった。

（ルーシェも王宮ではこういう生活をしているのか？）

王女をしている姿は実際に目にしたことがあるが、それでも彼女が侍女にかしずかれて優雅に生活している姿が想像できない。ドレス姿のウサギが幼竜を抱き上げて戯れている姿がせいぜいだ。

（……元気にしているか？）

宮殿は別だがおなじ敷地内に彼女はいる。しかも自分には悪鬼の巣窟に見える王宮だが彼女にすれば実家だ。ただ家に帰っただけ、なにも心配することはないとわかっていても、心がざなみだつ。

（またひとりで泣いているんじゃないだろうな……）

そのとき、果実水を運んできたナシルが声をかけてきた。

「殿下、竜騎士が訪ねてまいりましたがいかがいたしましょう」

「竜騎士？　誰だ」

一瞬ウサギの姿が思い浮かんだが、彼女は自分がここにいることを知らない。

ではシリスか？　と一瞬ひやりとしたが、「ラーカイトと名乗っておりますが」と言われてほっと息をついた。

「ああ、俺の副官だ。通せ」
ほどなくカイトが現れ、ナシルに人払いを命じると従僕とともに部屋から下がった。
ソファーでくつろぐ自分の姿にカイトは扉の前でたたずんだまま呆然とし、目を丸くしていた。
「なにか用か」
「いえ……なんだかずいぶん優雅なお暮らしぶりですね……それにそのお衣裳は……」
「これがアズィール皇族の平服なんだそうだ。やっぱり変か？」
先ほどまで肩をもんでもらっていたために肩先まではだけていたローブを着直す。
その厚手のローブの襟や袖には、魔除けの護字とかいうものが金糸でぎっしりと縫い取られている。
「いえ、なんというかさすがというか……とてもよくお似合いです」
「褒められてもあまり嬉しくないな。それでどうした」
「はっ。実は昨夜、セルヴァンテス侯爵令嬢タリア様が大学で行方知れずになったとの報せが入りまして」
「――タリア嬢が？」
「はい。偶然その日の昼に竜騎士団にいらっしゃいまして、夜になっても御姿が見えないのでまた竜騎士団に来ているのではないかと問い合わせがきて発覚いたしました」



「タリア嬢が竜騎士団にいったいなんの用だ」
タリアは自分の婚約者候補だったがその件はきっぱり断った。いまはルーシェの良き友人だ。シエラが王都にいる以上ルーシェがリュースにいるはずもなく、ルーシェが大学を休みつづけているのを心配して訪ねてきたのかと思ったが、
「隊長宛てに先般の事件の報告をしにおいでした」
そう告げて、カイトはタリア――大学ではカーラと名乗っている彼女の推測を伝えた。
「助手の不在、隠蔽工作、紛争の裏にいるのはハーヴェイ家だけではない、か……」
「サイラス・ハーヴェイの助手、デュークの足取りを追っていますが、事件当日に馬車で街を出る姿を目撃されたのを最後に情報が途絶えています。街の出口から察するに行き先は王都ではないかと。デュークの件で判明しているのは以上です。
それと別件になりますが、ちょうど先ほど上空から兵の大移動が見えたので情報を仕入れてきました」
「兵？　陸軍か？」
一瞬アズィールが軍を動かしたのかと思ったが、国使のナシルがここにいるのだ。それはありえない。
「北侯が――いえ、北侯代理のカディナ伯が私兵を引き連れて王都を出ていったとのことです。隊長の御前会議召喚に対する抗議のためと聞きましたが……隊長？」

その報告半ばにしてスメラギは立ち上がっていた。
「すこし待ってろ」
そう言い置いてスメラギは隣室に入ると、ものの数分で竜騎士隊服に着替えてカイトの待つ部屋にもどった。早着替えは学舎で嫌というほど叩き込まれている。
カイトを引き連れて部屋を出ると、続きの間で控えていたナシルが驚きに目を瞠ったが、
「仕事だ。すぐにもどる」
そう告げると「はっ」と膝をついて見送った。

カイトを別室に待機させ、スメラギが向かった先の部屋にはふたりの衛士が警護に当たっていた。だが衛士はスメラギの姿を見るなり敬礼し、歩みを阻まぬように道を空けた。
そして控えの間の扉をスメラギが荒々しく開け放つと、陽だまりのなかにいた部屋の主は、
「やぁ、おつかれ」と実にさわやかにのたまった。
「はじめての皇族暮らしはどうだった？」
「どうもこうも身体がなまってしかたない。ろくに身体も動かさないのに食事はわんさか出てくるんだからな。ちょっとは抑えろ。国費の無駄遣いだ」
「竜騎士団の食堂とはわけがちがうよ。国賓を飢えさせたりして貧しい国だと思われるわけに

はいかないでしょ。面子の問題だよ。肥えたように見えないけど、食べた分はあとでちゃんとこきつかってあげるから」

「これ以上仕事を増やすな。で、うまくだまくらかせたんだろうな」

「君のおかげでばっちり、ね」

にっこりと笑って見せるシリスはとても人を欺くようには見えないが、笑顔で平然と罠をかける悪党であることをスメラギはよく知っている。

スメラギがナシルのところに身を寄せていたのもシリスの指示だ。

――あの日、ルーシェがリュースを発つと入れ替わりにシリスからの伝令が来た。

いわく、誰にも見咎められることなく王宮に忍び込めとのこと。召喚命令で呼び出してくれれば良いものをと恨んだが、そうもいかない事情があるらしい。

ローレンシアの王都、とりわけ王宮は空からの侵入の備えも万全だ。己が率いる黒竜隊がその任に当たっていたのだから守備の厚さはよくわかっている。空からの備えのないアズィール皇宮のほうに忍び込むほうがどれだけマシかと思いながら、スメラギは夜闇にまぎれて〈神の山〉に降り立ち、野山をかき分けて王宮侵入の真似事をする羽目になった。

そしてなんとかシリスの部屋までたどり着いたと思えば、次はアズィールの使者――ナシルの元に行けという。

『忍び込むだけで疲れたでしょ。君はそのずたぼろの恰好のままでナシル君のところに逃げこ

んで、あとはナシル君の下でだらだらしててくれればいいから。きっと優雅な生活を送らせてもらえるよ』

　まぁ余裕があったらアズィールの内情でも探ってきなよ、と言われてはじまった贅沢三昧の日々だが、三日もたたずしてすでに飽きている。

「俺を敵の穴ぐらに放り込んでいる間、おまえはなにをやってたんだ」

「なにっていろいろとね？　俺と君の仲が悪いように思わせなきゃいけない相手がいたものだからさ」

「普段から仲がいいとも思ってないが」

「それは君の気持ちでしょ。周囲から見てどうって話だよ」

　周囲からもシリスの遊び道具にしか見られていない気もしたが、つっこむのはやめた。

「それが北侯というわけか」

「おや、情報が早いね。ナシル君から聞いた？」

「いや。カイトが王都上空から北侯の私兵が立ち去るのを見たと報告してきたからな。おまえが狙っていたのはこれかと思っただけだ」

「なるほどね、ご明察。北侯の跡継ぎがヴィクトールっていうんだけど、その手の者がナシル君に接触したみたいだったからね。ちょっと利用させてもらおうかなと思って」

「吹き込む内容に信憑性を持たせようとしたわけか」

ナシルの元に自分を逃げ込ませて、竜公ふたりが割れていることを信じこませる。一方シリスもヴィクトールに接触しておなじようなことを吹き込んだ。ひそかに裏で手を組むふたりが期せずしてそれぞれおなじ情報を仕入れたのだ。たやすく信じたことだろう。

「彼は君の王都入りに反対してね、御前会議でシエラと真っ向から対立してたんだよね」

――シエラ。

あたり前にシリスの口からこぼれ出た一言がスメラギの胸に刺さり、息が詰まった。

父大公を戦で亡くし、心傷ついた少女、王女シエラ――自分が生涯をかけて守るべき相手。そのような者は存在しないのだと判明したいまでも、その偶像はまだ心の中に住まっている。本当の王女はあのウサギ――そう頭で理解していても心が追いついていない。

「そこでつついてみたら本性見せないかなーって、ちょっとラギ君を排斥したがってるふりしてあげたわけ」

「それと北侯が――いや北侯の跡取りが領地に帰ったこととどうつながるんだ」

「ん、彼は君の王都入りを反対していたんだけど、シエラががんばって話をまとめて、ラギ君を召喚することに決まっちゃったんだよね。そこでヴィクトールはその決定に対する不服の意を表すために、派手に宣伝がてら私兵を引き連れて領地に帰ったわけ。もちろんその噂をばらまく工作をした上でね。

君はアズィールの皇子で、いまアズィールから国使が来ている状態で、しかも御前会議に出

ている北侯が王都入りに反対して私兵を連れて王都から引きあげた。王都の民は当然、どれだけ君が危険な存在なのかって不安になるよね。そんなところに君が黒竜隊を引き連れて王都に帰ってきてみなよ、王都は大混乱だよ。そこで一騒動でも起きれば――というか起こす工作をしていったみたいだけど、君の名声と社会的地位は大暴落、アズィールの息のかかった黒竜公を政治の表舞台から排斥する名目が立つというわけだ。

君が俺の命令に従って素直に解任に応じればよし、応じずに〈闇〉の聖竜の力を使って黒竜隊の力をほしいままにして応戦するというなら、俺の挙兵に呼応する形で北侯も兵を挙げるという算段だよ」

ま、俺が彼の思惑に乗ってあげる義理はないけどね？　とシリスは笑顔でつけたした。

「まんまと踊らせやがって……」

「どうも俺はそういう役回りが似合うらしくてね。そんなに腹に一物抱えてるように見えるのかな？」

「王族より詐欺師のほうが向いてるってことだろ」

そう切り捨てると、「ひどいな」とシリスは傷ついたふりをして顔を背けてみせたが、その面にあるのは苦笑だ。

「しかし問題だけ浮き彫りになって、なにも解決したように見えないんだが」

「そんなもの今からなんとかするに決まってるでしょ。ナシル君に甲斐甲斐しくお世話しても

らってるうちにすべて問題が片づいてるなんて甘いこと考えてないよね、当然？」
「それはそうだが、俺は北侯の跡継ぎとやらにそこまで忌み嫌われる原因がわからないな。奴は血統重視の純血貴族派か？」
「理由なんて人それぞれだよ」
「事情を知っているのか？」
「まぁね、でもくだらない理由だよ。君が知る必要もない程度のね」
シリスは思いのほか多くの情報を握っているらしい。
（……けれどそれほど優位に立っていたなら）
「他にもっと方法があったんじゃないのか？」
挙兵してしまえば国家反逆罪だ。仮に戦端を開く前に矛を収めても、後継ぎが政治復帰できる可能性はきわめて低い。家門断絶までいかないにしろ、後継ぎの座を失うことになる。
味方だと信じさせることができたくらいだ。口先で丸め込んでいまの事態を回避する方法もあったはずだ。
（これではまるで、こいつが率先して挙兵を焚きつけたような――）
そこまで思い至り、スメラギははっと顔を上げた。
（それが、狙い、か……？）
まさか、という思いは次の一言で粉砕された。

「――彼は他国と手を結ぼうとした」

いつもと変わらないはずのシリスの声音。しかしその奥底の凍てついた空気にスメラギは言葉が出なかった。

「それだけで排斥する理由としては十分じゃない？」

ヴィクトールは本人の気づかぬところでシリスの逆鱗に触れていたらしい。

（……見せしめ……か）

戦をするにあたって最大の敵は正面の敵軍ではない。自軍内の裏切り者だ。

これからローレンシアが強大なアズィールと戦うためには内から割れるわけにはいかない。四侯と呼ばれる聖騎士の末裔といえども国を裏切ればどうなるか――それを貴族たちに見せつけるためにシリスは見せしめの生贄を作ることを選んだ。

目的のために、笑顔のままどこまでも冷酷になれる人間だ。それもすべてこの国のため。これだけの覚悟を見せつけられれば、肝に銘ずるしかない。

（明日は我が身……か）

スメラギは細く息を吐き出して、緊張で速まった鼓動を鎮めた。

「――で、奴はなにを狙っていたんだ」

「もう過去形なんだ？」

まぁいいけど、とシリスは苦笑を漏らして言葉をつづけた。

「さっきも言ったけど君の排斥、そして事がなったあかつきには竜騎士の危険性を主張して、竜騎士団の力、そして竜公としての俺の力も削ぐつもりだったんじゃないかな。彼は純血貴族派に見せかけた知識派で、竜騎士団をつぶしたかったんだよ」

「……それは災難だったな」

よりにもよって、もっとも裏をかこうとしてはいけない相手を出し抜こうとしていたらしい。

「まぁね、いまから災難にしてあげるよ。誰ももうそんな気が二度と起こせなくなるくらいにね」

そうして浮かべた笑みはまさに魔性と呼ぶにふさわしいものだった。

――が、スメラギはシリスのその笑みにいつもとちがう違和感を覚えた。

シリスが笑顔で人を陥れるなどお手のものだ。盤上の駒をあやつるがごとく、シリスはいともたやすく現実をもてあそぶ――そう、いつだってシリスがみずから盤上に上がってくることなどなかったのだ。

スメラギは、執務机に両肘をついたまま笑みを絶やさないシリスを見据えた。

「――どうしておまえみずから動いた」

唆したヴィクトールの失脚までの筋書きはもうシリスの中にあるのだろう。しかしもし接点

を表沙汰にされればシリスもまたその失脚劇に巻きこまれる。政治生命を脅かされるほどではないにしろ、その名に傷がつくかもしれない。

名を傷つけること――それは王族としての権威を傷つけることでもある。いままでのシリスならばなによりも避けたはずのことだ。

「ほかにやりようがあったろう」

怒りを押し殺してそう告げるとシリスはきょとんと見つめて、おそらくその一呼吸ほどの間にその言葉の何十通りもの意味を考えて、やがてふっと笑みを漏らした。

「俺の心配してくれるんだ？」

「――！　馬鹿言え！　俺は政局を案じているだけだ！　四侯の一家が欠けるかもしれないときにおまえまでいなくなってどうする!?」

「んー、どうなるだろうねぇ。あまり考えてなかったけど」

「おまえな……ッ！」

ふざけるなと足を踏み出して胸倉に摑みかかったスメラギだったが、しかしシリスはその怒気にまったく動じることなく見つめ返してきた。

一見おだやかに澄んだ蒼――しかし感情に揺れることのない深みのある双眸に、スメラギは息を呑んで動きを止めた。

「君がさ、いなくなるよりいいかなって、そう思ったんだよね」

（……は？）

「両方無傷に越したことはないよ。けど俺と君なら、無傷で残すべきは君でしょ」

「……」

突きつけられた仮定の話に返す言葉がなかった。

王族のシリスと孤児の自分では比較にならない――とは言えない。

いままではそうだった。だがふたりの間にルーシェという少女が現れ、その立場は変わった。彼女が望む相手は替えのきくものではないことはもうわかっている。そしてシリスが何事にも優先順位を定めていることも知っている。その彼の法のなかでは自分自身ですらも最優先にならない。

（けれどそんなもののために……！）

シリスはいつだって盤上の駒の操り手で、すでに傷だらけの自分の名などかばうまでもなかったのに。

（だがそれすら許されない状況だったということか）

外にアズィールからの婚礼を求める使者、内に竜騎士団失脚を目論む内通者。その両者が手を組んだうえに、竜公の片割れである自分の動きまで封じられている。シリスは綱渡りの攻防に身を投じるしかなかったのだ。

そう理解したスメラギはそれ以上口にできず、突き飛ばすように荒々しく手を離した。

「……おまえは竜騎士団の看板なんだぞ。その名を汚すんじゃない」
するとシリスは目をぱちくりとさせて、「ああ、そういう立場もあったんだっけ」といまさらのようにつぶやいた。
（――どこかおかしくないか）
いつもおかしいと思っているが、今日のシリスは輪をかけてなにかがおかしい。
（焦っているのか？）
余裕綽々に見えるが、やっていることがあぶなっかしい。いつもならそんなことも感じさせないくらいあざやかに陥れるものを。
しかしその原因を追及する前にシリスが口を開いた。
「で、君はなんの用でここに来たの。ヴィクトールが去った時点で君の務めは終わったわけだから皇子のふりはもういいわけだけど」
「ああ、カイトが報告を持ってきた。タリア嬢が誘拐されたらしい。リュースの大学にいたセルヴァンテス侯の息女だ」
するとシリスは驚きもせずに述べた。
「そうなの。たしかにいい後継者になりそうだしね」
（後継者？　――なんのだ？）
セルヴァンテス侯爵家でないのはあきらかだ。彼女は竜を授かっていないし、ほかに幾人も

兄や姉がいる。

「彼女の居場所なら見当がつくよ。そして彼女に危害は及ばないから心配しなくていい」

「危害は及ばないって、年頃の娘だぞ!? なにがあるかわからんだろう!?」

するとシリスは「あー、そういう方向なら問題ないよ。というかそんなわかりやすい人ならよかったんだけどねぇ」と苦笑するばかりで取り合わなかった。誘拐主もすでに見当がついているらしい。

「……それで、これからどうするつもりだ」

「そうだね。君、デュラクを手放す覚悟はある？」

「は!?」

シリスはいともあっさり告げたが、デュラクを手放すということは、竜の翼を失うこと——みずからの命綱を手放すことだ。

普通の民ならばあたり前に晒している命、しかし竜騎士にとっては神託以来経験したことのない恐怖だ。それを手放す覚悟があるかとシリスは訊いている。

「……それはあいつを守るためのものか」

緊張のために喉が締まり、声が硬くなる。

「もちろん。俺が彼女の不利益になることをしたことあった？」

（——たしかに、な）

シリスの行動は国のため、つまりは国をあずかる彼女のためだった。
言葉を嘘で塗り固めて、どこにも真実のない奴だがそれだけは揺らがない。彼に流れる聖女の血がそうさせているかのように一点の曇りもない。
しかしいまのシリスはどこか危うい。四侯の一家を切り捨てたことといい、なにかがおかしい——どこかに狂気が潜んでいるような気さえする。
（なんなんだ、この違和感は……）
「俺の気持ちは変わってないよ。あのときからずっと」
シリスを凝視すると、その瞳の奥に揺らぎはなかった。
気のせいだと思いたかった。——この男はまぎれもなくこの国の要、失われてはならない存在なのだから。
「ルーシェになら——いや、王女になら渡してもいい」
「ふぅん。わかった、じゃあそれで行こうか。お姫様もようやく来たみたいだしね」
「……なに？」
シリスに気を取られていたが、あきらかにこの部屋に駆け寄る気配がある。
ふり返ると同時に、スメラギの背後の扉が開け放たれた。
「——シリス！　今日こそちゃんと話してもらうわよ！」
意気込んで飛び入ってきたのは銀の冠をかぶったドレス姿の王女、しかし中身はどう見ても

自分のよく知るままの少女だった。

「え……隊、長……？」

今日はシリスは在室だというので勢いこんで部屋に飛び込んできたシエラだったが、思わぬ人物を目に留めてその場に立ち呆けた。

（……どうして隊長がここに……？）

「……もう呼んでくれた、の？」

スメラギの御前会議召喚はシリスも肯定してくれたことだ。さすがにシリス、やると決めたら仕事が早い――などとぼんやりする頭で考えていたら、シリスはのほほんと告げた。

「ちがうよ。ラギ君はずっといたんだよ、王宮に」

「え……えっ!?　いたってなに!?　召喚を反対してたのはシリスよね!?」

「ああ、それは理由があってね」

そうしてスメラギに与えた任務とその理由について説明し、

「そんなわけで別のお仕事をしてもらってたから呼ぶに呼べなかったんだよね」

にこりと微笑むシリスにシエラは唖然とし、それからがっくりうなだれた。

（じゃあヴィクトールが反対してきたのも、シリスがヴィクトールの肩を持ったのも、ヴィクトールが領地に帰ってしまったのも全部――）

「シリスの謀だったってわけ……!?」

「謀なんて人聞きの悪いこと言わないの。考えうる最良の結果を導くための方策だよ」

「策略のまちがいでしょう!?　それならちょっとくらい話してくれたっていいじゃない!!」

シリスに拒絶されたと思い悩んだ時間はいったいなんだったのだろう。

「まぁ召喚に反対したのはそれだけが理由じゃないし、本当のこと言ったところで君、演技できるほど器用じゃないでしょ」

「そっ、それはそうだけど！　私だって頑張れば演技くらい……」

「そう？　じゃあラギ君の意見でも聞いてみようか？」

言われてはっとスメラギに挨拶していないことを思い出し、シエラが向き直ると、スメラギは呆然とこちらを見ていた。

（あ、そうか。シエラとしてシリスと話しているところは初めて見るから……）

王宮で人前にいるときは王女だし、竜騎士団でいるときは従者だったので、シエラとしての裏の姿を見せるのは初めてだ。

挨拶をしようとしたものの、スメラギと再会するのは大学校舎のデート以来、気恥ずかしさも手伝ってかすかに声がふるえた。

「あ、あの、お帰りなさいませ……」
「ああ。元気にしていたか」
「え、はい……でも、隊長にお会いできなくて、すごくさびしかったです……」
王宮にいたならせめて会わせてくれればよかったのに――
昨日、部屋で泣きかけたことを思い出して、すん、と鼻をすすりかけたシエラだったが、
「あー、はいはい」と邪魔が入った。
「新婚さんの単身赴任ごっこはそれくらいにして、次の手を考えようか」
「新婚……っ!?」
反射的に反論しかけたシエラは思わず息が喉に引っかかり、けほけほと咳を漏らした。
「……次の手って？」
「とりあえず王都で扇動役に当たっている者はつぶさないとね。それとラギ君には御前会議に出席してもらうにあたって竜の翼を――デュラクを預けてもらう。ローレンシアへの忠誠を示すためにね」
「――！　デュラクって……」
シエラも竜の主だ。竜を預ける意味の重大さはよくわかっている。
ルーはもともと護衛になりそうもないので期待していないが、聖竜デュラクを奪われるとなればスメラギは丸腰にされるもおなじだ。

「隊長……本当にいいんですか？」
「ああ。――おまえになら託せる」
穏やかな目で見つめられて、どきりと鼓動が跳ねた。
その言葉の意味――どれだけ重い言葉か、竜の主としてよくわかる。命を預けられたもおなじだ。
シエラは鼓動が高鳴るのを感じながら、「……はい、わかりました」と頷いた。
「王都の民の恐怖心をあおり、暴動を扇動しようとした証拠はそのうち捕まると思うんだよね。その証拠をもって領地に籠ったヴィクトールを攻める。で、ヴィクトールが失墜させようとした竜騎士団で壊滅させてあげようかと思ってるんだけど、どこの隊にやらせるのがいいかな？」
「壊滅って、わざわざ攻め滅ぼさなくても！　私兵っていったって北侯領の住人でしょ!?　それもみんなローレンシアの民なんだから！」
「竜騎士に対抗しようとしてるくらいだから、兵なんかはすっかり竜騎士への恐怖心を植えつけられて、反竜騎士派になってると思うけど？」
「意見がちがうからって武力で押さえつけちゃダメでしょう!?」
「でもきっと彼らはラギ君に攻め込まれると思って、死にものぐるいでかかってくるよ？　戦う気満々の相手にどうやって対抗するわけ？」

「それは……」

話せばわかると言うのは簡単だ。たしかに話せばわかるかもしれない。だが、問題はその話し合いの場をどうやって作り出すか、だ。

「こちらが力を見せつけないと耳を貸してもらえないよ？　俺としては一度戦って黙ってもらってからじゃないと話し合う余地はないと思ってるんだけど、君はどう思う？」

さくりと突きつけられた現実に、シエラは唇をかみしめた。

第5章　王女の証

まったく気乗りはしなかったが、カーラ――タリアは用意された深紅のドレスに着替え、髪や化粧を整えてもらい、先導する案内役のデュークに付いていった。

高いヒールで歩くのはひさしぶりだ。だがよろめくような無様な真似はしない。生家で教わったとおりにすっと背筋を伸ばし、厚手の絨毯を一見軽やかに歩をすすめる。

長い廊下のほぼ中央に位置する扉には衛士がふたり、しかも本格的な武装をしていた。

（いったい何様よ）

王宮のシリスの部屋ですらこれほど厳重な警備ではなかった。

押し広げられた扉の向こうは執務室だったが、その革張りの椅子に部屋の主の姿はない。無人の部屋では、一面のガラス窓を覆う白い薄手のカーテンが風をはらんでおおきく舞っていた。

どうぞ、とデュークに促されるままに足を踏み出すと、舞い踊るカーテンの向こう、まばゆい光に満ちた露台に部屋の主はいた。

「おひさしぶりね、ヴィクトール。それともカディナ伯とお呼びしたほうがよろしくて？」

「好きにされよ。些細なことだ」

そう言って、露台に設けた席にいたヴィクトールはもてあそんでいたグラスを口元で傾けた。

冷たく、そして岩のように固い空気をまとう人だが、意外と周囲がおなじ空気に染まらずとも気にしないおおらかさもあわせ持っている。しかしそれを理解されるより先に距離を置かれてしまう損な人、というのがタリアの印象だった。

そしてその空気は数年ぶりに再会したいまもなにも変わっていなかった。

「このようなご招待を受ける謂れはなかったと記憶しているのですけれど」

「急を要したゆえな、失礼した」

(急ってなによ)

お席にどうぞ、と背後でささやきを落とされ、タリアは石畳の露台へと一歩踏み出す——とそのとき、一陣の風が吹き抜け、タリアはとっさに袖で目を覆った。

(寒っ……!)

北侯と呼ばれるだけあってルクセンドア侯爵領はローレンシアの北側、〈神の山〉からなだらかにつづく高地にある。ストールを羽織っていても幾分早い冬の足音を感じる。

風が収まり視界が開けると、タリアは息を呑んだ。

(なによ、これ……)

なだらかな高地に設けられた石造りの長城、高地を舐めるように這う長城の屋根には等間隔に弓兵が控えていた。眼下に控える槍兵と合わせてゆうに千は超えている。まるで戦争真っただ中の様相だ。

幸いなことに、目を凝らしても城下に敵兵が迫っている様子はなかった。
（――というか敵ってだれ。軍事訓練かしら）
ローレンシアの国土は、北方は神の山をはじめとする山脈に守られ、残りの三方をゆるやかに蛇行するレーヌ河で囲まれている。外国と接していない北侯ルクセンドア侯爵領が他国の侵入を受けることはほとんどなく、領民は短い夏を畑仕事にあてるほかは放牧や酪農、毛織物業などで生計を立て、封鎖的ながらおだやかな日常を送っている。
だがいま、その北侯領の民が武装している。しかもその大半が弓兵や弩兵だ。籠城戦であることを考えてもその配置はあまりに異様で、その対象は容易に推察できた。
（まさか、竜騎士団と戦う気なの……？）
「まずは掛けられよ」
タリアはその光景によろめきそうになりながら席に着き、ヴィクトールはタリアのグラスに葡萄酒を注いだ。
「お会いするのは三年ぶりくらいか」
「ええ、大学に上がってからほとんど王都を離れていたものだから。――リュースではお世話になったわね」
あなたが独立運動の首謀者なのでしょう？　そう遠まわしに突きつけてみると、ヴィクトールは軍備配置を眺めながら、感慨なげにつぶやいた。

「ああ、リュースの大学にいたのか」
その横顔にはサイラスを陥れて悦に入った様子も、スメラギを陥れることに失敗した怒りもない。まるで昨日は雨だったのかと告げるかのような感情の欠落した声音で、タリアのこめかみにぴきっと青筋が走った。
「あなた、なにをしようとしたかわかってるの」
「無論。天空神の加護に頼らない自由都市の先駆けになってもらいたかったのだが、竜騎士もなかなかどうしてしぶといものだな」
そう告げるヴィクトールの目には、大学で紛争を引き起こした〈実践派〉のような狂信じみた光はなかった。陸軍士官学校出身の、静かな意志を秘めた揺るぎない目だ。
(けどどこか痩せた……?)
鍛えられた精悍な身体だが頬にやや疲れが見える。そして深い海のような瞳の奥、その色が深く感じられたのが気がかりだった。
「今度は王宮になにを仕掛けたの」
「アズィールの使者を煽りたて、使者の要望で黒竜公を王都に呼び寄せるように仕向けた」
(――! そんなことをしたらますます黒竜公閣下の立場が悪くなるじゃない!)
しかし、もちろんそれがヴィクトールの狙いだ。
「あなたは黒竜公を失脚させたいの?」

「ローレンシアは素性もわからぬ男に聖竜を握られ、十年も前から危機的な状況にあったのだ。だれしもが目を背けているその現状を正しく伝えたにすぎん」
「王都の民、そして北侯領の民の黒竜公への恐怖心を煽って、閣下を失脚に追い込むつもり？　けれども閣下の上にいる竜騎士団長はあのシリス様よ。そう簡単にいくものかしら」
「青竜公は黒竜公の失脚に手を貸してくださるそうだ」
「え!?」
「扱いにくい駒を排除するにはいい機会だからな。青竜公もこの機を利用することにしたのだろう」
（えっ、だって黒竜公閣下はあの子の恋人なのよ!?）
シリスは当然ふたりの仲を知った上で、黒竜公の異動と同時にルーシェをリュースの大学に入学させたはずだ。もはやシリス公認の仲といっていい。
（あ、でもそのことをヴィクトールは知らない……？）
王女が名を変えてリュースの大学に通っているなど、きっと四侯である父セルヴァンテス侯ですら知らない極秘事項だ。
そしてルーシェという存在を抜きにしてシリスとスメラギの立場を考えれば、青竜公と黒竜公は肩を並べる存在であり、競い合う煙たい存在とも考えられる。
（でもあのシリス様が邪魔者を排するいい機会って……？）

タリアの見立てではそれはありえない。使えるものは敵だろうが味方だろうが関係なく巻きこむしたたかな人間だ。扱いにくければ扱いにくいほど逆に面白がって手元に置く、そのくらいの神経を疑ってかかるべき相手だ。

（そのシリス様が黒竜公失脚に手を貸すってことは……）

ふ、と得心する理由が脳裏に浮かんだ。

「あなた、黒竜公失脚のあとのことも考えていたでしょう。黒竜公の次は、竜騎士そのものへの恐怖心を煽る――あなたが狙っているのは竜騎士団そのものの解体、大学で独立を企てた彼らとおなじ、竜で成り立つこの国の変革ね？」

リュースで〈実践派〉が成そうとしていた新世界、それが彼の真の望みであるならば。

そしてヴィクトールの企みはリュースの延長線上にあるとシリスが気づいたなら、シリスが手を貸すはずがないのだ。

（だってあの人は聖女の末裔――竜とこの国がなによりも大切な人だもの）

「あなたはシリス様にはめられたのよ」

現実を突きつけたタリアは、ヴィクトールが怒りで暴挙に出るかとすこし身構えた。

だがこのとき初めてこちらを見たヴィクトールは、ふっと頬をほころばせた。

「そうやもしれんな」
「……え？」
それはいままで見たこともないようなおだやかな笑みだった。
（なに……どうして笑っているの。笑っていられるの）
自分はどこかで思いちがいをしたのだろうか。しかしシリスの人となりを読み違えたとは思えない。スメラギもそうだが、シリスも王女を支える同志だ。
けれどもそれでなおそれがヴィクトールの望みに沿うことだというなら。
（ヴィクトールの狙いはシリス様の思惑のさらに上にあったってこと……？）
しかしまさかシリスが読み負けるなどということがありえるのだろうか。
「あなたを討伐に来るのは黒竜隊じゃない、正規の竜騎士団かもしれないのよ？」
「ああ。竜騎士の恐ろしさは戦ってみなければわからない。リュースの一件はそのことを広く知らしめることができなかったこと――街人を巻き込めなかったことが敗因だ」
そう告げると、ヴィクトールはなつかしいものを見るかのように遠い空を眺めた。
「人は己の日常が脅かされてはじめて恐怖を知る」
（それってまさか――ここに攻め込ませることが目的ってこと!?）
異国民が聖竜を持っていることがどれほど危険か、いくら言葉で説いても感覚は薄い。リュースは学問を志す者ばかりだから理論上の話が通用したが、普段牛や羊を追っているだけの民

には理解できない。

実際に竜騎士が攻めてきて、戦って敗北し、いかに大きな軍事力が自分たちの頭上にあったのか、その軍事力は誰の手の中にあったのかを身をもって知らなければ伝わらない。

(だからってここを攻めさせるつもり!?)

シリスが裏切っていたことも想定のうち——ヴィクトールの目的は討伐させることだったのだから。

そしてこの北侯領で起きた出来事は国中に広まって、竜騎士への恐怖心を煽ることだろう。

「竜の力によらない国作り、ここでの戦いがこの国を未来へと歩ませる第一歩となる」

淡々と語るヴィクトールに、タリアは戦慄した。

(どうしてそんなバカな真似を……!)

タリアはきっ、と顔を上げて上空に視線を走らせた。まだ広い青空に飛来する影は見られない。だが北侯領攻めにあたるのは竜騎士団にほぼ間違いない。

しかしいくら弓兵を取りそろえたところで、竜騎士の空からの急襲を受ければひとたまりもない。

その隊を率いるのがシリスであれスメラギであれ、確実に竜の恐怖は伝わる。

(攻めてきちゃダメなのよ!)

おなじような言葉を最近聞いた気がする。

そう叫んだのはルーシェだ――王都に援軍を呼んじゃだめなの、と。
リュースに反乱を起こして王都に援軍を呼ばせる、北侯領に反乱を起こしてわざと攻めさせる――わかりやすい逃げ道を作っておいてそこに罠をしかけるのはリュースのときとおなじやり口だ。
（どうすれば止められるの!?）
もうヴィクトールは王都から退き、兵をかまえてしまった。きっと王都も動き出している。もう間に合わないかもしれない。
（どうすれば……！）
――お話し合い――かしらね？
それはリュースで実践派が大講堂に結集し、総長の身柄を押さえられ、もう決起を抑えるのは無理という状況で彼女が告げた言葉だ。
彼女はあの切羽詰まった状況から起死回生の策を生み、勝利を摑みとった。
自分は彼女のように天空神に嘉された存在ではない。けれど自分だってあきらめたくない。
タリアはひとつ息を吐いて心を鎮め、口を開いた。
「まさかいずれ四侯の重責を担うあなたがそんな大それたことを考えているなんて思わなかったわ。民の意識など変えなくても、聖女を支えた聖騎士の末裔として堂々と四侯の座を継いで政に携わればいいじゃない。それでは不満なの？」

するとヴィクトールは「四侯、な」と嘲り混じりの笑みを浮かべた。
「四侯とは四人の竜公の末裔、竜を受け継ぐ伝統あってこそのものだ。しかし貴族階級にも竜を授からない者が増えてきた――私もそうだ。神話で支えていたいままでのあり方では、いずれこの国は崩壊する」
「いずれって、たしかに四侯の家でも竜を授からない事例が出てきたわ。現にわたしだって授からなかったわけだし。でもだからってそんないつ起こるかわからない未来を引き寄せる必要があるというの？」
「――王女も、そうだと思われていた」
「え？」
「長らくシエラ王女が表舞台に出てこられないのは、竜の加護がないからだ、と」
タリアもその噂なら聞いたことがある。神託で竜を授かったと公式発表されていたが、肝心の王女が社交界に出てくる年になっても姿を現さない。それは病のせいではなくほかの理由があるためではないかというものだ。
（実際、あの子のルーちゃん、ちょっと変わってるしね）
竜を授かっていないタリアは竜についてくわしく知らないものの、両親や兄姉が授かった竜は最初こそルーとおなじくらいの大きさだったが年を経るごとに成長し、ルーのように大きくなったり小さくなったりすることはなかった。

「だから王統は傍系に移ると妻が言っていた。いずれ自分が女王になるはずだった、と」
「え、奥さまが……？」
ヴィクトールの奥方とは何度か社交界で顔を合わせた程度、あまり話をした覚えはない。
（けれどそんな妄想癖のある人には思えなかったけど……）
タリアが記憶を探っていると、衝撃的な内容が告げられた。
「妻は王女になるはずだったらしい」
タリアははっとしてヴィクトールを見た。
（わたしとおなじ立場……!?）
しかもヴィクトールの妻は竜を賜っていた。つまり王女シエラになにかがあれば本当に王女になりえたはずの娘だ。
いずれ自分が女王になるはずだった――それはけっして妄想ではない。
（でもその彼女をヴィクトールに嫁がせたの？）
ヴィクトールが結婚したのは自分が大学受験のための勉強をしていたころ、四年前のことだ。その頃まだ王女は表舞台に出てきていないし、仮に結婚していても夫が四侯の跡継ぎなら政治的問題もないといえる。けれど。
（――竜を授かっていない大公は、いない）
それが自由恋愛の認められている王女の、ただひとつの枷だ。

その枷が強制なのかただの結果なのかはわからない。ただいままでの歴史でひとりとも天空神の加護――竜を授かっていない大公はいない。それが事実だ。

そして竜を授かっていないヴィクトールとの婚礼許可が下りてしまったということは。

（王女候補から外されたのね……）

それは年齢のためか素養のためかシエラの見通しが立ったためかはわからない。

自分のように竜を授からなかったという明確な理由があったなら納得もいくし、しかたがなかったのだとも思える。

けれども理由もなにも知らされずに外されたなら――そう思うと胸がきり、と痛みを訴えた。

「私は竜を授かっていない。そのことが妻はいたく不服だったようでな」

「それは……！」

自分に開かれていたはずの未来。それが思いがけない形で断たれたためだ。

結婚を理由に候補から外されたわけではなく、候補が外された結果として竜を授かっていないヴィクトールとの結婚が認められたのだとしても、奥方も素直にその事実を受け入れられなかっただろう。そして候補から外れるやいなや手のひらを返した周囲の態度――自分の周りで起きたことが彼女の周りでも起きていたのかもしれないのだ。

ままならない現実への怒りが、夫となったヴィクトールに向かったとしてもおかしくない。

「それでも新しい暮らしの中で妻の気持ちも落ちつきつつあったんだ。三年前、その者が現れ

るまでは。――ある晩餐会のことだ。着用が許されたばかりの白隊服姿がまぶしかった」

その一言に、タリアははっと目を見開いた。

白隊服は王族の証だ。晩餐会では女性はドレス姿、隊服姿は男性にかぎられる。

（そしていまそれを着ることができるのは……）

三年前に神学校を卒業して竜騎士叙任を受け、そのまま竜騎士団長に就任した者――シリスだけだ。

「落ちついてきた彼女の心の病が再発した。自分は女王になるはずだった、王族を大公に迎えるはずだった、あなたがその未来を奪い取ったのだと、いまさら罵られてもな」

ヴィクトールは遠い空を見つめたまま鼻で笑ったが、そこにはなんの感情もなかった。

女王となる未来を失って、それでもようやく現実に向き合いかけていたころに現れたシリス。そこで彼女は失ってしまった未来を再認識してしまったのだろう。事実、傍系の彼女が女王となったなら、大公位には直系王族のシリスが立つのが政治的にもっとも収まる形だ。

「ちょうど懐妊がわかったころで、精神が乱れるのは懐妊初期によく見られる症状との医師の見立てだった」

――だった。

その言葉にタリアの鼓動が速まりはじめる。

「あの、奥さま、は……」

「死んだ。発作かなにかで胎の子とともにな」

なんの感慨も見せずに告げられた一言に、くら、とタリアの脳の奥でなにかが揺れた。

「妻の竜はこの空のように青かった。聖竜は同色の竜を従えるらしいな。それは竜の主の心も従えることができるのか？　……まぁいまさらどうでもいいことだが、彼女が求めていた女王の玉座と天空神の加護とやらはどれほどのものなのかと思ってな。私は竜の力の及ばない新たな世界を見たくなった。それだけだ。

貴女もその幻想に振りまわされたひとりだろう。貴女も新たな世界に興味があるのではないかと思ってな」

（だからわたしを呼んだというの!?）

「そんなもの……！」

タリアは卓子にばん！　と両手をついて立ち上がったが、見たくない、とは怒りに喉が張りついて言葉にできなかった。

――本当にそれは怒りだけだっただろうか。

（本当はわたしも……）

「――ヴィクトールさま」

いつの間にか傍らに立っていたデュークにタリアはびくっとしたが、デュークは気にした様子もなく腰を折ってヴィクトールの耳元にささやきを落とした。

ヴィクトールがちらと視線を走らせた先を見やると、青空の彼方にいくつもの点が見えた。
（竜騎士団……！）
「黒竜隊です」
「――よし」
ヴィクトールは立ち上がり、そこにいるなにかに立ち向かうかのように、青い空に対峙する。
（ダメ……！）
しかしタリアは立ちすくみ、水平に伸ばしたヴィクトールの腕が、天に挑むようにゆっくりと弧を描いて垂直に伸ばされてゆくのを止めることができなかった。
その合図を見た見張り台にいた兵が、声を上げる。
「弓兵、構え！」
その号令が次々に伝わり、幾重にも号令が響き渡るなか弓が次々に構えられてゆく。
（どうして動けないの！）
――たしかにあったのだ。自分にも、自分を否定したこの世界こそがまちがっていると思ったことが。
しかし望む未来を拒絶されたのは自分だけではない。だれしも行きたい場所があって、みなが願いを叶えるわけではないのだから。
道を断たれた自分は、本物の王女を支える存在になりたい、そう思ったから大学で学ぶ道を

選んだ。

（それにあの娘だってがんばっていたもの……！）

大学で出会った彼女は、王女として生まれ落ちたその場所で安穏としているわけではなく、求められる立場にふさわしい存在になろうと努力していた。自分もこの道を選んでよかったと思えた。

（だから動きなさいよわたし……！）

目の前で大きななにかが動こうとしている、それがわかっているのになにもできないなんて。自分にはヴィクトールを止めるための武器も手段もない。もう遅いかもしれない。それでも。

（なにか――！）

必死に視線を走らせた先にはヴィクトールが佩いた剣があった。

（あれを奪えば……！）

足を一歩踏み出す――だが行動に移る前にタリアの腕は後ろ手に捻りあげられた。

「……っ！」

「貴女にはいましばらくご静観いただきましょう」

（デューク……!!）

胸を反らす形で腕を取られ、タリアの顔は否応なしに空に向けられる。

徐々に大きくなる竜の姿に、肉眼でもそれが黒竜隊であることを見て取れた。

鳥の群れのように等間隔で隊を成す黒竜隊、その中心にいたのはひときわ大きな竜だ。
（あれが聖竜……？）
大講堂で見た赤竜とは輪郭からちがう。丸みのない鋭利な影だ。
黒一色の竜だというのに、陽光をふんだんに浴びてきらきらと輝いている。
まぎれもなく〈闇〉の聖竜デュラクだ。
（閣下、来ないで……！）
タリアは自分を拒絶したときの黒の瞳を思い出す。
想う女性がいる――そう告げたときの優しい瞳。それは自分に向けられたものではなかったけれどどきりとして、そして同時に浮かんだばかりの想いとともにいさぎよく諦めざるを得なかった。
ただ騎士として傍にいて守ればそれでいい――そう言っていたのに、彼の唯一の望みが奪われようとしている――
「来ちゃだめ――――!!」
タリアは思いのかぎり大声で叫んだ。
届くはずがない距離とわかっている。捻りあげられた腕がひきつって悲鳴をあげそうになっ

たが叫ばずにはいられなかった。
タリアの想いに反して竜の影はだんだんと大きさを増してくる。
しかし。
（……え？）
――聖竜デュラクの背にいたのは黒髪の青年ではなかった。
顔は判別できないが、左右に結い上げた長い髪が強風に泳いでいる。ヴィクトールもその異変に気づいたのだろう。弓の射程圏内に近づいてもその手を下ろすことができなかった。
タリアは驚きに目を見開いたまま竜が近づいてくるのを呆然と眺め、その騎乗者の顔が確認できるほどに距離が縮まったのはほんの一瞬、タリアのすぐ頭上を黒竜が翔け抜けた。
一拍遅れて突風が吹き荒れ、タリアはデュークから放されたこの腕で顔をかばった。
風に煽られた土埃が押し寄せ、それらから身を守っているうちに頭上を一回転してきたらしく、次に目を開けたときにはすぐ眼前に黒竜がいた。
〈闇〉の聖竜の背にいたのはスメラギではなく、タリアの知る少女だった。
ここにいる兵のすべての者が彼女の顔を知らない。しかし身にまとう白の竜騎士隊服がなによりの証だ。
（王女……シェラ殿下……）
矢を番えて構えていたはずの弓兵たちも、ここに現れるはずのない存在に呆然としていた。



「――カディナ伯、控えなさい」

けっして大きくないはずの声を、長城を渡る風が運ぶ。

それを聞きつけた兵のひとりが膝をついて弓を置くとそれが伝播してゆき、やがて兵のみながその場にひざまずいた。

あたりは静まりかえり、ただ聞こえるのは風の流れる音と竜のはばたきだけだ。

シエラはデュラクの背の上で無抵抗の兵の気配を感じて、策がはまったことを悟った。

――兵なんかはすっかり竜騎士への恐怖心を植えつけられて、反竜騎士派になってると思うけど？

――俺としては一度戦って黙ってもらってからじゃないと話し合う余地はないと思ってるんだけど、君はどう思う？

王宮でシリスにそう告げられたとき、シエラは「それでも！　絶対に国民に刃を向けちゃダメ!!」と断固反対すると、シリスはいともあっさり自論を下げた。

「君が反対するならそれでいいよ。でもそれならどうやってこの事態を収めようか」
ひとつ策に反対したからといってぽんと託されても困る。自分はあまりに判断材料を持っていない、そう思い知らされるのはこういうときだ。
（けれど）
『限られた情報の中から判断して、決断しなければいけないの』
情報を得るのは大事なこと、しかし万全とはいえない置かれた状況で決断するのも自分の仕事だ。
「……あの、北侯領の人って黒竜隊が攻めてくるのを恐れているのよね？」
「正確には、ラギ君が使役するデュラクが率いる黒竜隊が、かな」
「じゃあ、こういうのはどうかしら？」と出した策がこれだ。
「私が黒竜隊を率いて北侯領へ翔ぶわ」
――だってヴィクトールは隊長を陥れたくて北侯領の兵に、黒竜隊長は鬼だぞとかアズィールの手先だぞとかいろいろ吹き込んでいるんでしょ？　だったら彼らに王女に敵対する意思はないはずよ。黒竜隊は聖竜デュラクではなく王女に従ってるってことを見せつけてやるの。
――あ、隊長がデュラクを預けるっていうなら、私がデュラクに乗ってもいいのよね？　私がデュラクに乗って黒竜隊を率いていったら、デュラクも黒竜隊も王女に従っているってわかって一石二鳥になるんじゃないかしら。

――それにそのデュラクを預ける儀式だけど、貴族たちを大勢集めて、みんなの前で大々的にやればいいと思うの。そうしたら隊長はローレンシアを裏切ったりしないって、みんなに伝わると思うから。

貴族の大半が竜の主だ。竜の翼を他人にゆだねることの重大性はよくわかっているし、その忠誠心はかならず伝わる。

そこでシエラは貴族たちを王宮に呼び出し、スメラギに竜公の聖杖を授けたときとおなじように大勢の貴族の前で聖杖を返還させた。

『本当はデュラクの指揮権委譲に使ってる指揮杖と聖杖は別物だけど、聖杖のほうでいいよ。貴族たちにわかりはしないんだし』――というのはシリスの入れ知恵だ。

『たぶんもうデュラクも君に慣れていることだし、ラギ君がお願いしたらちゃんと乗せてくれると思うよ』

黒竜公スメラギがみずからの聖竜デュラクを王女シエラに預ける――それを王宮の貴族と王都の民に知らしめて、シエラは預かったデュラクの背に乗って北侯領へと翔んできたという次第だ。

そしてその策はきっちりとはまった。居城の屋根を埋め尽くすようにいた弓兵たち、しかしみなが膝をつき、いま矢が一本たりとも飛んでこないのがその証だ。

シエラはデュラクの背から軽やかに降り立つと、デュラクの首筋に片手を添えたままヴィク

トールと対峙し、口を開いた。
「カディナ伯、このとおり〈闇〉の聖竜デュラクは私が預かったわ。デュラクも黒竜隊も私に従っている。これで黒竜公への脅威はなくなったはずよ。
だから――」

「――だからこれで黒竜公の御前会議召喚に応じてくれるわね？」
王族の証である白隊服に身を包み、蒼穹の瞳で見据えて少女は言った。
御前会議のときは整えている髪をいまは左右に結い上げて流し、化粧も控えているのだろう、ヴィクトールが議場で見たときよりも幼い印象を受けたが、迷いのないその眼は、国民の希望を拒絶してはならないと告げたあのときとおなじ強い光を湛えていた。
太陽を天頂にいただき陽光を浴びてきらめく銀の髪、大空を背になんら臆することのない威風堂々たる立ち姿。
天空神の加護を享け、大いなる光を放つ娘――王女シエラ・アーシェラータ・ローレンシア。
（――これが選ばれし存在か）
対照的に脳裏に浮かんだのは、光の届かない暗い室内で、枕に両拳を叩きつけて叫びつづけていた妻の姿だ。

どうして、どうしてと、病的にくり返す彼女の事情は、彼女が生家にいたころから仕えていたデュークハルトから聞いた。

あきらめきれない〈女王〉の夢は、男に生まれた自分にはとうてい理解できるものではない。けれども神託で選ばれなかったこと、弟が竜を授かったと知らされた日のことはいまも鮮明に思い出すことができる。

どうして授からなかった——どうして選ばれなかった。

癒えることのないままずっと蓋をしつづけてきた傷をえぐられて、そのような夢は元からありもしないただの幻だったのだと伝えることもできなくて、ただ心の傷からあふれる血がおさまるまで無言で彼女を強く抱きしめることしかできなかった。

——傷ついた者同士、時間をかけてまた傷に蓋をして、距離を縮めていったはずだった。

子も授かり、新たな生活がはじまりかけていたその矢先のことだった。

せっかく塞がりかけていた傷を——忘れようとしていた光を一瞬でよみがえらせてしまったのが、青竜公シリスの存在だ。

あの運命の舞踏会から三年の月日が流れ、ずいぶんと背丈も伸びて少年の幼さが消えた青竜公は、あの日とおなじ白隊服を身にまとっていた。

——君を、待っていた。

妻に向けられたなら感涙にくずれ落ちただろう声音と視線。

その銀糸の髪と、蒼穹の瞳と、神に選ばれなかった苦悩などまったく知らない自信に満ちたその表情。

このような至近距離では見たことがなかった彼女のために、そして常人とはちがう所以はどこにあるのかを知りたくて、自分は彼を一心に見つめた。

――しかしいま、光の中に立つ王女を見て、なにかがわかったような気がした。

すくなくとも目の前にいる彼女には、闇の中で果てていた妻とはちがう光があった。

彼女は黒竜公の御前会議召喚に応じてくれるわね？　と言った。事ここに及んでも、彼女はまだ話し合う余地を信じている。

彼女は傷ついたことがないのではない。何度傷ついてもなお前を向き、天をまっすぐに仰ぎつづける――だからこそ許された空色の瞳。

きっとこの娘はどれだけ泣くことがあっても、明日にはまた空をまっすぐに見つめるだろう。

どうして、と妻に訊かれたら、いまなら答えることができる。――その心の強さが、聖女の末裔を名乗るに及ばなかったのだと。

だから君は選ばれず、普通の女性として生きることを望まれたのだと、いまなら伝えることができたのに。

（……だが、そう遠いことでもないか）

青竜公に会い、王女にも会った。――土産話が、たくさんできた。

デュークハルトには自分が望む世界について語り、理解を得ていたが、この王女を前にして彼もまた彼女が選ばれなかった理由を悟ったことだろう。

ヴィクトールはまばゆい光を放つ王女とデュラクにまぶしそうに目を細めると、いつ以来ぶりかの穏やかな心地で、ゆっくりと片膝をついて頭を垂れた。

「――いかようにもご処断を、王女殿下」

「カディナ伯が下った……？」

夜、宮殿の一室で己の手の者からの報告を受けたナシルは、思わず言葉を失くした。

「は。王女率いる黒竜隊に為すすべなく、刃を交えることなく降伏したよしにございます」

黒竜軍の一言に、ナシルははっとして奥の間のソファーでくつろぐ主に視線を向けた。

いまも現役の黒竜隊長であるスメラギはその報告を聞いていただろうに、腕枕をしたまま涼しい顔だ。

「なにも驚くことはないだろう。北侯領ではさぞかし悪名が響き渡っているだろう俺が黒竜隊を率いて攻めてきた――かと思えば、率いているのは王女だったんだからな。

特に北侯領は異国との接点がなく閉鎖的、保守的な土地柄だ。攻めてきたのが自国の王女と

なれば戦うに戦えなかったんだろう。北侯の私兵もさぞかし驚いたことだろうな」
「そのようなことを言っている場合ではございません。殿下の聖竜と部下が利用されたのですよ？」
「そんなこと、デュラクを取り上げられたときから覚悟していたことだ」
「悠長なことを……殿下の御身にこれからなにが起きるやもしれないものを」
――先日、スメラギがラーカイトとかいう副官とともに部屋を出ていったのは、竜騎士団長シリスに呼ばれたためだという。
そしてシリスは、こともあろうにスメラギに竜を質に差しだすようにと告げてきた。
カディナ伯の抗議に対し、王宮の貴族も王都の民も黒竜公に対する不安を抱いている、その状況を鎮めるためだという。
ヴィクトールとシリスが手を組んでいることを知っているナシルは、これはスメラギの立場を追い落とす前段階として、スメラギの武器であるデュラクを奪おうとしているのだと気がついた。
ナシルはスメラギの身を案じてその要望を突っぱねることを打診したが、それは全会一致で決定したこと、断れば本当に亡命するしかないという。
デュークがスメラギをアズィールに返す手助けをすると言っていたのはこのことか、とナシルは気づき、スメラギにアズィールへの帰国を申し出た。――アズィールは貴方様を受け入れ

る準備があります、と。

スメラギは考えさせてくれと返答を保留していたが、結局、王宮に詰めかけた貴族たちの前でデュラクを王女に委ねる道を選んでしまった。それが今朝のことだ。

（その聖竜を、さっそく王女に利用された……）

ヴィクトールも王女がデュラクを従えて攻めてくるとは思わなかったのだろう。もし相手がスメラギなら徹底交戦し、可能ならばスメラギを捕らえてナシルに引き渡す算段だったが、攻めてきた相手が王女と知って結局刃を交えることもできずに降伏してしまった。

デュラクを奪い、ヴィクトールを鎮めたシリスが次になにをしてくるかは火を見るよりあきらかだ。直接関与していないとはいえ、王都を騒がせる原因となったスメラギを引責辞任に追い込むつもりだ。

（あの者の目的は最初からそこにあったのだから……！）

デュラクを手放せと言われた時点で止められなかったことが、かえすがえすも悔やまれる。

ナシルは眉をひそめて歩み寄ると、スメラギの足元に片膝をついて言上した。

「殿下、これ以上ローレンシアの思うがままにさせては殿下のお命に関わるやもしれません。なにとぞ今後の話し合いは私にお任せくださいませ。必ずや殿下の御身に危害が及ばぬよう取り計らいますゆえ」

するとスメラギは、黒曜の双眸でじっと自分を見据えて告げた。

「そんなもの、いまさらだ」
「……え？」
「命に関わるなど、神託を受けたときから――いやローレンシアに潜入したときからいままでずっとそうだった。誰も俺の命を奪えないような安全な場所にいたことなど一度もない。ずっと俺の命綱は自分以外の誰かに握られつづけていたんだ」
「――！」
たしかにアズィール皇宮とて安全な場所とは言えない。しかし異国民と知られながらこの国で重大な地位にあることは、命を狙われつづける日々だったのだろう。
「だが、結局俺はいまも生きている。悪運が強かったせいかもしれないし、アズィールの神とやらがついてくれるせいかもしれないがな」
「しかし今回も無事とはかぎりますまい」
言いつのると、スメラギは横たわっていたソファーから身を起こした。
「たしかにな。あいつがこれほどあからさまな手段に訴えてくることは初めてともいえる。俺も命運も尽きたのかもしれない――だが、今回はこのまま退いてくれないか。アズィールから申し入れた要望を含めてすべて持ち帰ってほしい」
それはローレンシアでの皇子としての処遇や王女シエラとの婚礼の件もすべてということだ。
「それはなにゆえにございますか」

「命の危機なんて日常茶飯事のことだったが、いつもあいつは自分の手を汚そうとはしなかった。いつも他人にやらせて表には出てこないのが奴のやり口だ。

だが今回の件はあからさますぎる。アズィールの圧力に危機感を抱いているのかもしれないが、ここで俺を追い落としたなら、のちに並び立つ黒竜公が邪魔で排斥したのではないかと後ろ指を指されかねない状況だ。

奴は俺ごときを追い落とすために自分の名声を傷つけるようなことはしない——だから今回、奴が俺を失脚させることはない」

シリスの人となりを熟知しきったスメラギの言葉に、ナシルは息を呑んだ。

「まぁこうやって何度も揺さぶりをかけて、徐々に俺の立場を削ぎ落としていくつもりだろうけどな」

「そのような国になにゆえとどまられます。この機にアズィールに亡命を考えられてもよろしいでしょうに」

「俺が皇子に認定されたからだ」

「え？」

「アズィールの皇子となってしまった以上、アズィールにもどれば皇位継承争いがはじまる。なんの後ろ盾もない俺など、ほかの皇子に一撃で抹殺されるぞ」

そう告げてスメラギが懐から取り出したのは、白木の鞘に収まった短刀だった。

この世界にただひとつ、ローレンシアでもアズィールでもない国の行く末のかかったものだ。

「――俺は絶対に死ぬわけにはいかない。そうだろう？」

いずれ帰る――そのためにスメラギはいま死ぬわけにはいかない、命の危険のあるアズィールには行けないとそう言っているのだ。

ナシルはその短刀を食い入るように見つめていたが、

「それは〈皇〉を継ぐ者としてのお言葉として受け取ってもよろしいでしょうか？」

その問いにスメラギは肯いてみせた。

「生き残り、しかるべき者にこれを継がせてゆく――それがこの刀を委ねられた者としての俺の務めだ」

はるか遠き国を継ぐ者としての言葉だ。――それを受け取っただけでもこの訪問の価値はあった。

ナシルは真の主に対して膝をつくと、深く頭を垂れた。

「――ご要望承りましてございます、我が君」

終章　新たな関係

晴天の下、一足早い秋薔薇が咲きはじめた王宮前の庭園で、着飾った紳士淑女がグラスを手に談笑していた。

その者たちの表情はみな明るい。というのも王宮のみならず城下まで騒がせた黒竜公スメラギの御前会議召喚問題、そしてその処遇をめぐって領地に引き返してしまった北侯代理カディナ伯の一件がまたたく間に解決したからだ。

つい先日、おなじように庭園に呼ばれたときの、これからなにが起きるのかと窺って恐々としていた表情とはまったくちがっていた。

「シエラ・アーシェラータ・ローレンシア殿下、ご入場――！」

侍官の声に従い、貴族たちは手にしていたグラスをちかくの女官のトレイに預け、紳士たちは腰を折り、淑女たちは腰を落として頭を下げる。

そんな中、葡萄の新酒のような色合いの軽やかに秋めくドレスに身を包み、王女シエラが現れた。

十六歳の誕生日の舞踏会以来、まだ修学中の身ということで夜の社交界に姿を現さない王女だが、こうして事があるごとに姿を見ることができるだけでも安心感がちがう。

今日の王女も病弱という噂を払拭するような血色の良い笑みを浮かべており、ドレスの裾をつまんでこの場に集まった貴族たちに一礼すると、その両手を雲ひとつない青空に向かって掲げた。

そして王女がなにやらつぶやくと、空の彼方から二頭の竜が舞い降りてきた。

黒竜と赤竜だ。

王女に向かって右手に降りてきた黒竜は〈闇〉の聖竜デュラク。鋭い体格と目つきで、鋼鉄のように陽光を跳ね返して光を放っている。

左手に降りてきた赤竜は王女の守護竜ルーティア。デュラクより二回りほど小柄だが体格はどこか丸みを帯びて、なにがあるのかな？　と好奇心いっぱいに周囲を見渡す目を見てもまだまだ育ちざかりといった感だ。

シエラは二頭の首筋を撫でてねぎらうと、正面を向いて口を開いた。

「黒竜公スメラギ、前へ」

ざわ、と揺れる空気を割って、貴族たちの後背にいた黒竜公スメラギが、王女シエラへとつづく石畳に歩み出る。

みなが息を呑んで見つめる中スメラギは歩を進め、王女から十歩ほど隔てた場所で片膝をついた。

「黒竜公スメラギ。汝が忠誠、しかと受け取りました。ここにあらためて聖杖を遣わすとも

に、黒竜公ならびに黒竜隊長としてひきつづきその職務を果たすことを命じます」

「――は」

スメラギは深く頭を下げてから立ち上がり、王女の手前まで歩み寄り、あらためて膝をついた。王女は典礼官の差しだした台座から聖杖を取ると、それを両手で天に捧げ、

「この者に天空神の変わらぬご加護を」

と祈りを捧げてスメラギに下賜した。

――数日前に見た光景は、王都の現状を鑑み、スメラギがその聖杖を王女シエラの手に委ねるものだった。

スメラギから聖竜を取り上げるのが好ましい、そうわかっていても己の竜の指揮権を他人に委ねるなど命を差しだすようなもの、心から望む者などいるはずがない。そして竜は主の言葉ではなく意思に従うもの、言葉面で預けたと見せかけて王女に襲いかからせることだって考えられる。前代未聞の試みを前にして貴族たちはただ息を呑んで見届けるしかできず、それだけに王女シエラが聖竜デュラクの背にまたがって大空を舞ったときは驚嘆と興奮の歓声が上がった。

だが、今日はちがう。

本来の主の元に竜がもどる――ローレンシアではあたり前の、本来あるべき姿に貴族たちは安堵し、拍手をもって受け入れた。

聖杖を受け取ったスメラギは王女シエラに向かって右前方、聖竜デュラクの前に列した。向かいの左前方には青竜公シリスが並んでおり、王女シエラが両竜公を従えた形だ。

「アズィール帝国、国使ナシル殿」

つづいて典礼官に呼ばれ、石畳に進み出たのはアズィールの長衣に身をつつんだやや褐色がかった肌の青年だった。

年はスメラギとおなじ程度、アズィールの国使がこれほど若い青年だったことを知り、あちこちから女性の感歎の息が漏れ聞こえる。

その空気を割って、王女の凛とした声が響いた。

「アズィール帝国のご用の趣について、黒竜公列席のこの場にてご返答いたします。黒竜公は我がローレンシアを守護する騎士、もちろん貴国の貴人であることは承知しておりますが、我が国ではアズィール帝国皇子としての扱いはいたしかねます。また当人の希望を尊重し、貴国にお返しする意思もございません」

そう告げて王女が伏せ気味の視線を黒竜公に向けると、黒竜公が言葉を継いだ。

「子としての恩返しができないのは心苦しいかぎりだが、貴国にもどる意志はない。皇帝陛下ならびに第一皇妃殿下にはどうかご健勝であれと伝えてもらいたい」

「――は。畏まりましてございます、殿下」

その敬称にぴくりと反応した者もいたが、アズィールから突きつけられた難問がおだやかな

形で収まったことに対する安堵のほうがおおきく、盛大な拍手につつまれて国使謁見は幕を下ろした。

ルーティアをふたたび大空に帰して王宮に下がり、シリスの部屋に入って他人の目がなくなったことを感じたシエラは「はぁ……」と声に出るほどにおおきなため息をついた。

「どうしたの、ラギ君相手にそんなに緊張した？」

後ろをついてきたシリスが「あ、知った相手だとちがう意味で緊張するか」とつけくわえ、シエラはかぁっと顔に血を上らせた。

「ちっ、ちがうわよ！　緊張したのは隊長じゃなくてナシルのほう！　また難題を押しつけてこられたらどうしようかと……！」

「ああそっち？　彼はラギ君が丸め込んでくれているから大丈夫だよって言っておかなかったっけ？」

「それはそうだけど！」

スメラギはいつの間にナシルと仲良くなったものか、今も話があるからとナシルの宮殿に行っている。ナシルは往路同様、グレンが国境まで送ってくれる手はずになっている。

「彼のことは隊長に任せるとして、ヴィクトールはやけにあっさり下ったわね。なにかまた裏工作でもやってたの？」
「またってひどいな」
そう苦笑を漏らすシリスに、シエラは「だっていつものことでしょ」と応酬した。
「なにもやってないよ。――多分、本物を見て納得したんじゃないかな」
「本物？　なんの？」
（あの状況で本物だったものって……聖竜かしら？　けれどしかしいくら竜を授かっていないとはいえそれくらいで驚いて折れるとは……）
シエラが首をかしげていると、シリスが種を明かした。
「本物の〈王女〉だよ」
「えっ、王女って……私!?」
「そう。彼の亡き奥方は元王女候補でね。候補からはずされて彼に嫁いだあともその想いが捨てきれなかったみたいでね。それで竜を授かっていないあなたじゃ大公になれないと言って、彼を責めたりね」
「それって言われたカディナ伯も困るというか、いい迷惑なんじゃ……」
「まぁ普通の精神状態だったらそれも判別がついたんだろうけどね。ほかにも、女王になって俺を大公に据えたかったらしい、とか」

（それってシリスに気があったってこと……？）

「恋人……だったの？」

上目づかいにおそるおそる問いかけると、シリスは「まさか」と否定した。

「俺が学舎を出たときにはすでに人妻だった人だよ。俺は人のものには手を出さない主義だし」

人のものじゃなければ手を出すのねとつっこみたい気持ちはあったが、それよりいまの話のほうが気になった。

（じゃあ奥さまの片想いだったってこと？　けれども会ったのが結婚したあとなら、シリスを大公にして女王になるなんて無理だと思うんだけど……）

――でも、もしかしたら。

「恋情は人を狂気に落とし込む」

「――！」

その一言が、まさにそこに思い至りかけていたシエラの心を刺した。

「べつに悪いことじゃない。替えのきかないたったひとりの相手だ。その人を得たい、その人に選ばれたい、人はそうした望みに強欲になるし、卑劣にもなる。逆にそんな自分に失望したりもする」

「……なんとなくわかるわ」

替えがきかないただひとりの人に選ばれて、その手を摑みつづけておきたい――自分の中にもたしかにある感情だ。

（でもヴィクトールが私を見て納得したってことは、私と奥さまはなにかがちがっていたってことよね）

自分ではそれがなんなのかはわからない。だが一度めと二度めの御前会議で周囲からの評価が変わったように、議場ではヴィクトールを納得させられなかったなにかが北侯の居城での自分にはあったということだろう。

「ねぇ、ヴィクトールはどうなるの？」

「アズィールの使者と通じた外患罪に、竜騎士団と戦おうとした内乱予備罪、それにこの前のリュースの件のもろもろとあわせて処刑台に送るだけの証拠はそろってるけど？」

「だめよ、そんなの！」

「どうして。彼だって士官学校を出ているんだから法律くらい知っているよ。事実、彼の思うままに事が運んでいたらこちらはラギ君を失いかねなかったわけだし」

「たしかにそうかもしれないけど、それでもダメ！」

「君さ、なんのためにその法が定められてると思ってるの？」

「そんな杓子定規に処分を主張するならあなたも犯罪教唆で一緒に訴えるわよ!?」

するとシリスはいとも簡単に言葉を返した。

「どうぞ？」
「え……えっ!?」
「訴えればいいよ」
あまりに気負いのないシリスの返答に、言い出したシエラのほうが驚いた。
「訴えればいいって……あなたもヴィクトールの処分に巻き込まれるかもしれないのよ!?」
「言われなくてもわかってるよ。子どもじゃないんだから。自分のしたことくらいわかってるし、逃げるつもりもないし。君の気がそれで済むならいくらでも訴えればいい」
「べ、べつに気が済むとか済まないとかそういうんじゃなくて……！」
シリスはなんら引く様子がなく、うろたえるばかりのシエラに静かに告げた。
「――彼はね、奥方に会いにいきたかったんだよ」
「奥方って……え……？」
（だって彼の奥さまはすでに亡くなって――）
その先まで思い至って、シエラは言葉を失くした。
そのときシエラの脳裏をよぎったのは御前会議でのヴィクトールの顔だ。
感情を秘めたままただ淡々と紡がれていた言葉。そして勝利を得ても揺れることのなかった表情――彼は最後に自身が裁かれることまで想定して計画を立てていたのかもしれない。
（あ、彼が目指した世界って……）

天空神の加護や竜が影響しない政治のあり方、その考え方は〈知識派〉にちかいものだ。
シリスからヴィクトールの目的を聞いたとき、四侯の跡取りとして本来〈貴族派〉であるべきヴィクトールが、どうして〈知識派〉寄りの思想を持ったのかと疑問に思っていたが、これですべてがつながった。
（奥さまのため……だったのね）
恵まれた血統や天空神の加護、それに絡んだ政治的思惑に振りまわされて亡くなった奥方に、そのようなものに振りまわされることのない新たな国の形を見せたかったのだろう。
そこには彼なりの奥方への恋情があったのかもしれない。
（だとしたらシリスが言うこともわかるけど。でも……）
「……それでも、ヴィクトールを処刑台に送るのはやめて。私はそんなことのために止めにいったんじゃないもの。奥さまとの再会はもうちょっと先にしてもらって」
「そう。それが君の王女としての判断だというなら従うよ。俺も彼に恨みがあるわけでもないし」
でも無罪放免というわけにはいかないだろうけど、とつづけるシリスに、「それ以外の量刑はまかせるわ」と告げると、シリスは「了解」とうなずいた。
（むずかしい、な……）
女王という妄執に取りつかれた奥方と、彼女の死後に彼女を解き放つ世界を目指した彼。

シリスの言うとおり、たしかにそこにあるのは狂気の世界なのかもしれない。

（……でもそんなことを言うってことは、シリスにも身に覚えがあるのかしら？）

しかし上目遣いに見上げると、シリスはそのようなものを微塵も感じさせないおだやかな目で見下ろしていた。

「君にはね、そんな闇の底を覗くことなく幸せになってほしいんだ。だから今回離れていた分、ラギ君に思う存分甘えておいで」

「うん……あとでそうする、けど……」

「どうしたの？」

「私ね、今回の一件であなたともあまり話をしていなかったことに気がついたの」

するとシリスは「どうしたの、いきなり」と苦笑をこぼした。

「いまからお茶でもするなら付き合うけど？」

「そういう他愛のないおしゃべりじゃなくて。あなたの本心はどこにあるのかしらって。……今回、あなたがヴィクトールについたとき、本当にびっくりしたの。ヴィクトールを欺くために私にびっくりさせることが必要だったってことはわかってるわ。けどそれでもシリスが傍にいないなんてはじめてだったから、本当に不安で……」

「なに、俺にいてほしいの？」

その声音はどこか挑発するような響きがあり、こっちは本気なのにとシエラがむっとしながら

ら返した。
「当然でしょ」
「今回みたいに敵にまわるかもしれなくても？　今回は振りだったけど、いずれ本当に君の敵になるかもしれないよ」
「それは……」
ひとりのときにも考えたことだ。シリスが敵にまわれば、自分の繰り出す手をすべて封じられるにちがいない。
（それはたしかに嫌だけど――でも）
シエラは顔を上げると、まっすぐにシリスの目を見つめた。
「私は、シリスは本当に国のことを思ってしてくれてることだってわかってるから」
――シリスが私の邪魔をするなら私がなにかまちがってるのかなって考えるし、仮にシリスと道が分かれてもこの国をどこに導きたいかって想いは一緒だと思うから――だから。
「いなくなったりしないで」
シリスは目を見開き、びっくりしたように見つめていた。だがやがてふっと笑みをこぼすと、シエラの頭に手を伸ばして撫でた。

「――いるよ」
その優しい手と深い声音にほっとして、心が湧き躍るのを感じた――が。
「自分に使い道があるうちは、そうする」
「そういう意味じゃ……！」
つけたされた一言にシエラは反射的に声を上げたが、シリスの仮面の笑みにさえぎられてそれ以上言い募ることはできなかった。

『そろそろラギ君がもどってくる時間だよ』
いつもの笑顔を張り付けてシリスは告げ、それが体裁を整えただけの退出指示だと気づいたシエラは、部屋を出ていくしかなかった。
（使い道があるうちはって……そういう意味じゃなかったのに、な……）
シリスにとって大事なのは国で、自分もそうで、だからずっと傍にいてほしいと思った。
けれども自分はどこかで伝え方をまちがえてしまったのだろうか。
ちゃんと言ったつもりだったのだが、伝わっていなかったなら意味がない。
（どう言ったらわかってくれるのかな）

――いや、シリスは自分よりよほど聡い。言葉の額面以上の意味を感じ取ったからこそ拒絶してきたのかもしれない。

（甘えすぎちゃったかな……）

打ちひしがれたシエラが力なくうなだれて廊下を歩いていると、中庭から呼び止める声があった。

「――ルーシェ？」

「あっ、えっ、隊長!?　いまおもどりですか!?」

「ああ。いまから部屋に向かおうかと思っていたんだが――」

スメラギはシエラをじっと見つめていたが、おおきな歩幅で歩み寄るとシエラの手を取った。

「――いい天気だ。散歩でもするか」

スメラギが連れていってくれた先は、薔薇の咲く中庭だった。

シエラの胸丈ほどに剪定された薔薇はいくつも蕾をつけ、早いものはすでに開いている。

スメラギに薔薇を愛でる趣味があるとは思わなかったが、しばらく無言のまま眺めているとスメラギから切り出してきた。

「今回は、内も外もいろいろ大変だったみたいだな」

「あ、はい……隊長もお疲れさまでした。使者の内側から揺さぶるなんて、すごく危険なことだったんじゃないですか？」

「奴の策はいつもそんなものだ。それに今回はたとえしくじっても俺には〈皇子〉という保険があったからな。そうそうまずい事態にはならなかったはずだ」

「わたしのほうも、最悪の事態だけは避けるように根まわししてくれていたみたいですけど……」

御前会議で自分を操り、ヴィクトールを唆し、見えないナシルのところにはスメラギを送りこむ――自分の従兄ながら、いったいどういう頭をしているのかと思う。

「だがおまえが北侯領に翔ばなければ、他のだれが向かっても戦いは避けられなかった」

「それはただ運よく策がはまっただけです。そもそもヴィクトールが兵を王都から引きあげる前に、御前会議の場でちゃんと私が彼を説得できていればこんなことにならなかったわけですし、シリスの言う方法のほうが正論なのかなとも思いましたし……」

するとスメラギは「あいつの頭の中は効率最優先だからな」と、しかたないとばかりに息をついた。

「あいつは、無傷で収められるかもしれない可能性よりも確実に勝つ方法を取る。たしかに負けないことはなにより大事で、正しいことなんだろう。あいつに任せていたら最終的には勝っていたかもしれない。けれどもひとりも死傷者を出さずに事態を収めることはできなかった。だから今回の件はおまえの手柄だ。素直に受け取っておけ。よくやった」

頭上に手を置かれて、ふわりと心の中で湧きあがるものがあったが、シエラは微笑をこぼす

ことしかできなかった。
「それで、おまえはなにに落ち込んでいるんだ」
「……やっぱりばれてました？」
「まちがってもそんな顔を人前にさらすなよ」
そんなひどい顔をしているのだろうかとすこしへこむ。
だがスメラギに厳しい目つきでつづきを促されて、事情を話さざるをえなかった。
「今回の件でシリスに避けられちゃったことがあって、それは敵を欺くために必要なことだったんですけど、ずっと傍にいてくれるのがあたり前で、これからもいてくれるものだと思ってて、いなくならないでって頼んだらちょっと距離を置かれちゃいました」
「……べつに頼むまでもなく奴は王宮にいると思うが。王宮で権謀術数をめぐらせることが奴の生き甲斐だろう」
スメラギがあまりにさっくりと指摘した事実に、気持ちは沈んだままにもかかわらず思わず笑みがこぼれた。
「そうなんですけど、多分わたし、シリスに寄りかかりすぎていたんだと思います。それで甘えるんじゃないよって距離を置かれちゃったのかなって。
でもいままで本当にずっと一緒にいてくれたんです。シリスはもうすっかり家族みたいなものだったから、距離を置かれるのはちょっとさびしいなって思って……」

「――――は？」

（え？）

どうしてそこで疑問をはさまれるのかとシエラが顔を上げると、スメラギが呆然と目を見開いていた。

（……おい、ちょっと待て）

恰好は王女のまま、だが中身はすっかりウサギにもどっているルーシェが顔を上げて、こちらを見つめている。なんだろう？　とその蒼の瞳に書いてあるが、訊きたいことがあるのはこっちのほうだ。

（『シリスはもうすっかり家族みたいなものだったから』……？）

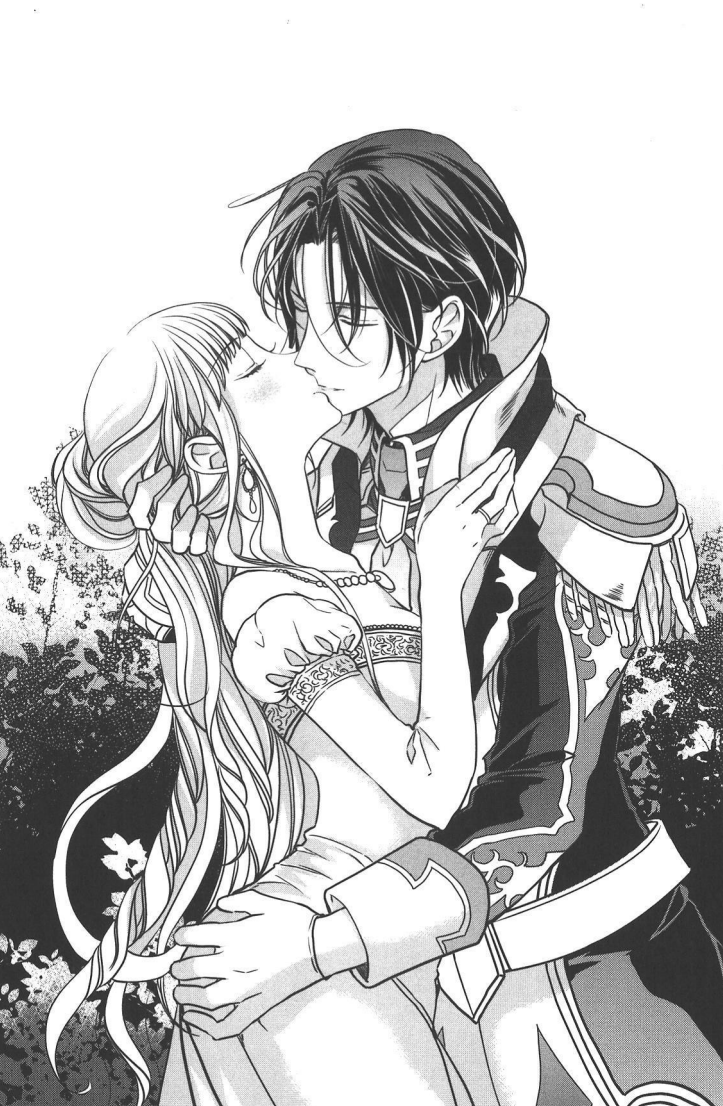
――わたしは隊長と『家族』になりたいんです……！

そう言って人に思いきり感情をぶつけてきたあの夜から、まだ半月と経っていない。

言われたこちらは何年先にも忘れそうもないほどの衝撃だったというのに、本人はすっかり

忘れてしまったというのだろうか。
（――いや、焦るな）
自分にとっては特別な意味を持つ言葉だがごく一般的には別になんということのない単語、つい口がすべっただけということもある。
スメラギはひとつ呼吸を整えて、そして意を決して訊ねた。
「おまえにとって、家族とは、なんだ」
「え……？　何気ないときに一緒にいてくれる人、かな？」
おい！　とスメラギは心の中で思いきりつっこんだ。
（まさかこいつ、自分がなにを言ったか覚えてないのか!?）
だが、よくよく思い返せば、王女シエラにとって『家族』と呼べる存在は、物心ついたころにすでに女王だった母、すでに宰相だった伯父とすでに学舎に入っていたシリス、その三人だけだった。
そして、驚くべきことにその中に夫婦関係にある者はだれひとりいない――つまり、ルーシェに父の記憶がない以上、彼女の視界にはいっさい『夫婦』がいなかったということだ。
（……まさか）
「母様も伯父様もシリスも、どれだけ忙しいときでもわたしがつらいときには傍にいて励ましてくれました。――家族ってそういうものですよね？」

そう言葉を接ぐルーシェに、スメラギはがくりと力が抜けるのを感じた。
（そういうことか……）
「隊長？　どうかなさったんですか？」
「いや……ルーシェ」
「はい？」
なにも警戒せずにきょとんとしているルーシェにすこし苛立ちが増し、スメラギは絹手袋で包まれたままのルーシェの手を取ると、もう一方の手を腰にまわして強引に抱き寄せて、唇をかさねた。
「――――！」
最初は驚きで身体が強張り、とまどっているのが伝わってきた。だがやがて腰にまわした腕に体重が乗ってきて、素直に身体をゆだねた。
会えなかった日々を埋めるようにくちづけを交わし、顔を離すとルーシェは気恥ずかしさのためか顔を桃色に染めてうつむいていた。
「――おまえは、『家族』とこういうことをするのか」
「えっ!?　しませんよ!?」
とルーシェは弾かれたように面を上げるが、すぐにうつむいてしまう。
顎に指を添えて上にあげさせようかとも思ったが、手を伸ばせばいまにも逃げ出してしまい



そうなウサギにスメラギはじっと見下ろしたまま訊ねた。
「じゃあ俺はなんだ」
「たっ、隊長は……『特別』……です……」
（――なんだそれは）
『家族』の次の新しい範疇かと思ったが、さらに耳まで赤く染めたルーシェは逃げ場所がないと観念したのか自分の胸の中に飛び込んできて、隠れるように顔をうずめる。
そんなルーシェを抱きかえしながら、伝わってくる鼓動とぬくもりにスメラギは苛立ちが安堵に変わってゆくのを感じた。
（……なんだ、わかってはいるのか）
彼女の『家族』の範疇はなにやらおかしい気もするが、自分がそれではないとわかっているなら。
「――それなら、いい」
そうつぶやくと、スメラギはいつもとちがう香りのする髪に顔をうずめた。
整髪油で調えているためかいつものようにさらさらしていないし、いろいろ手のこった結い方をしているので迂闊に髪を撫でることもできない。スメラギはべつにシエラでもルーシェでもどちらでもいいのだが、それだけは不便だなと思いながら耳元に声を落とした。
「――リュースに帰るか」

「はい……」
「まぁ、多少みなの視線が変わるかもしれないけどな」
「あっ……！」
言われてはじめて、ルーシェは王女として黒竜隊を率いて翔んでしまったことを思い出したらしい。
黒竜隊全員を引き連れたわけではなかったし、作戦行動中のこととして箝口令をしいてあるが、黒竜隊の大多数に正体がばれたと言ってもいい。
ルーシェもいまさらながら気がついたらしく、思わず自分から離れて青くなった顔に、どうしよう!?　と書いてある。
このウサギは決めるところではきっちり王女然として決めるくせに、その後のことはまったく考えていないようだ。
スメラギはそんなルーシェの頭をぽんぽんと叩くと、
「心配するな。黒竜隊ももう、みな『家族』みたいなものだろう？」
すこし挑発的に振ってみると、ルーシェはこちらの意図にまったく気づくことなく「それはそうですけど……」と返してきた。
そんなルーシェにまたすこし苛立ちをおぼえたスメラギは、その禍の元の唇を自分のそれで強引に封じた。

『そろそろラギ君がもどってくる時間だよ』

もはや自身の顔と同化してしまった偽りの笑顔を張りつけて告げ、シリスはシエラを部屋から追い出した。

（そう、まさに追い出し、かな）

――いなくなったりしないで。

まっすぐに見つめる蒼の瞳はかすかに潤み、真摯な想いがさざなみのように押し寄せてきた。

そんな目を異性に向けちゃダメだよ、とたしなめる隙すらなかった。

自分がなんとなく異性に好まれる性質だというのは薄々感じていたが、彼女も似た素養を持っているらしい。スメラギが陥とされた理由もよくわかる。

（べつにいなくなったりしないよ。……いまはまだ、ね）

彼女があのようなことを言いだしたのは、自分がヴィクトールに肩入れしてシエラの採決案件をぶち壊しにしたからだ。

正直なところ、あのときはヴィクトールの存在がなくても反対票に投じようと思っていた。

彼女が狙っていたのは多数決――数の勝利だ。自分もときおり利用するが、それは早期に通

過させて時間短縮をはかりたいなど、ほかに理由がある場合だ。はじめから採決に頼ったりはしない。

必要なのは、〈数〉の勝利ではなく〈理〉の勝利。

数に頼った案件は、裏切りによってたやすくひっくり返る。しかし理を説いて味方につけた者は裏切らない。それは理を説くことによってそれを選ばせたのではなく、その者自身の心が選んだ選択であるからだ。

大学で学ぶと、知識は深くなるし勝つための方法も覚える。しかしそれはその場かぎりのもの、その議案の議論にさえ勝てば良いという考えに陥りがちだ。

たしかにそれは官僚としては正しいことかもしれない。

（だが彼女はちがう）

彼女がなるのは一案件を押しとおすために死力を尽くす官僚などではなく、ずっと御前会議の玉座に座りつづける至高の存在だ。

大学に送りこむ際にシエラがその大学のやり方に染まってくることは予想がついていたし、その悪癖は会議の席に出てきたときに早めに正しておかなければと思っていた。それがたまたまヴィクトールの案件だったというだけのことだ。

しかしこちらから答えを与えずとも、彼女は二度めの御前会議できっちりと方向性を修正してきた。そんな彼女の心がけに納得した四侯たちが彼女の言葉に耳を貸し、だからこそスメラ

ギ召喚が実現したのだ。

（王女への道はちゃんと歩んでいるよ。俺がいなくても君はやっていける。自信を持っていい）

スメラギにヴィクトールとの接触について話したとき、どうしておまえみずから動いたと詰め寄られた。四侯の一家が欠けるかもしれないときにおまえまでいなくなってどうする気だと。

（そんなこと言われてもさ）

自分からしてみれば、普段のスメラギの無茶のほうがよほど責められるべきことだ。

付き合いはじめる前ならいざしらず、自分の存在がどれだけ彼女にとって――いや、この国にとって重要なものか、さっぱり理解していない。

（それってやっぱり、俺という保険がいると思っているからだと思うんだよね）

自分が大公になれなくても代わりにその地位にふさわしい相手がいる――そう思っている節がある。

そもそも代替品で済むなら、今回の事件は起きていない。

――恋情による狂気。

正気と狂気の境界線なんて引けやしない。けれどもヴィクトールは妻の死を機に踏み越えてしまった――そうなんとなく理解ってしまったから、このあたりで幕にしてあげたほうがいいんじゃないかなと思った。

たしかに自分が手を染めずとも幕を引く方法はあったのだろう。だが彼の奥方の狂気の一端

を自分が呼び覚ましてしまったなら、ほかならない自分に引かれたほうが――すべてはあいつのせいだと思った方がヴィクトールも納得できたと思うのだ。

北侯領にシエラ以外のだれかを向かわせて、『正規軍』である竜騎士団に弓を向けたならヴィクトールの罪は確定した。そのあとでシエラがいくらかばっても国として看過できない罪だ。情をはさむ余地もなく断罪することができたし、彼もそれこそを望んでいただろうに。

（温情で生きながらえて、彼はなにを思うのかな）

生きていればいつかいいことがある――そう思えるのは心に光があるもの、光を感じとる目を持つものだけだ。

その温情が感謝に変わるか恨みに変わるか。彼が生きながらえてしまった以上、自分はそれを見届ける必要があるし、それが後者であるならその感情が自分に向かうように仕向けなければいけない。

（まぁそれくらいならやってあげられるけどね）

そうやって絡みあった複雑な縁の糸は、すべて自分につながっていればいいと思う。そうすれば、もし清算が必要になったときも話が簡単でいい。

（だからいたほうがいいというならいてあげるよ。自分にまだ、使い道があるうちは、ね）

シリスが薔薇の開きはじめた中庭に目をほそめていると、部屋の扉が音もなく開かれた。

ノックも入室報告もなくこの部屋に入ってこられる相手はごく限られる。

その白のドレスを見るまでもなく、シリスは胸元に手を当ててこの王宮の――いやこのローレンシアの主を恭しく迎え入れた。

「――あらシリス、あの娘はここじゃなかったの？」

娘を探しに来たらしい彼女に、シリスは苦笑しながら窓の外を手のひらで示した。

「ふたりならあそこですよ」

女王セレネはシリスの傍らまで歩み寄り、示されるままの方向を見やると、「あら、まぁ」と声を漏らした。

王宮の構造に通じていないスメラギは、その薔薇園がこの部屋から見える位置にあることに気づいていなかったらしい。王宮の住人である彼女のほうは気づいてしかるべきだが、あの仲睦まじい状況では周囲に目が行くはずもない。

「仲が良いみたいね」

「ええ、リュースでも仲良くやっていたみたいですよ」

その言葉にセレネは目を細めると、娘への用事はそれで終わったとばかりに踵を返し、シリスは女王のために椅子を引いた。

そしてセレネが腰かけるとともに椅子を整えシリスは扉口に控えていた女官に目配せすると、女官は無言で一礼して部屋を後にした。これでほどなく彼女のための茶が運ばれてくるはず、ご相伴にあずかろうとシリスはセレネの正面の席についた。

「大切な人を守るためとはいえ、アズィールからあんな無理難題を押しつけられて、関係に罅を入れることなく使者を帰すなんてね。あの子も成長したものね。あなたの指導がいいからかしら？」

そう言って微笑むセレネに、シリスは「そのようなことは」と苦笑を漏らす。

「大事なもののためなら強くなれるでしょう。いえ、ならざるをえないと申しますか。彼女は無意識にしろちゃんと心得ていますよ」

おそらく自分が問題提起するまでもなく、彼女自身、一番大切なのはなんなのかをもうわかっているはずだ。

「それで俺になにかご用ですか」

シリスは単刀直入に切り出した。理由もなく、ここでゆっくりと茶を楽しんでいられる相手でないことは承知している。

そうしてセレネも、優雅なお茶の時間にしては殺伐とした話をためらいなく切り出した。

「アズィールで、第二皇妃が離宮に送られたそうよ」

「それは……」

セレネから告げられたのはただ一言だけ、しかしそれがもたらす意味はシリスに伝わった。

アズィールには現在三人の皇妃がいる。アルシェイドとスメラギの母である第一皇妃、ラサルスの母である第二皇妃、アシュアの母である第三皇妃だ。

もちろんただ皇帝に三人の妻がいて寵を競っているという話ではなく、皇妃にはそれぞれ政治的支援者がついており、その力関係はそう易々と変わらない。

しかし第二皇妃が離宮に送られた――皇妃の身分があるために死罪を免れただけで、実質上の後宮追放だ。よほど皇帝の勘気に触れることをしでかしたのだろう。

アズィールの門閥貴族を味方に持つ第二皇妃、彼女が廃される危機にあるとすればかならずアズィール国内は揺れる。そして三人の皇子の帝位争いにも影響を及ぼすはずだ。

すなわち第二皇子ラサルスがこのまま帝位争いの表舞台から姿を消すか、それとも窮鼠となって他の皇子ふたりを葬って後継者の座を確実なものとするか――第二皇妃の一件を機に、アズィールの次期帝位争いが本格化するのはまちがいない。

自国が荒れる前にアズィールはかならず周辺諸国に災いの種をまく――そうわかっていたからこそ、シリスはアズィールから使者が来るという連絡を受けるとすぐさま、いつもより詳細にアズィールの動向を探るように指示しておいた。

しかし事は思いのほか大事件に発展しそうだ。

(ラギ君も皇子として無関係ではいられないだろうしね)

「また大変そうだけど、これからもあの子を支えてあげてね」

「命に代えましても」

するとセレネは「ばかね」と笑って告げた。

「あなたも、ちゃんとあの子に守ってもらうのよ」

「……」

言葉をなくすシリスに対しセレネは、当然でしょう？　と言わんばかりに微笑を絶やさない。

（……まったく、この人は）

この親娘には敵わない――そう思いながらも胸の奥から涌いてくるのは温かな気持ちだ。

シリスは涌きあがる気持ちに押されるままに苦笑をこぼすと、この国の頂に咲く至高の花に恭しく一礼して見せた。

「――かしこまりました、女王陛下」

あとがき

こんにちは、九月文です。

銀の竜騎士団『ウサギ王女の光の王冠』をお手に取っていただきありがとうございます。

リュースで大学に通うルーシェにもたらされたのは、なんとスメラギとの結婚話？

しかしアズィール帝国の求めているのは〈アズィール皇子スメラギ〉と〈ローレンシア王女シエラ〉との婚礼。もし受け入れれば今後もアズィールが内政干渉してくることはあきらか。

スメラギと結婚したい、けれどこの話はなんとしても拒絶しなければいけない——複雑な立場におかれたルーシェは、王都にもどって王女シエラとして帝国の使者と対峙することに。

しかしスメラギを排斥しようとする貴族がひそかに帝国の使者と手を結び、シエラを追い詰めてきて——？

ということで第7巻は『シエラの御前会議デビュー』のお話です。

国の内側にはスメラギを追い落とそうとする貴族が、外側にはスメラギの皇子としての扱いを求める使者が、さらに頼みの綱のあの人が……ということで八方ふさがりなシエラですが、いろんな人に支えられながらがんばっているようです。

『王女のたまご編』最終巻、ぜひお見届けくださいませ！

さて、年もあらたまりまして、あけましておめでとうございます。
今年も『銀の竜騎士団』をなにとぞよろしくお願い申し上げます。

去年の秋は紅葉狩りに行けなかったのですが、行く先々で銀杏を見かけました。
春は桜、秋は紅葉という印象がありますが、思い返してみるとわたしの周りにはいつも銀杏がありました。小学校や高校にはおおきな銀杏の木がありましたし、大学には校門からつづく銀杏並木があって、落葉のころには木々も道路も視界一面黄金色に染まって、そこに雨が降るとつるつるすべりそうになったのもいい思い出です。
地元の滋賀にいたころは山に囲まれていて、自然なんて探すまでもなく季節感にあふれていました。東京には季節感がないのかな……と東京を知らない高校生当時は思っていたのですがそんなことは全然なくて、ちょっとした街角に木が植わっていたり公園が充実していたりして、ああ四季のある国でよかったな、としみじみ思った次第です。

お話にもどりまして本巻の舞台は「王宮」ですが、前巻は「大学」ということでなんと前巻表紙のルーシェは隊帽＆眼鏡着用でした！　もちろん隊長からの借り物です！　彼氏の物を借

りるって親密な感じでいいですね！

それよりも親密なのはスメラギの左手です。涼しい顔をしながら隊長、あの……いえ、いつものことですけどね。彼もまだ十八歳、素晴らしい彼女のおみ足と魅惑の腰つきを前にしてスルーできるほど達観していないでしょうし。

スメラギは右手には試験用紙を持っているのですが、しっかり一問まちがえてますルーシェ。

そして答案の裏にはルーの落書きが……。

「落書きやってる時間があるならしっかり見直ししろ！」

とあとできつくお叱りを受けたにちがいありません。

でも左足をつくルーシェの膝が痛くないように隊服の裾を敷いてあげていたり、ちゃんと優しいところもあるようですね、隊長。

挿絵は、普段は隊服姿（ときどきドレス姿）なルーシェの私服姿がたくさん見られて大変眼福でした。

初・女の子友だちのカーラは、本物より王女の貫録のあるお姉さま。

彼女に触発されたのか、ルーシェもいつもより数段凛々しく王女様然として、ルー召喚シーンのなんともかっこいいこと！　召喚された成竜のルーもすごくかっこよかったです！

ですがちびルーのときにはこっそり、ぷっくりお腹が激写されていましたね……ダイエッ

トしようねルー……と心に誓いました。

そして最後にさわやかに登場してきたシリスさん。隊長とそろってちまちまサイズになってめちゃくちゃ可愛かったです！

前巻はカイトも随所にいて、いいな竜騎士団、入りたい……と思いました。みんな鍛えてますし、『竜騎士男子』とかいう本があったらかなりいい画が収められるのではないでしょうか。

明咲トウルさま、毎巻素敵なイラストをありがとうございます！

そしてここまで読んでくださったみなさま。

ルーシェが王宮の外でいろいろ学んできたことが、王女としての彼女の血肉になってきたようです。内外ともにまた不穏な空気が漂いはじめていますが、これからも彼女の歩む道を見守っていただけると嬉しいです。

次巻は短編集になります。あの人の過去とかいろいろ書ければいいなと思います。

では、またみなさまとお会いできることを祈りつつ。

九月　文　拝

BEANS BUNKO

「銀の竜騎士団　ウサギ王女の光の王冠」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「九月文」先生・「明咲トウル」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

銀の竜騎士団（ぎんりゅうきしだん）　ウサギ王女の光の王冠（うさぎおうじょのひかりのおうかん）
九月文（くつきあや）

角川ビーンズ文庫　BB68-13　17805

平成25年2月1日　初版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――旭印刷　製本所――BBC
装幀者――micro fish

本書の無断複製(コピー、スキャン、デジタル化等)並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。角川グループ読者係までご連絡ください。(古書店で購入したものについては、お取り替えできません)
電話 049-259-1100（9：00～17：00/土日、祝日、年末年始を除く）
〒354-0041　埼玉県入間郡三芳町藤久保550-1

ISBN978-4-04-100683-2 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Aya KUTSUKI 2013 Printed in Japan

第12回 角川ビーンズ小説大賞 原稿大募集!

大賞 正賞のトロフィーならびに副賞300万円と応募原稿出版時の印税

角川ビーンズ文庫では、ライトノベルの新しい書き手を募集いたします。
ビーンズ文庫の作家として、また、次世代のライトノベル界を担う人材として世に送り出すために、「角川ビーンズ小説大賞」を設置します。

【募集作品】
エンターテインメント性の強い、ファンタジックなストーリー。ただし、未発表のものに限ります。受賞作はビーンズ文庫で刊行いたします。

【応募資格】
年齢・プロアマ不問。

【原稿枚数】
400字詰め原稿用紙換算で、150枚以上300枚以内

【応募締切】2013年3月31日(当日消印有効)
【発　　表】2013年12月発表(予定)
【審査員】(敬称略、順不同)
金原瑞人　宮城とおこ　結城光流

【応募の際の注意事項】
規定違反の作品は審査の対象となりません。
■原稿のはじめに表紙を付けて、以下の3項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 原稿枚数(データ原稿の場合は400字詰め原稿用紙換算による枚数も必ず併記)
■2枚目に以下の8項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 氏名(フリガナ)
④ 郵便番号、住所(フリガナ)
⑤ 電話番号、メールアドレス
⑥ 年齢
⑦ 略歴(文学賞応募歴含む)
⑧ サイトをお持ちの場合はサイトアドレス
■1200字程度(400字詰め原稿用紙3枚)のあらすじを添付してください。

●パソコンデータ原稿の場合
・必ずフロッピーディスク、またはCD-R(ファイル形式はテキスト、MS Word、一太郎)を添付し、そのラベルにタイトルとペンネームを明記すること。
・プリントアウトは必ずA4判の用紙で、1ページにつき40字×30行の書式で印刷すること。ただし、400字詰めの原稿用紙に印刷は不可。感熱紙は字が読めなくなるので使用しないこと。プリントアウトした原稿は、必ず通し番号を入れ、右上をバインダークリップでとじること。原稿が厚くなる場合は、2～3分冊してもかまいません。その場合、必ず1つの封筒に入れてください。ひもやホチキスでとじるのは不可です。

●ワープロデータ原稿の場合
・機種は問いません。ファイル形式、書式、原稿サイズ、プリントアウトに関してはパソコンと同様です。

●手書き原稿の場合
・A4判の400字詰め原稿用紙を使用。鉛筆書きは不可。(台紙つきの原稿は1枚ずつ切り離してください)

【注意】
・同じ作品による他の文学賞への二重応募は認められません。
・入選作の出版権、映像化権を含む二次的利用権(著作権法第27条及び第28条の権利を含む)は角川書店に帰属します。
・応募原稿及びフロッピーディスクまたはCD-Rは返却いたしません。必要な方はコピーを取ってからご応募ください。
・ご提供いただきました個人情報は、選考および結果通知のために利用いたします。
・第三者の権利を侵害した作品(既存の作品を模倣する等)は無効となり、その場合の権利侵害に関わる問題はすべて応募者の責任となります。

【原稿の送り先】〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19
(株)角川書店　ビーンズ文庫編集部「第12回角川ビーンズ小説大賞」係
※なお、電話によるお問い合わせは受け付けできませんのでご遠慮ください。

9784041006832

ISBN978-4-04-100683-2
C0193 ¥533E

定価：本体533円（税別）

1920193005332

BEANS BUNKO

銀の竜騎士団
ウサギ王女の光の王冠

九月 文

敵国アズィールから皇子スメラギと王女シエラの婚礼を求める親書が届き、王宮内は大混乱！　隊長とは結婚したいけど、ローレンシアの王女としてこの申し出は絶対に受けられない！「なんとしても突っぱねろ!!」というスメラギの言葉を胸に、シエラは帝国の使者と対峙することに。しかしスメラギ排斥を目論むローレンシアの〈貴族派〉の邪魔に遭ってしまい、まさかの交渉決裂！ **次期女王候補は、最大の関門を突破できるの!?**